

相原遺跡・下坂田西遺跡

県道白丹竹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

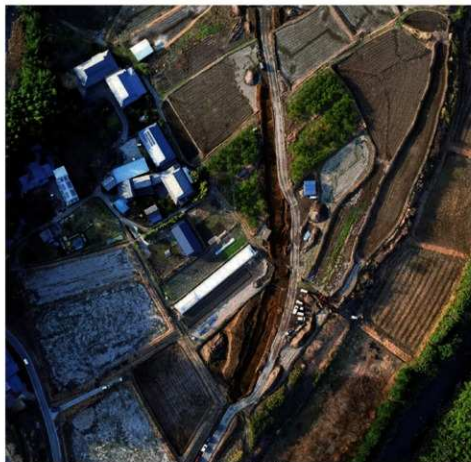
大分県教育庁埋蔵文化財センター

相原遺跡 下坂田西遺跡

— 県道白丹竹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2012

大分県教育庁埋蔵文化財センター



巻頭図版1 相原遺跡



巻頭図版2 下坂田西遺跡

序

本書は大分県教育委員会が大分県土木建築部竹田土木事務所の依頼を受けて、平成21～22年度に県道白丹竹田線道路改良工事に先立って実施した相原遺跡と下坂田西遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する竹田市稲葉川流域は、台地を侵食した深い谷と河岸段丘が複雑に入り組んだ地形で、台地が連なる竹田市南部の地形とは趣を異にしており、台地上のみならず、河川のそばの段丘上に数多くの集落遺跡が残されています。

相原遺跡の調査では、今から3500年前頃の縄文時代後期の住居跡等が発見されました。また下坂田西遺跡は以前から竹田市教育委員会の調査によって、縄文時代から古墳時代にかけて断続的に集落が営まれていたことが知られていましたが、今回の調査ではさらに古墳時代前期の竪穴住居からなる集落の一部が発見されました。これらの調査資料は当時の人々の生活や文化習俗を明らかにする上で重要な学術資料になります。

本書が、埋蔵文化財の保護に向けて地域の先人の足跡を理解する資料として、また学術研究の一助として活用いただければ幸いです。

おわりに寒い冬、暑い夏におこなった発掘調査に、御支援、御協力をいただきました関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成24年3月30日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長 山口博文

例 言

- 1、本書は県道白丹竹田線建設に伴い大分県土木建築部竹田工事事務所の依頼を受けて、大分県教育庁埋蔵文化財センターが実施した相原遺跡と下坂田西遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、本書に報告する遺跡は2009（平成21）年度に本調査を実施した相原遺跡と、2010（平成22）年度に実施した下坂田西遺跡である。
- 3、本書におさめた発掘調査の概要については2009年度と2010年度の大分県教育庁埋蔵文化財センターのホームページ上に速報してあるが、本書をもって正式報告とする。
- 4、第1～3章は江田と田中が、第4章相原遺跡の執筆は江田豊が、第5章下坂田西遺跡は田中裕介が担当した。
- 5、出土遺物および実測図・写真等は大分県教育庁埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 6、本書の編集は江田と田中が担当した。

目 次

第1章 はじめに

- | | |
|----------------|---|
| 第1節 調査に至る経過 | 1 |
| 第2節 調査の経過と調査組織 | 1 |

第2章 稲葉川流域の地理と歴史

- | | |
|-----------|---|
| 第1節 地理的環境 | 2 |
| 第2節 歴史的環境 | 2 |

第3章 相原遺跡

- | | |
|-----------------|----|
| 第1節 調査概要 | 7 |
| 第2節 調査区の配置と基本土層 | 8 |
| 第3節 遺構と遺物 | 11 |
| 第4節 まとめ | 50 |
| 写真図版 | 52 |

第4章 下坂田西遺跡

- | | |
|------------------|----|
| 第1節 調査の経過 | 62 |
| 第2節 遺跡の概要と基本層序 | 63 |
| 第3節 縄文・弥生時代の遺物 | 68 |
| 第4節 古墳時代前期の遺構と遺物 | 70 |
| 第5節 古墳時代後期の遺物 | 86 |
| 第6節 中世の遺構 | 86 |
| 第7節 成果と課題 | 88 |
| 写真図版 | 93 |

（報告書抄録・巻末）

挿 図 目 次

第2章	
第1図	遺跡分布図……………3
第2図	調査路線図……………4
第3章 相原遺跡	
第1図	調査区と周辺地形図……………7
第2図	基本土層図……………8
第3図	遺構配置図……………9
第4図	竪穴遺構実測図……………11
第5図	竪穴遺構出土遺物実測図1……………12
第6図	竪穴遺構出土遺物実測図2……………13
第7図	1号掘立柱建物実測図……………14
第8図	2号掘立柱建物実測図……………15
第9図	1～3号溝配置図……………16
第10図	溝実測図(1～3号溝)……………17
第11図	4～7号溝配置図……………19
第12図	4・5号溝実測図……………20
第13図	6号溝実測図……………21
第14図	7号溝実測図……………21
第15図	1号溝出土土器実測図1……………23
第16図	1号溝出土土器実測図2……………24
第17図	1号溝出土土器実測図3……………25
第18図	1号溝出土土器実測図4……………26
第19図	2号溝出土土器実測図……………27
第20図	3号・4号溝出土土器実測図……………28
第21図	5号溝出土土器実測図……………29
第22図	5号・6号・7号溝出土土器実測図……………30
第23図	7号溝出土土器実測図……………31
第24図	1号溝出土土器実測図1……………32
第25図	1号溝出土土器実測図2……………33
第26図	1号溝出土土器実測図3……………34
第27図	4号・5号・6号・7号出土土器実測図……………35
第28図	1号土坑実測図……………36
第29図	2号土坑実測図……………36
第30図	1号土坑出土土器実測図1……………37
第31図	1号土坑出土土器実測図2……………38
第32図	1号・2号土坑出土土器実測図……………39

第33図	1号土坑出土土器実測図……………40
第34図	包含層出土土器実測図1……………41
第35図	包含層出土土器実測図2……………42
第36図	包含層出土土器実測図……………43
第37図	包含層出土土器及び表面採集土器実測図……………44

第4章 下坂田西遺跡	
第1図	調査区の位置……………62
第2図	1区・2区全体遺構図……………65
第3図	2区調査区東壁南北土層図……………66
第4図	縄文・弥生時代の遺物……………69
第5図	SH02平面図・見通し図……………70
第6図	SH03・SK27平面図・見通し図……………71
第7図	SH04平面図・見通し図……………72
第8図	SH04東西土層図……………72
第9図	SH04見通し図……………73
第10図	SH04出土遺物……………74
第11図	SH06平面図・見通し図・詳細出土状況図……………75
第12図	SH06南北土層図……………76
第13図	SH06出土遺物……………77
第14図	SH24平面図・見通し図……………78
第15図	SH24東西土層図……………79
第16図	SH24土坑1平面図・見通し図……………79
第17図	SH24出土遺物1……………80
第18図	SH24出土遺物2……………81
第19図	SH25平面図・見通し図……………82
第20図	SH31平面図・見通し図……………83
第21図	SH31出土遺物……………83
第22図	SK05平面図・見通し図……………84
第23図	SK05東西土層図……………84
第24図	SK05出土遺物……………85
第25図	SK26平面図・見通し図……………85
第26図	SK26東西土層図……………85
第27図	古墳時代後期の出土遺物……………86
第28図	SB01平面図・見通し図……………87
第29図	SB34平面図・見通し図……………87
第30図	下坂田西遺跡の遺構分布……………89

表 目 次

第3章 相原遺跡	
第1表	出土土器観察表(1)……………14
第2表	出土土器観察表(1)……………14
第3表	出土土器観察表(2)……………45
第4表	出土土器観察表(3)……………46
第5表	出土土器観察表(4)……………47
第6表	出土土器観察表(5)……………48
第7表	出土土器観察表(2)……………49

第4章 下坂田西遺跡	
第1表	遺構一覽表……………67
第2表	古墳時代前中期土器編年対応表……………90
第3表	遺物観察表1—土器……………91
第4表	遺物観察表2—石器……………92

写真図版目次

巻頭図版1 相原遺跡

巻頭図版2 下坂田西遺跡

第3章 相原遺跡

地元小学生たちの体験発掘風景……………5

図版1……………53

調査区空中写真・基本土層写真・竪穴遺構遺物出土状況・竪穴遺構完掘状況・1号掘立柱建物完掘状況・2号掘立柱建物完掘状況・1～3号溝完掘状況(西から)・1～3号溝完掘状況(東から)

図版2……………54

5号溝遺物出土状況・4～5号溝完掘状況(東から)・6号溝完掘状況(西から)・7号溝完掘状況(北から)・1号土坑完掘状況・1号土坑遺物出土状況・2号土坑完掘状況・2号土坑遺物出土状況

図版3……………55

遺物土器No.1～4、7～14、19、27・28、33・34、37・38

図版4……………56

遺物土器No.41、46・47、49～51、53、55、58、65・66、70、77～79、86・87、95～99

図版5……………57

遺物土器No.107・108、110・111、113、120、124～129、131、134～137、139～142、145

図版6……………58

遺物土器No.146、154～156、162、166、169、174、177、180・181、183、193、199～203、208、211、214、236・237、240、242、244～246、251・252

図版7……………59

遺物土器No.253、259、262、264、266～268、274、278・279、281、284～286、289・290、292・293、295～297、299～301

図版8……………60

遺物石器No.217～224、227～229、233・234、270・271、308、310～317

第4章 下坂田西遺跡

2010年8月猛暑の夏……………61

写真1 全体空中写真……………64

図版1……………93

1区全景・2区全景・2区東壁南北土層・土層細部

図版2……………94

竪穴遺構SH02・竪穴建物SH03地床部・SH03全景・竪穴建物SH04全景

図版3……………95

竪穴建物SH06全景・SH06土器出土状況1・SH06土器出土状況2・SH06出土状況3・SH06土層断面

図版4……………96

SH06床面掘下げ状況・竪穴建物SH24全景(北から)・竪穴建物SH24全景(東から)

図版5……………97

SH24土層断面・SH24土坑2、上層出土状況、SH24土坑1、小型壺出土状況・SH24床面掘下げ状況

図版6……………98

竪穴建物SH25、竪穴建物SH31出土状況、SH31完掘状況

図版7……………99

土坑SK05完掘状況、SK05炭焼土出土状況、土坑SK26完掘状況、掘立柱建物SB01、掘立柱建物SB02

図版8……………100

縄文・弥生時代の遺物No.1～21

図版9……………101

縄文・弥生時代の遺物No.22～27、SH04出土遺物No.28～35、SH06出土遺物No.38～42、45

図版10……………102

SH06出土遺物No.43・44、46～50、SH24出土遺物No.54・55、57

図版11……………103

SH24出土遺物No.62・63、SK05出土遺物No.68、古墳時代後期出土遺物No.71～73

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

県道638号白丹竹田線は稲葉川とほぼ並行して走るもので、平成8年度より道路改良工事が継続して行われている。当該地区周辺において前記道路改良工事に係る未施工区間は、字相原地区と稲葉川を挟んで対峙する下坂田地区の2カ所を残すのみとなった。2008（平成20）年度に、竹田土木事務所の依頼を受けて試掘調査を実施したところ、相原地区及び下坂田西地区共に、施工区間内において住居跡や溝等の遺構が確認された。

その後、竹田土木事務所と協議を行った結果、2009（平成21）年度に相原地区の本調査、2010（平成22）年度に下坂田西地区の本調査を行うこととなった。相原遺跡は、竹田市大字志土知字相原に所在し、稲葉川が大きく蛇行しながら形成された台地上に形成されている。

下坂田西遺跡は、隣接する水田部分の圃場整備に伴って、竹田市教育委員会が発掘調査を2007（平成19）年度に行った。その結果、縄文時代後期後半の遺物を伴する住居跡や溝、古墳時代後期の住居跡等が確認された。この調査については、当該地区を中心として、縄文時代後期から古墳時代にかけての集落が営まれていた場所であることが確認されている（註1）。当埋蔵文化財センターの実施した試掘調査結果においても、同様の状況が確認されたことになった。

註1 城戸誠『上深迫遺跡 下坂田東遺跡 下坂田西遺跡』2011 竹田市教育委員会

第2節 調査の経過と調査組織

調査団の構成

2009（平成21）年度 相原遺跡（現地調査）

調査主体	大分県教育委員会	
調査総括	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	佐藤英一
	同 次長	坂本嘉弘
	同 一般事業班課長補佐（総括）	小林昭彦
調査員	同 大型事業班主幹（担当）	江田 豊
	同 一般事業班主幹	友岡信彦
	同 資料管理班主幹	高橋信武
調査支援	株式会社 九州文化財総合研究所	調査技師 芹川利幸
		調査助手 丸山武水

2010（平成22）年度 下坂田西遺跡（現地調査）

調査主体	大分県教育委員会	
調査総括	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	山口博文
	同 次長	坂本嘉弘
	同 次長兼一般事業班参事（総括）	宮内克己
調査員	同 一般事業班主幹（担当）	田中裕介
調査支援	株式会社九州文化財総合研究所	調査技師 松浦 智
		調査助手 吉田正仁

2010（平成22）年度 相原遺跡（整理実測等）

調査主体	大分県教育委員会	
調査総括	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	山口博文
	同 次長	坂本嘉弘
	同 次長兼一般事業班参事（総括）	宮内克己
	同 大型事業班主幹（担当）	江田 豊
調査支援	株式会社九州文化財総合研究所	調査技師 唯津幸幸
	整理 作業 石井蓉子 河野いずみ 古殿鈴代 岩本佐智子	
	実測浄書作業 金丸涼子 松本ひとみ 高井光子	

調査主体	大分県教育委員会	
調査総括	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	山口博文
	同 次長	坂本嘉弘
	同 次長兼一般事業班参事（総括）	宮内克己
調査 担当者	同 一般事業班主幹	田中裕介（編集、下坂田西遺跡担当）
	同 大型事業班主幹	江田 豊（相原遺跡担当）
下坂田西遺跡（整理実測等）調査支援	株式会社イビソック 調査技師	斎藤亮啓
	整理 作業 石井蓉子 古庄博美 金田智美 河野いずみ 高羽恵子 新貝美代子	
	実測浄書作業 上杉里枝子 鍋島千恵子 田嶋智子 山口美紀	

第2章 稲葉川流域の地理と歴史

第1節 地理的環境（第1図）

相原遺跡と下坂田西遺跡が所在する大分県竹田市下坂田地区周辺は、北に久住火山に起因する高原と、大野山地の裾野に広がる丘陵からなる。下坂田西地区はそのような山地から派生する小丘陵と河川的作用によって形成された河岸段丘上の小平野からなる。

稲葉川は、熊本県阿蘇郡産山村の阿蘇外輪山や大分県竹田市久住町の久住山系に発し、多くの河川に枝分かれした上流域を形成している。それらの河川が稲葉川として一本に合流する地点が下坂田西地区である。稲葉川はさらに竹田市街地の北側を流れ、玉来川と合流して大野川となる。

相原遺跡と下坂田西遺跡は、久住川が稲葉川と合流する地点に近い、稲葉川が蛇行して形成した河岸段丘上に立地する。標高は約350mである。

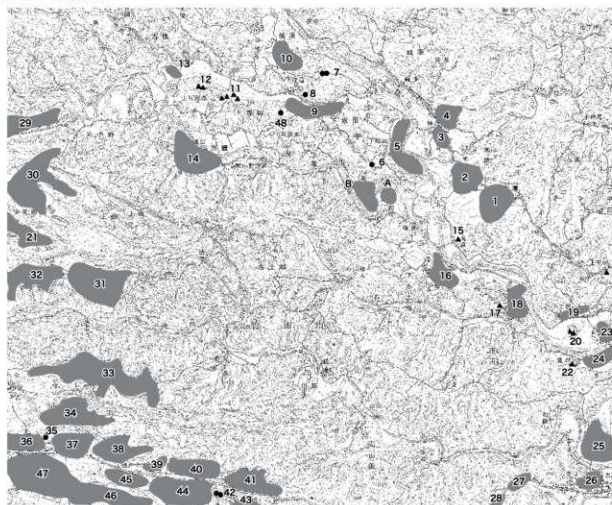
第2節 歴史的環境（第1図）

稲葉川流域の河岸段丘や河川平野を見下ろす丘陵や台地上には、宇土遺跡（第1図10）をはじめとする縄文時代早期の集落遺跡が発見されているが、河川流域の河岸段丘上に遺跡が増加するのは縄文時代中後期になってからである。下坂田西遺跡（B）は縄文時代後期後半に30軒近くの竪穴建物が発見された集落で、中央には集落を南北に分断する直線的な溝が掘られていた。また竪穴の配置も環状を呈している。今回の調査区からは縄文晩期の遺物も見つかっているところから、縄文時代終末まで集落が存続していた可能性は高い。しかしその後弥生時代前期から中期前半の遺構や遺物は知られていない。その時期の集落は城原八幡神社遺跡（4）のように丘陵上に展開する。その後弥生時代後期後半から集落が再び谷部に立地するようになり、今回調査した古墳時代前期末までの集落がひろがり、さらに後期まで集落が存在する。また隣の谷に所在する下坂田東遺跡（5）では同じく弥生時代後期後半から谷部の河岸段丘上に集落が進出し、奈良時代まで断続的に集落が選地されている。

同時にこの稲葉川流域では、古墳時代中期以後、舟形石棺を主体部とする円墳が数多く築造され、後期になると横穴墓群が多数存在する。中期初頭の御祖神社舟形石棺（8）、舟ノ辻古墳（6）や谷川古墳（48）の舟形石棺などがこの流域で発見され、中期の円墳としては4基の円墳からなる宇土古墳群（7）が下坂田地区の上流に築造されている。また後期から7世紀の横穴墓群は市用横穴墓群（17）を筆頭に、旧直入郡内で最も横穴墓群が多く集中する地域である。古代において直入郷に編成される背景となっている。

奈良時代においては竹田市域は豊後国直入郡に属する。直入郡は朽網郷、直入郷、三宅郷、柏原郷の4ヶ郷と直入駅という5つの行政単位に編成されていた。直入郡衙や直入駅の所在地が詳らかでない現在、下坂田地区がどの行政単位に属していたか正確には不明であるが、中世には直入郷に属していたところから、古代においても直入郷に属していたと推定される。またこの下坂田地区に近い志土知地区は古代の紫草の産地と考えられている。

第1図 遺跡分布図



遺跡名一覧

(国土地理院 2万5千分の1図幅「桜町」を加工)

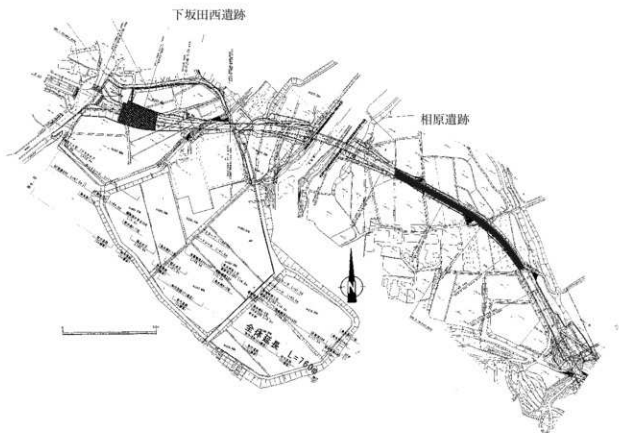
A 相原遺跡	10 宇土遺跡	21 中尾岡遺跡群	32 久保遺跡群	43 戸上国方遺跡
B 下坂田西遺跡	11 法地坊横穴墓群	22 龜付横穴墓群	33 袖野遺跡群	44 大塚遺跡
1 紙漕遺跡	12 座主横穴墓群	23 下村遺跡	34 上今遺跡	45 田頭遺跡
2 地藏原遺跡	13 古岡津留遺跡	24 龜付遺跡	35 蜘蛛塚古墳	46 下石木遺跡
3 六麦遺跡	14 炭電遺跡	25 岩瀬遺跡	36 菅生小学校遺跡	47 下菅生B・C遺跡
4 城原八幡神社遺跡	15 鬼森横穴墓群	26 杖立神社遺跡	37 菅生集落遺跡	48 谷川古墳(石棺)
5 下坂田東遺跡	16 平原遺跡	27 六井迫第2遺跡	38 石井入口遺跡	
6 舟ノ辻遺跡(石棺)	17 市用横穴墓群	28 六井迫第3遺跡	39 桑木遺跡	
7 宇土古墳群	18 市用遺跡	29 阿鹿野遺跡	40 小園遺跡	
8 御祖神社石棺	19 横舞遺跡	30 野口遺跡群	41 戸上政所遺跡	
9 南光寺遺跡	20 南光寺横穴墓群	31 栗戸遺跡群	42 七つ森古墳群	

大分県(国境線・国境中実線省略)



「大分県の地名」
平凡社より

第2図 調査路線図（相原遺跡と下坂田西遺跡）



奈良時代の遺跡としては城原神社遺跡（4）において方形の溝によって区画された掘立柱建物群が発見されており、城原神社が9世紀に創建された伝承を有することとかわりがある。

中世に遡ると今日の竹田市一帯は直入郡と称され、そこには朽網郷・直入郷・入田郷が存在するが、入田郷は11世紀半ばにおける郡郷制の再編によってあらたに直入郷から分立したものと考えられている。下坂田地区は1414（応永21）年の「直入郷段銭結解土代」に地名が記されているところから、中世には直入郷に属していたことがわかる。その直入郷は14世紀後半には大友惣領家が知行する守護領であり、14世紀末に下坂田地区は豊後府内に所在した万寿寺領になったらしい。

下坂田地区は肥後藩領である久住・白丹地区と岡藩の城下町竹田市街地との中間地点にあたり、久住と竹田を結ぶ近世の道路「竹田道」沿線となる。近世では岡藩領北尾霧組に属していた。

参考文献

『竹田市誌』第1巻 2009 竹田市

城戸誠『上深迫遺跡 下坂田東遺跡 下坂田西遺跡』2011 竹田市教育委員会

第3章 相原遺跡



地元小学生たちの体験発掘風景

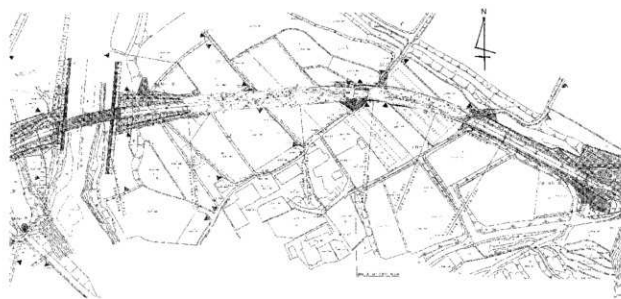
第1節 調査概要

相原遺跡は、平成20年度に行った試掘調査により、縄文時代の遺構を伴う遺跡であることが確認されており、竹田市教育委員会が当遺跡と稲葉川を挟んでほぼ隣接する下坂田西遺跡で、平成19年度に実施した発掘調査において確認された縄文時代後期の竪穴遺構が、当遺跡周辺まで広がることを想定しつつ調査に入った。

調査は竹田土木事務所との協議により、工事用道路等の確保のために一部道路幅の半分ずつを切り返して調査を行うこととした。

平成21年1月6日から、表土剥ぎに入り約1ヶ月の調査を行い、その後切り返しを行い残りの部分の調査を実施2月15日に調査は終了した。なお、相原地区は、昭和40年代に比較的大規模なほ場整備が行われていたため、部分的に大きく削平を受けて遺構・遺物が認められない場所もあったが、遺構は比較的良好な状態で保存されていた。調査の結果、当初縄文期の竪穴遺構が複数確認されることを想定していたが、長さ10～30m程度、幅1～1.5m程度の規模を持つ溝が調査区にほぼ並行するように多数確認された。これらの溝からは、縄文時代後期中葉の西平式系統の土器や晩期後半の突帯文土器が出土している。また調査の終盤には、調査区北西部において縄文後期の遺物が出土する竪穴遺構が1基確認された。

また、わずかであるが、弥生時代後期の土器や16世紀以降の輸入陶磁器が副葬された土坑や掘立柱建物2棟が発見された。



第1図 相原遺跡 調査区と周辺地形図 (1/2500)

第2節 調査区の配置と基本土層

相原遺跡を含む周辺地形は、稲葉川の河川活動により形成されたものであり、かつては隣接する下坂田西遺跡が立地する場所と連続した地形であった。ここに稲葉川が大きく南北方向から東西南方向へと蛇行したことにより、連続する地形が寸断され、相原遺跡周辺は南側を除く三方を川に囲まれた独立した台地状の河岸段丘地形が形成されたものである。

県道道路建設予定地は、この台地の先端部分をほぼ東西方向に横断するような形で計画されることとなった。このうち、平成20年の試掘調査で遺構・遺物が確認された長さ約130m、幅9m、面積1,200㎡に調査区を設定した。(第1図)

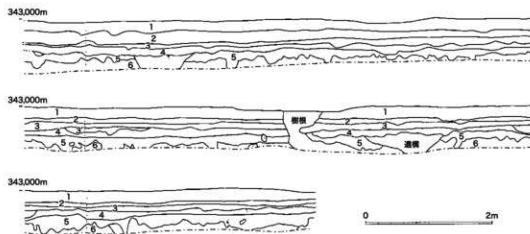
第3図に示したように、調査区の中央付近が昭和40年代に実施されたほ場整備等の影響により、大きく削平を受けた場所が確認されたため、この場所を扶むような形で南北2カ所に調査区を設定し調査した。

南側の調査では、3条の溝、土坑2基、ピットが検出された。溝及び1号土坑としたものは縄文時代後期から晩期にかけての遺物が出土した。2号土坑は、出土遺物から中世の所産である。

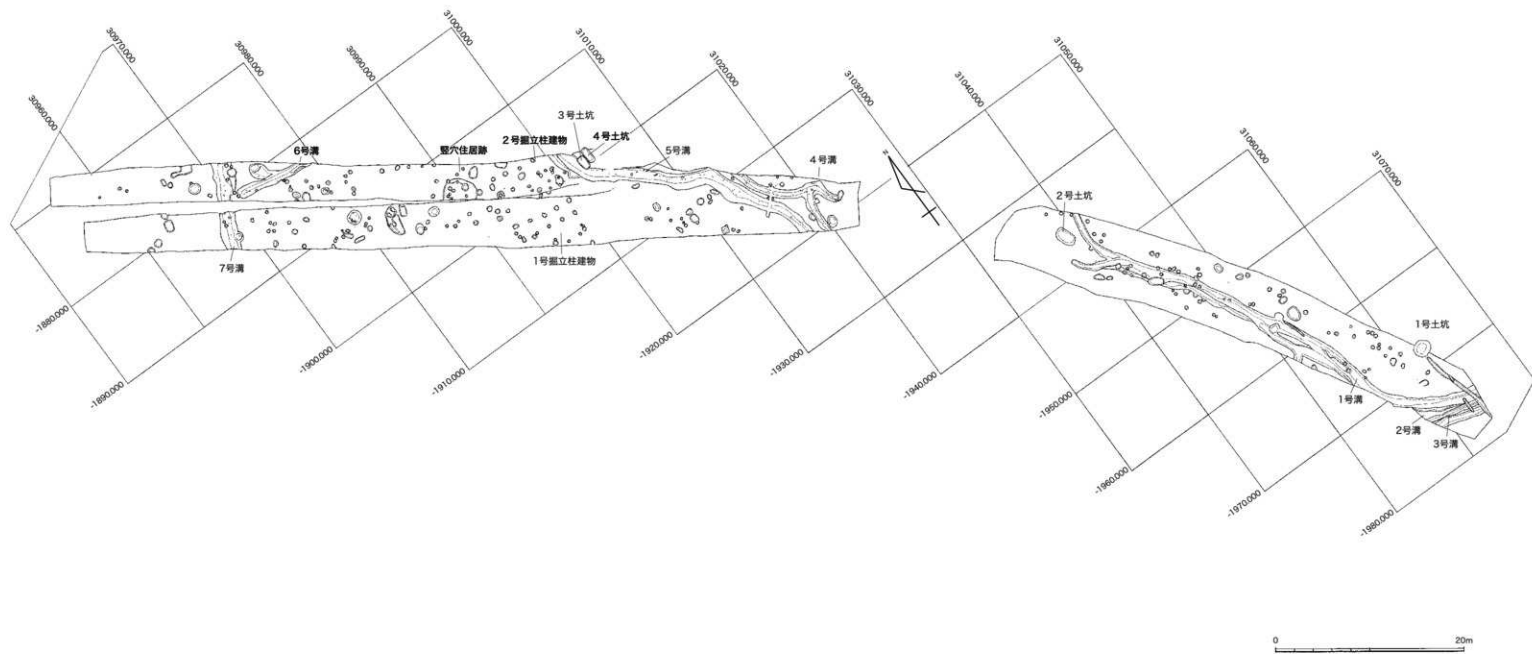
北側の調査では、竪穴遺構1基、溝4条、掘立柱建物2軒、大型動物の埋葬を行った土坑2基、ピットが検出された。竪穴住居跡は縄文時代後期中葉、溝は縄文時代後期から晩期にかけて、掘立柱建物は中世、大型動物(牛もしくは馬)埋葬土坑は近世から現代にかけてのものと思われる。

なお、調査終盤には近隣小学校である竹田市立城原小学校の6年生7名による体験発掘が行われた。

基本土層については、第2図に示したもので、I層が現耕作面で、黄灰色軟質土層である。現在は、主にミカン畑となっているが、元々は水田が営まれていた地域でありその名残が残るものである。II層は、灰黄褐色でやや軟質の層である。鉄分を多く含むことから、かつての水田耕作による酸化鉄等の沈殿の痕跡が認められるものである。III層は、黒褐色～黒色土で、非常に硬く締まった層である。II層と同様、鉄分を含む層であり水田耕作の痕跡が認められるものである。IV層は、黒色土でクロボク層と呼称される層である。III層に比べ軟質の層であり、下位に炭化物を若干含んでいる。V層は、IV層と同様黒色土層であるが、IV層に比べてやや堅めの層で下位に行くに従って褐色系の土が混じる。遺物包含層で縄文時代から弥生時代の遺物が含まれる。VI層は、鈍い黄褐色のローム質の層で、黒褐色土がブロック状に含まれる。調査中の遺構の大半はこの層の上面で検出された。



第2図 相原遺跡 基本土層図(調査区南西壁)(1/60)

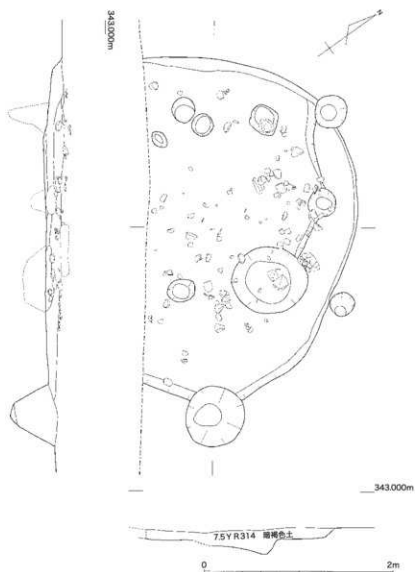


第3圖 相原遺跡 遺構配置圖 (1/400)

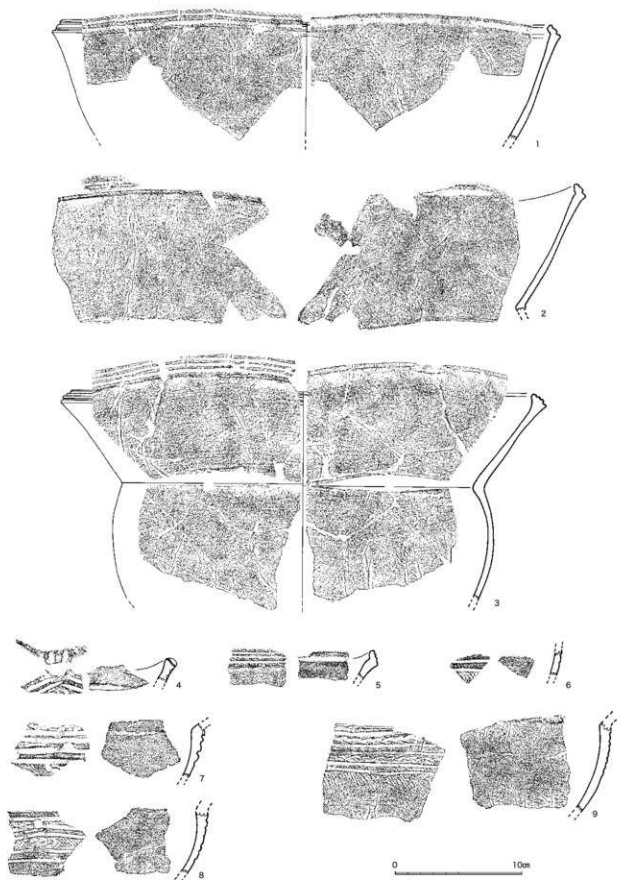
第3節 遺構と遺物

1. 竪穴遺構 (第4図)

北側調査区中央部分で検出された、円形の竪穴住居跡で南半部約3分の1は削平されている。規模は3.65m×2.18m+αである。深さは10～15cm前後である。柱穴に規格性はないため主柱穴等の確認はできなかった。また、がなどの付属施設は認められないが、北東側の床面に長軸40cm、短軸35cm、深さ10cm程度の大型のピットが掘られている。床面には貼り床等は確認できなかったが、北壁沿いの床面に一部低い段がつく。遺物は、ほぼ床面直上で出土し、縄文時代後期中葉～後半の深鉢や浅鉢、二次加工剥片などが出土した。



第4図 相原遺跡 竪穴遺構実測図 (1/40)

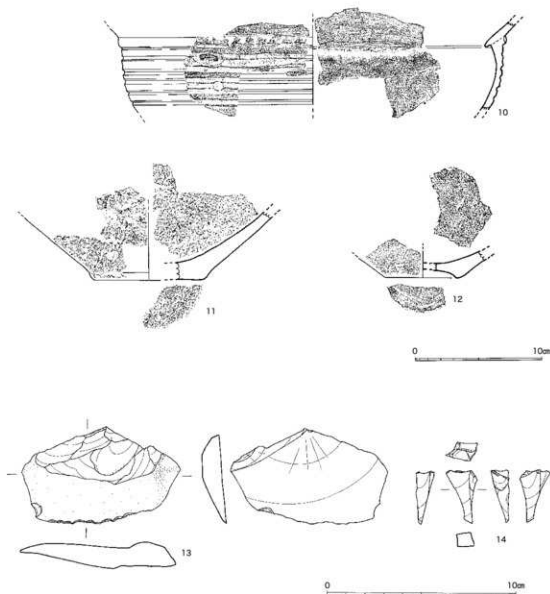


第5図 相原遺跡 竪穴遺構出土遺物実測図1 (1/3)

竪穴遺構出土遺物 (第5図1～第6図14)

1は、深鉢で、胴部から口縁部にかけて広がり、口縁端部が内側に屈曲しその屈曲部から上位に磨消縄文を施す。その後沈線を2条巡らせる。器壁は内外面とも研磨されている。復元口径38cmである。2は、口縁部の広がり1に比べて大きく広がるもので、端部が内側に屈曲する。この屈曲部分に磨消縄文を施した後に、沈線を2条巡らせる。口縁部は波状口縁である。器壁は内外面とも研磨を施す。3は、やや丸みを帯びた胴部から外反する口縁部が伸び、端部が内側に屈曲し、その屈曲部分に磨消縄文を施す。その後3条の沈線を巡らす。器壁は内外面とも研磨されている。復元口径は36cmである。4は、波状口縁で、口唇部に刺突文を施す。5も口縁部、6～10は胴部の破片である。いずれも磨消縄文+沈線の組み合わせが基本であるが、9には、沈線の上に波状の沈線を施している。10は、胴部上部から口縁部へと開く部分に磨消縄文施文後、5条の沈線を巡らす。11～12は深鉢の底部で、12は若干上げ底気味の形状を持つ。縄文時代後期中葉以降の西平式土器系統の遺物である。

13は、二次加工剥片で石材は結晶片岩、打面に対して反対側面に細かい使用痕が認められる。14は、姫島産黒曜石の剥片である。



第6図 相原遺跡 竪穴遺構出土遺物実測図2 (1/2 1/3)

第1表 相原遺跡 出土土器観察表(1)

棟号 番号	遺物 番号	遺構	器種	口径 (口幅)	器高 (口高)	最大径 底部径	外面の文様・調整	外面色調	内面の文 様・調整	内面色調	胎土		備考
											陶質石	長石 石英	
1	P-6	住居跡	深鉢	(38.0)	9.1		磨消縄文・沈線 研磨	褐色	研磨	褐色	△ △		
2	P-13	住居跡	深鉢				磨消縄文・沈線 研磨	褐色	研磨	褐色	△ △		波状口縁
3	P-1	住居跡	深鉢	(36.0)	16.3		磨消縄文・研磨	褐色	研磨	褐色	△ △		
4	一括	住居跡	深鉢				磨消縄文	褐色	研磨	褐色	△ △		波状口縁
5	一括	住居跡	深鉢				研磨	黒褐色	研磨	黒褐色	△ △		
6	一括	住居跡	深鉢				磨消縄文・沈線	褐色	研磨	褐色	△ △		
7	P-23	住居跡	深鉢				磨消縄文・沈線 刺突文	淡黄色	横方向ナデ	淡黄色	△ △		
8	P-37	住居跡	深鉢				磨消縄文・沈線	褐色	研磨	褐色	△ △		
9	P-7	住居跡	深鉢				磨消縄文・波状沈線 研磨	褐色	横方向ナデ	褐色	△ △		
10	P-1	住居跡	深鉢			(28.2)	研磨・磨消縄文 沈線・刺突文	褐色～暗褐色	研磨	褐色～暗褐色	△ △		
11	一括	住居跡	深鉢	底部	(9.8)	(17.8)	研磨	淡黄色		淡黄色	△ △		赤色顔料
12	一括	住居跡	深鉢	底部	2.1	(6.0)	研磨	にぶい褐色	ナデ	にぶい褐色	△ △		

第2表 相原遺跡 出土石器観察表(1)

棟号 番号	遺物 番号	遺構	種類	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
13	P-4	住居跡	二次加工剥片	結晶片岩	5.0	8.3	1.1	50.9	
14	P-10	住居跡	剥片	郡島黒曜石	2.8	1.5	0.8	2.2	

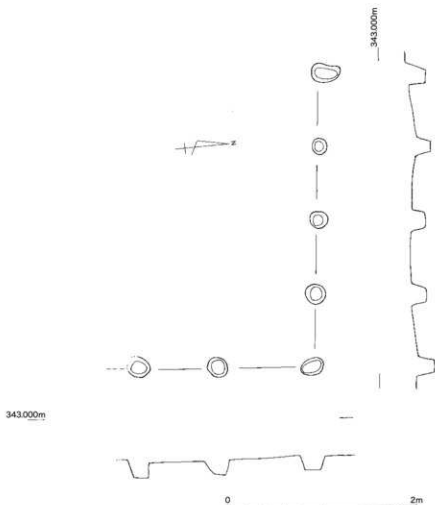
2. 据立柱建物

1号据立柱建物(第7図)

北側調査区中央付近で確認された。南半分は調査区域外であるため、確定はできないが、隣接する2号据立柱建物の規模から、おそらく2×4間の建物であると思われる。

建物の規模は、梁行3.1m、桁行1.85+αmで、柱間70～80cmである。柱穴の深さは、20cm足らずであり、上部を削平されているものと思われる。

柱穴内から遺物の出土はなかった。



第7図 相原遺跡 1号据立柱建物実測図(1/40)

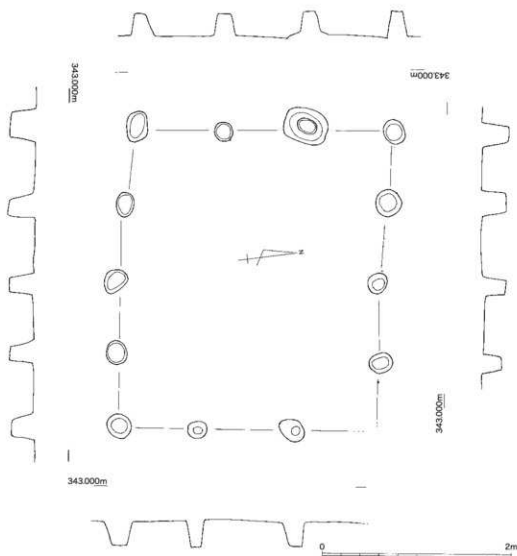
2号掘立柱建物 (第8図)

北側調査区のはほぼ中央部に、1号掘立柱建物と隣接して確認された。北東隅の柱穴は未確認である。

建物の規模は、2×4間のプランで、梁行3.2m、桁行2.7mを測る。柱間は、70～80cmである。

建物の方向は、1号掘立柱建物及び2号掘立柱建物とも、梁行方向及び桁行方向の柱穴はほぼ東西、南北方向で並んでいる。

柱穴内からの遺物の出土はなく明確な時期の特定には至らなかった。



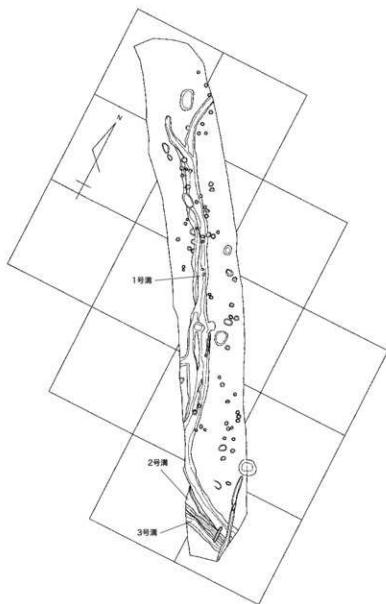
第8図 相原遺跡 2号掘立柱建物実測図 (1/40)

1号溝 (第10図)

南側調査区で確認された溝である。調査区南端から始まり2号溝、3号溝と切り合いながら、北西方向に西方向に緩い弧を描きながらカーブしつつ約10m伸び、その後、北北西方向に直線的に約40m伸びる。この周辺の溝の幅は、1.2m、深さは、40～50cmあり基底部分は丸く掘られている。しかし、北に行くに従い上部の削平が進んでいることから溝の深さは次第に浅くなり深さも10cm前後となる。幅も60cm程度と細くなっていく。北側では、溝は二叉に分かれ、一方は約4mで終わる。もう片方は方向を北側に変えながら調査区域外に伸びる。

また、溝の西側部分には平行して浅い溝がある。切り合い関係から当初こちらの溝が掘られ、その後掘り直しが行われたことがわかっている。溝の埋土は、クロボクが中心となり、砂粒やシルト層などは認められず水が流れていた痕跡は認められない。

埋土中からは縄文時代後期中葉から晩期後半にかけての土器や石器等が出土した。遺物の出土状況からは各時期の遺物が混在した状況であったが、溝の基底部分周辺で、縄文時代晩期後半の突帯文土器が出土したことから、この溝の時期は縄文時代晩期の所産と思われる。



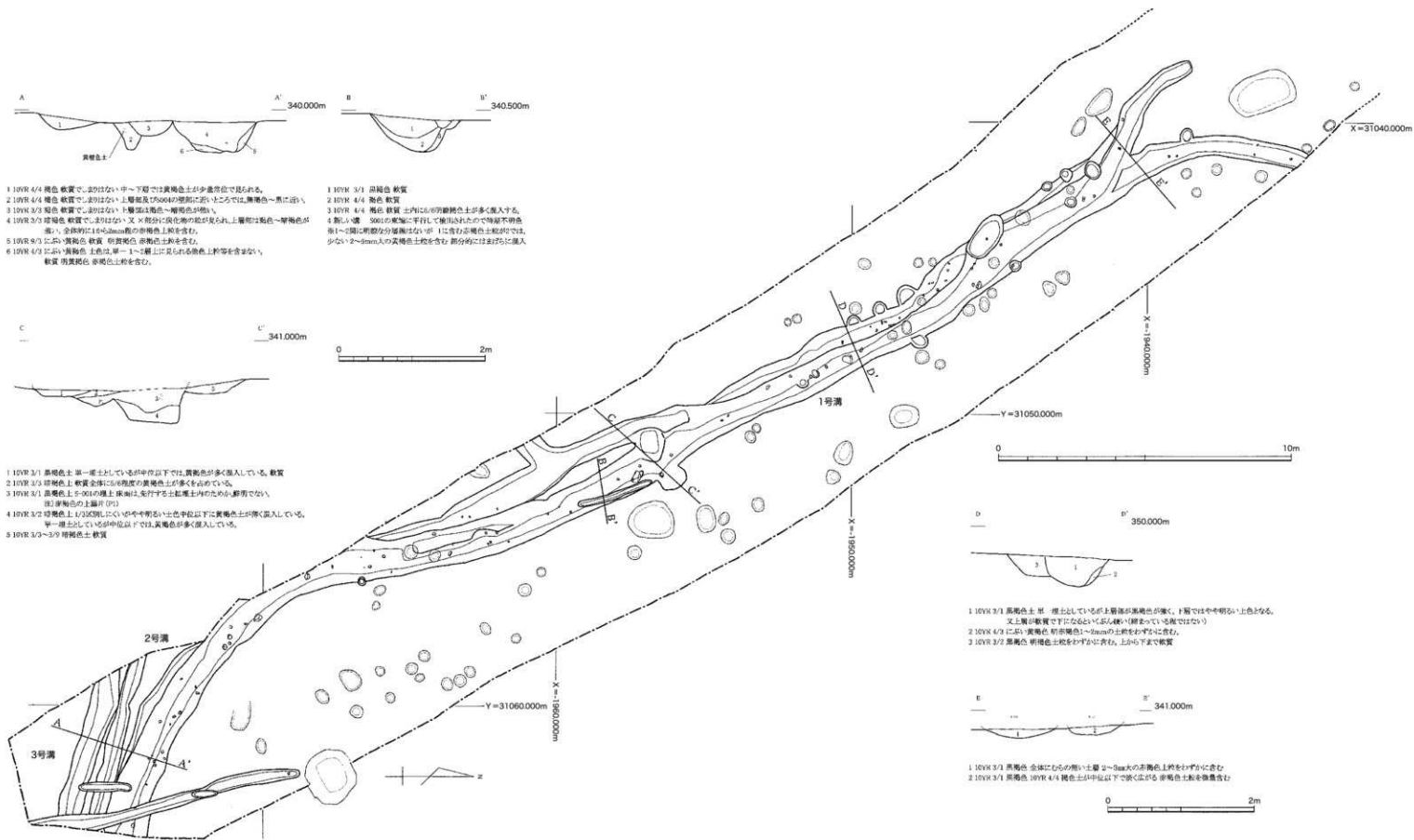
第9図 相原遺跡 1～3号溝配置図 (1/400)

2号溝 (第10図)

1号溝とほぼ並行して北西方向に直線的に伸びる。溝は大半が調査区域外にあるため、確認された長さは6mに過ぎない。1号溝に比べると非常に小規模なもので、幅20cmしかない。深さは25～30cmある。1号溝と同様砂粒やシルト層など水が流れたことを示す層は確認できなかった。一部1号溝に切られていることが確認されていることから、1号溝の掘削以前のものである可能性が高い。出土遺物は1号溝と同様に、縄文時代後期中葉から晩期後半に比定される遺物が出土している。

3号溝 (第10図)

1号、2号溝と平行して北西方向に直線的に伸びる。2号溝と同様、大半は調査区域外に展開するもので、確認された長さは5mであった。3本の溝の中で最も浅く15cm程度であった。幅は、2号溝に比べ広く約1mを測る。出土遺物は、1～2号溝と同様、縄文時代後期～晩期にかけての遺物が出土する。ただし埋土上位において弥生時代後期の在池系粗製甕の底部が出土している。弥生土器は1点のみの出土でありこれを持って3号溝が弥



第10図 相原遺跡 溝実測図 (1～3号溝) (1/20 1/50)

生時代の所産であるとは言い難く、1～2号溝と同様縄文時代後期中葉から晩期後半代に比定される。

4号溝 (第12図)

北側調査区東部分において確認された。南壁から北壁に向かって北北西方向に伸びる。一部北東方向に分岐して調査区内で終わるが、大半の遺構は、調査区域外に伸びていく。確認された長さは13m、分岐した溝は3mを測る。幅は1m、深さは70cmである。底面は平坦な掘り方である。

出土遺物は、大半が縄文晩期後半の遺物が中心となる。

5号溝 (第12図)

4号溝とほぼ並行して掘られたもので、わずかな蛇行を繰り返しながら南壁から北壁にかけて、北北西に約30m確認された。幅は1m前後、深さは80～90cmである。大半は調査区域外に展開するものであるが、掘られた方向や溝の規模から、6号もしくは7号溝に接続する可能性もある。

出土遺物は、縄文時代後期の遺物はほとんどなく、晩期後半代の遺物が主体となる。

6号溝 (第13図)

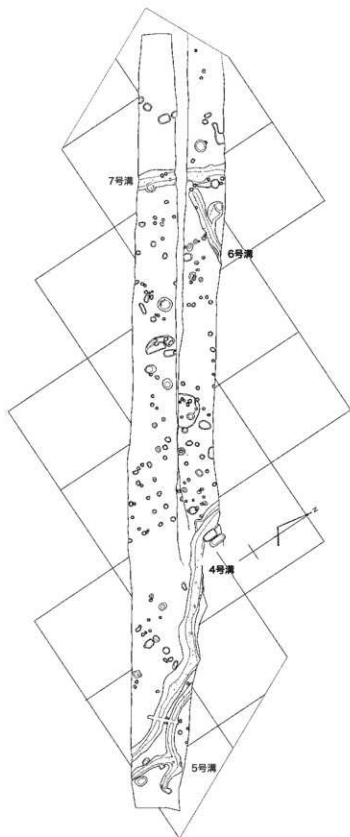
北側調査区東半部分で確認された。北壁から東方向に約7mの長さがあり7号溝の直前で終わる。幅は1m、深さは40cmを測る。

出土遺物は、縄文時代晩期後半代の遺物が中心となる。溝の方向や出土遺物の状況から4号もしくは5号溝と同一の溝である可能性が高い。

7号溝 (第14図)

北側調査区の最も西側で確認された溝である。ほぼ調査区を南東方向に横断するもので、長さ7m、幅1m、深さ40cmを測る。

出土遺物は、大半が縄文時代晩期後半代の遺物である。



第11図 相原遺跡 4～7号溝配置図 (1/400)

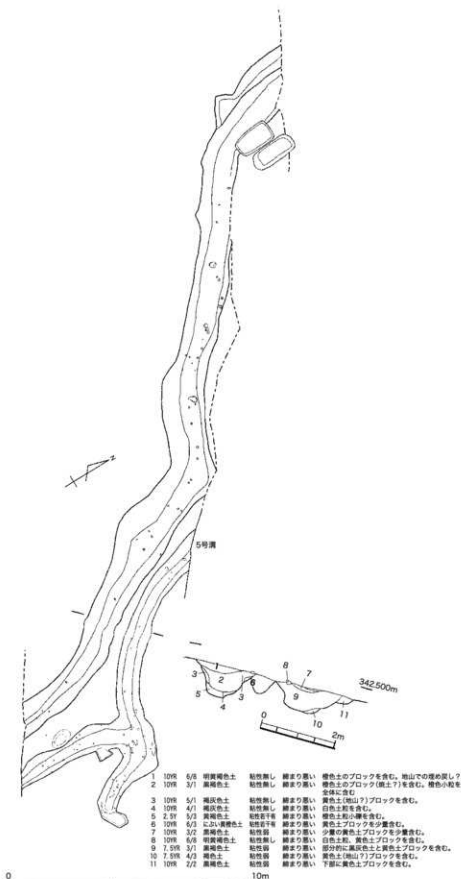
溝出土遺物

土器

1号溝 (第15図15～第10図103)

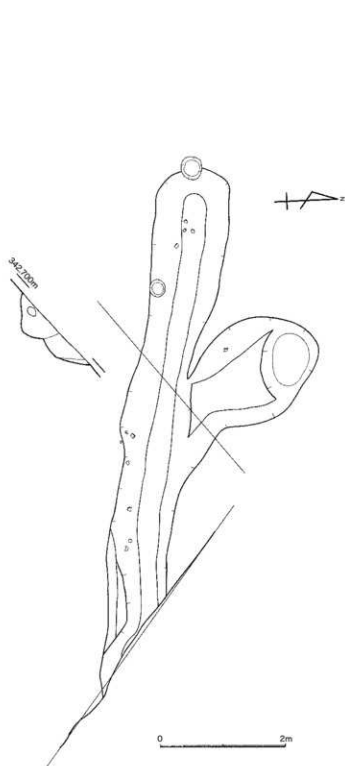
15～32は浅鉢である。15は波状口縁で口縁部が短く内傾する。その部分に磨消縄文及び沈線を施す。16は、波状口縁で口唇部が断面三角形に肥厚し、その部分に磨消縄文と沈線、さらに刺突文を施す。17～18はいずれも胴部の破片で、磨消縄文と沈線が施される。後期中葉の西平式土器系統の土器である。19～31は、いずれも内外面とも研磨が施されるものである。直行する口縁部が「ハ」の字状に広がるものと25～27のように逆「く」の字状に屈曲するものがあるくの字状にやや内傾して立ち上がるものであるが、28は簡略化されているが鍵状口縁である。33から97までは深鉢である。33は波状口縁で、内傾する口縁部に磨消縄文と沈線を施す。34～45も同様の施文方法をとる。46～66は胴部であり、胴部上位に最大径がありそこから口縁部が広がる。文様は最大径のあたりから屈曲部にかけての場所に、磨消縄文、沈線、刺突文、波状沈線などを組み合わせた文様を施す。67～72は、無文の深鉢である。器壁は比較的薄く内外面とも研磨を施す。73～87は突帯文土器である。74～76は、口唇部直下に無刻目突帯を巡らせるものである。

77～85は、口唇部から約1cm程度下位に断面三角形の無刻目突帯を貼り付けたものである。また、73と87は刻目突帯である。73は、直行する口縁部に高さのない突帯を貼り付け、刻目を施したものである。87は直行する口縁部が内傾し、口唇部直下に刻目突帯を貼り付けたものである。突帯文土器は内外面とも条痕が施される。86は、

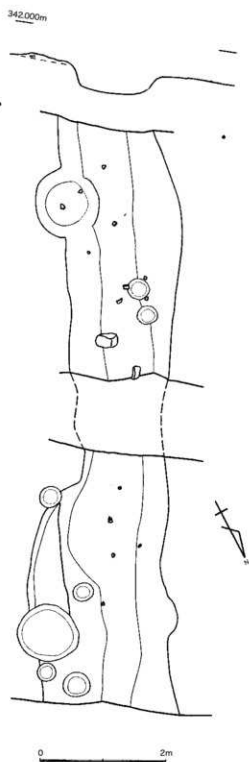


第12図 相原遺跡 4号・5号溝実測図 (1/150 1/90)

リボン状突帯の破片である。88～94は内外面とも条痕を施した深鉢である。95～97は細い沈線を口縁部付近に数条施したものである。96は波状口縁を持ち、5条の沈線を平行して巡らしている。98～103は底部である。98及び99は上げ底である。



第13図 相原遺跡 6号溝実測図 (1/60)



第14図 相原遺跡 7号溝実測図 (1/60)

2号溝 (第19図104～120)

104～105は浅鉢、106は鉢、107～119は深鉢である。104～106は器壁は薄く内外面とも研磨が施されるものである。107は、波状口縁で、「ハ」の字状に開く口縁部が端部で短く内傾するものである。屈曲部分に磨消縄文と沈線の組み合わせの文様が施される。108～113は、深鉢の胴部である。108～112は胴部最大径の付近に磨消縄文、沈線、刺突文、波状沈線を組み合わせた文様が施される。113は、胴部最大径より上位で一旦すぼまり、屈曲して口縁部に続く部分に磨消縄文、沈線の組み合わせの文様が施される。114は、条痕を施した無文土器、115は、直行した口縁部がやや外側に広がるもので、口唇部から約2cm程度下位に断面三角形の無刻目突帯を施したものである。116は、逆「く」の字状に屈曲する胴部を持ち、その最大径部分に断面三角形の突帯を巡らせたものである。117は、最大径部分よりやや下位に無刻目突帯を貼り付けたものである。120は底部で上げ底である。

3号溝 (第20図121～128)

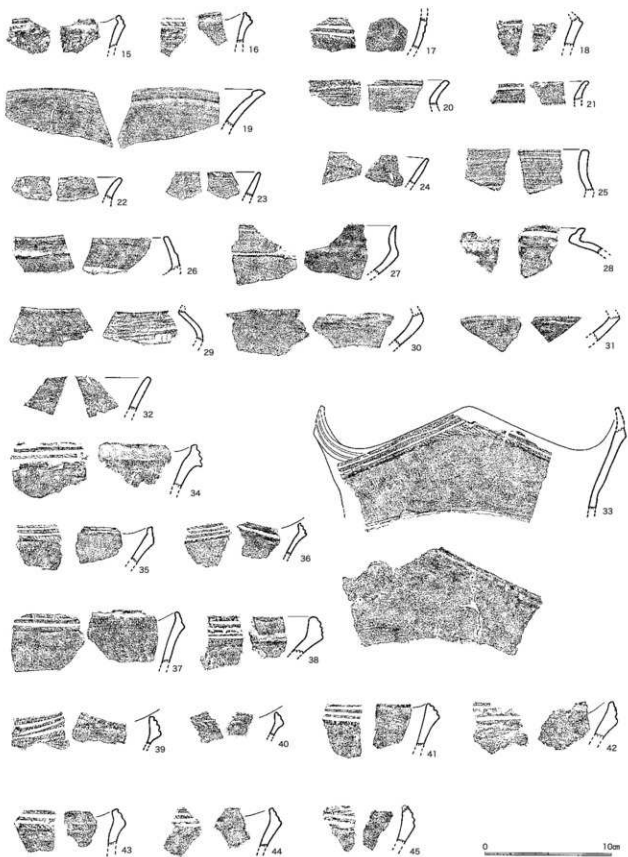
121～123は浅鉢、124～126は深鉢である。121は緩やかな弧を描きながら外反する口縁部を持つ。内面の口唇部付近に1条の沈線が施される。182は、181ほど大きく外反しないが、内面の口唇部付近に1条の沈線が施される。124は口唇部が断面三角形に肥厚しその部分に磨消縄文と沈線を組み合わせた文様を施す。5は、波状口縁で、短く内傾した口縁部に磨消縄文、沈線、刺突文を施したものである。126は、やや内傾する直行口縁で外面に研磨を施し、口唇部直下に低い無刻目突帯を巡らせるものである。127は、深鉢の底部、128は、弥生時代後期後半頃の在地系の粗製甕の底部である。

4号溝 (第20図129～145)

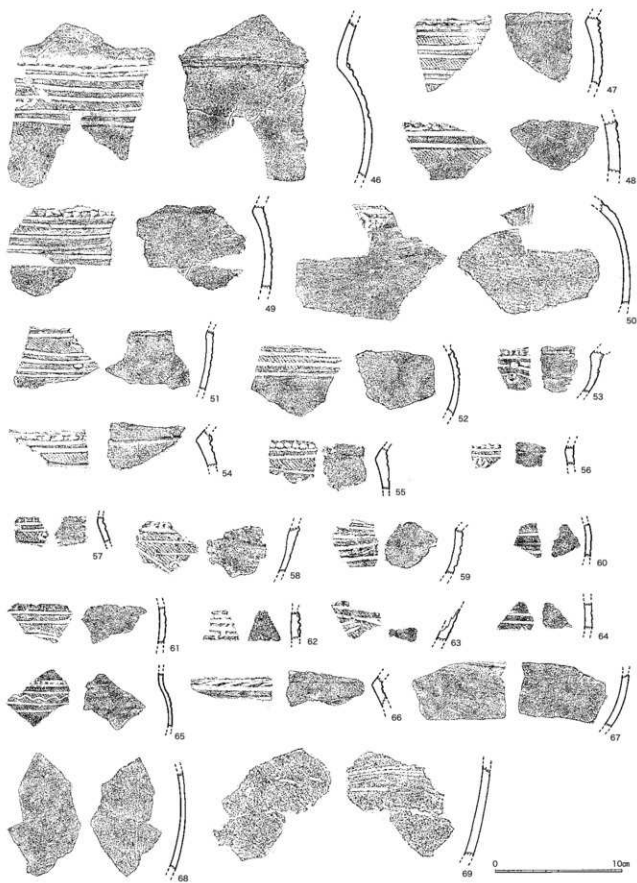
129～136は浅鉢、137～145は深鉢である。129は、口縁部が逆「く」の字状に内傾するもので、外面に2条の沈線が施される。130～133も、129ほど明瞭に屈曲はしないが、内傾して立ち上がるものである。134～137は、大きく外反する口縁部の端部を丸く仕上げるものである。134及び135は波状口縁である。137～138は無文土器である。137は外面は研磨が施され波状口縁である。139～141は、突帯が施された深鉢である。139～140は、内外面とも条痕を施し、口縁部に無刻目の低い突帯を貼り付けている。141は、口縁部直下に断面三角形の刻目突帯を巡らす。142～143は、胴部の屈曲部に添って刻目突帯を巡らす。

5号溝 (第21図146～第22図184)

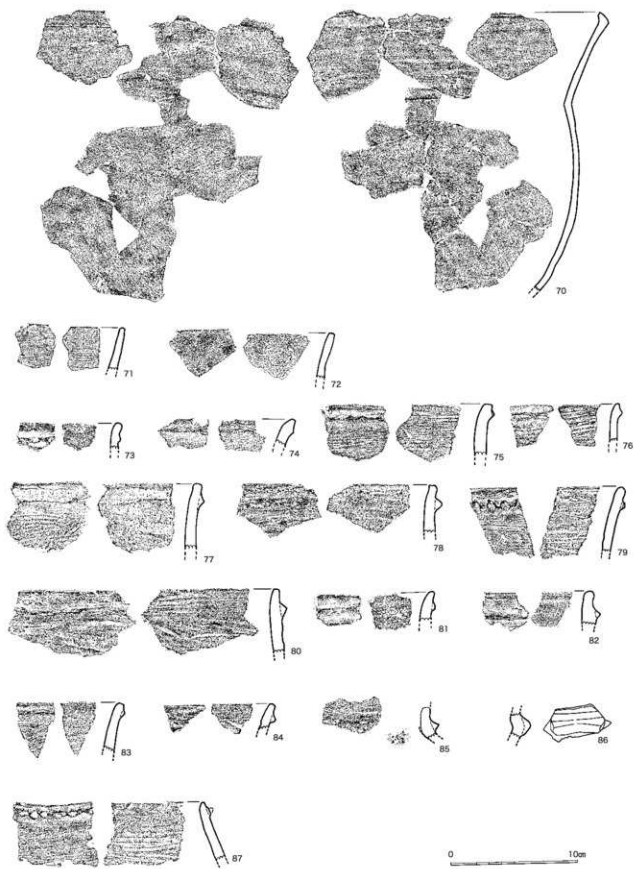
146～162は浅鉢、163～179は深鉢、180は火鉢、181～184は底部である。146、147は逆「く」の字状に屈曲する口縁部を持つもので、146は研磨が施される。155は、波状口縁で、口縁部内面に浅い段を持つ。163～165は、研磨を施した無文土器である。166～168は口縁端部がわずかに屈曲しそこに沈線が施されるものである。169～179は、突帯文土器である。このうち169～174及び176は、断面三角形の低い無刻目突帯を巡らせるものである。このうち173は、ほぼ口縁端部に添って突帯を施している。176は幅3cmの低い突帯を貼り付けたものである。174～175、177～179は刻目突帯で、いずれも口縁端部に近い高さに、断面三角形の低い刻目突帯を貼り付けたものである。180は、土師質の火鉢で2条のごく低い突帯を施している。口唇部は、内面方向に肥厚し端部は平坦に仕上げられている。181は、浅鉢の底部で復元径10.6cmの「ハ」の字状に開く高台を持つ。182～184は深鉢の底部である。



第15圖 相原遺跡 1号溝出土土器実測圖 1 (1/3)



第16図 相原遺跡 1号溝出土土器実測図2 (1/3)



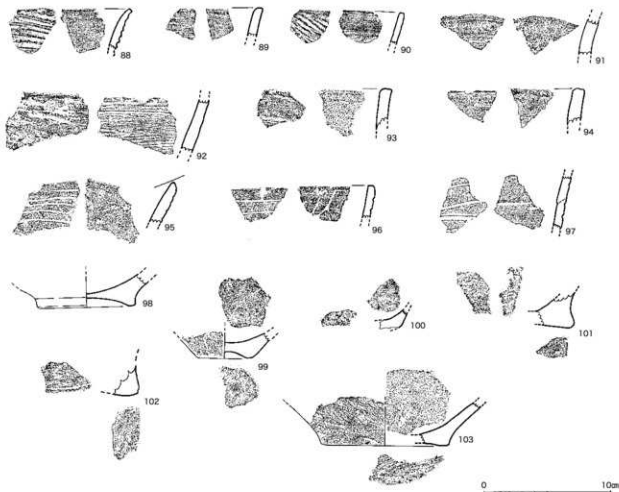
第17図 相原遺跡 1号溝出土土器実測図3 (1/3)

6号溝 (第22図185～191)

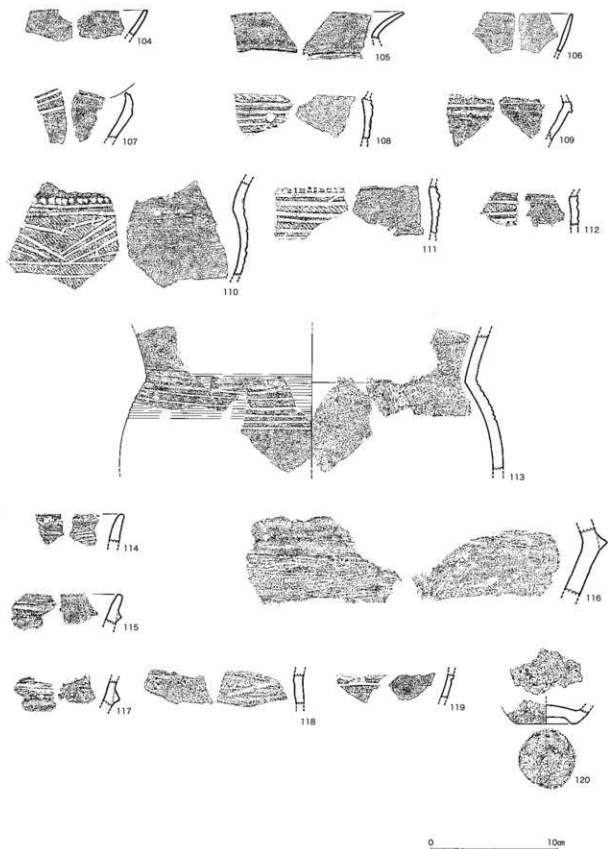
185～187は浅鉢、188～189は深鉢、190～191は底部である。185～187はいずれも精製の浅鉢で、185及び187は波状口縁である。188は、低い刻目突帯を施した深鉢である。189は精製の深鉢の胴部である。190は精製浅鉢の底部で、上げ底気味である。復元底径は10.8cmである。191は、深鉢の底部で、内外面とも条痕が施される。復元底径は、10.5cmである。

7号溝 (第22図192～第23図216)

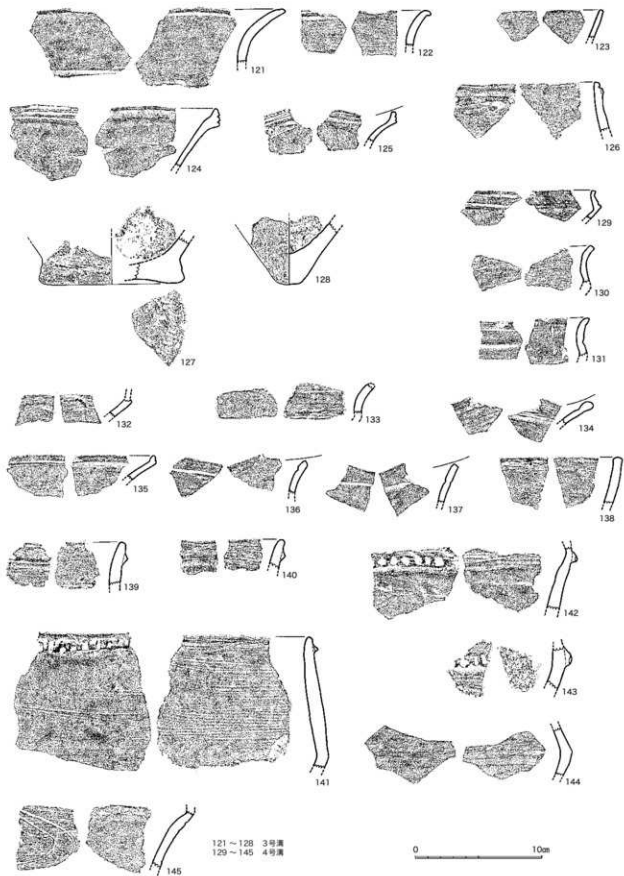
192～198は浅鉢、199は鉢、200～213は深鉢、214～216は底部である。192と193は、波状口縁である。193を除く浅鉢のすべてが研磨が施された、精製の浅鉢である。このうち194～195は、一部に赤色顔料が塗布されている。199は口縁部がわずかに屈曲し、浅い角度で広がるものである。屈曲部分の外面にやや太い沈線を2条施している。200は、199に比べ口縁部の立ち上がりかほぼ直に立ち上がるもので、屈曲部外面にやや太い沈線を2条施すものである。201は、鉢と思われる。条痕を施した後に内外面とも研磨を行っている。器壁はかなり薄く口縁部がわずかに外反する。203～209は、無文の精製深鉢である。202は、胴部の屈曲部分に刺突文を施したものである。210、212は、高さのない無刻目突帯を貼り付けたものである。211、213は刻目突帯を貼り付けたものである。214～215はいずれも深鉢の底部である。216は、焼成等の状況から弥生土器の壺と考えられる。



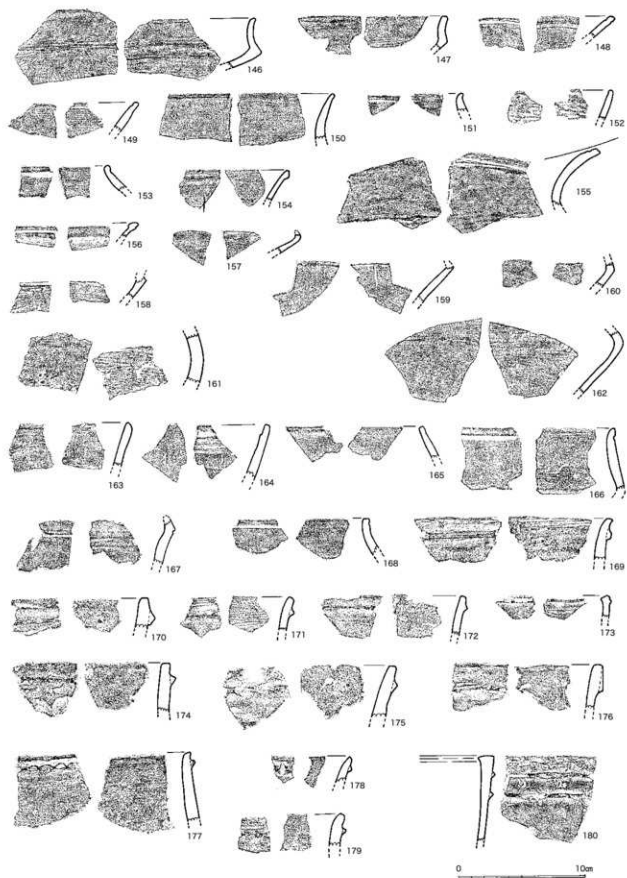
第18図 相原遺跡 1号溝出土土器実測図4 (1/3)



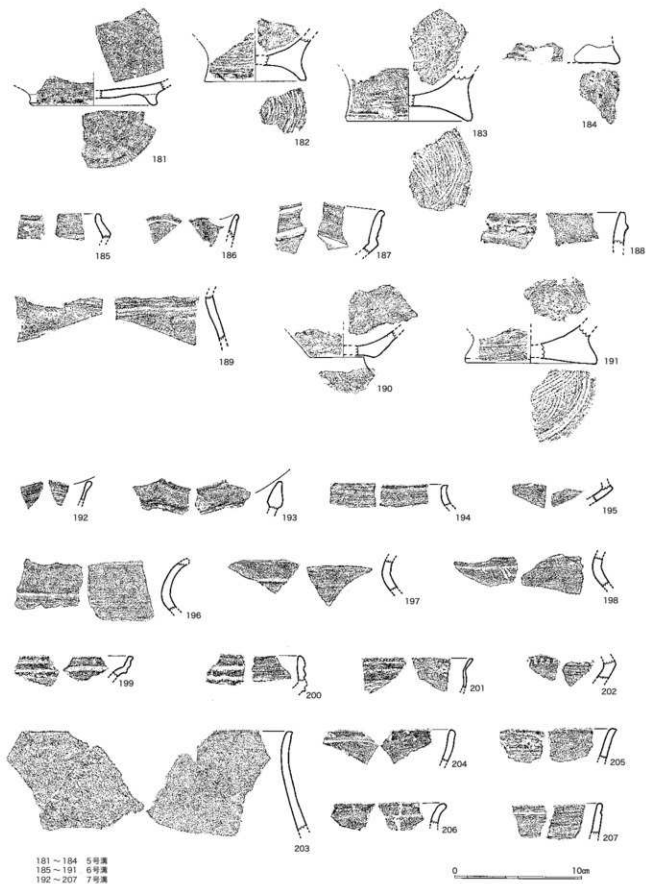
第19図 相原遺跡 2号溝出土土器実測図 (1/3)



第20图 相原遺跡 3号・4号溝出土土器実測図 (1/3)



第21图 相原遺跡 5号溝出土土器実測図 (1/3)



第22図 相原遺跡 5号・6号・7号溝出土土器実測図 (1/3)

石器

1号溝 (第24図217～第26図230)

217は、磨製石斧である。基部は欠損している。刃部に使用痕が観察された。結晶片岩を用いている。218～221は扁平打製石斧である。218～219は、両面に剥離面が観察される。220及び221はほぼ完成品で、片面に自然面を大きく残す。平面形はいずれも撥型の形状を呈する。218は、結晶片岩、219～221は玢岩である。224は、打製石斧である。刃部は失われている。一部に自然面が残るものの両面とも剥離面が観察される。結晶片岩を用いている。222はサヌカイト製の縦型の石匙である。先端部は欠損している。223は石徹で、サヌカイト製。225及び226は二次加工剥片である。剥片の1側面に細かい刃部調整を施している。225は玢岩、226はサヌカイトを用いている。227と228は磨石である。扁平な円礫の周縁部を細かく成形し両面を使用している。229及び230は石皿である。いずれも大きく欠損している。

4号溝 (第27図233)

4号溝から出土した石器は、233の扁平打製石斧1点のみである。ほぼ完成品で、両面とも念入りの調整が施される。特に刃部についてはかなり細かい剥離面が観察される。

5号溝 (第27図232 235)

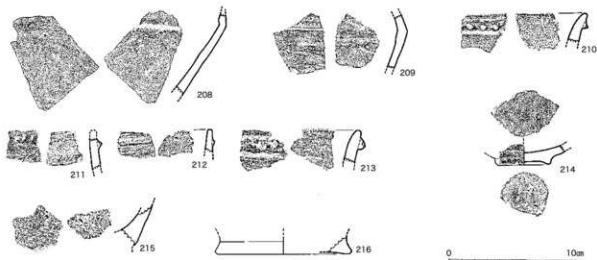
232は縦型の石匙の未製品か。サヌカイト製である。235は石皿である。大きく破損しており、わずかに使用面が観察されるのみである。安山岩製である。

6号溝 (第27図231)

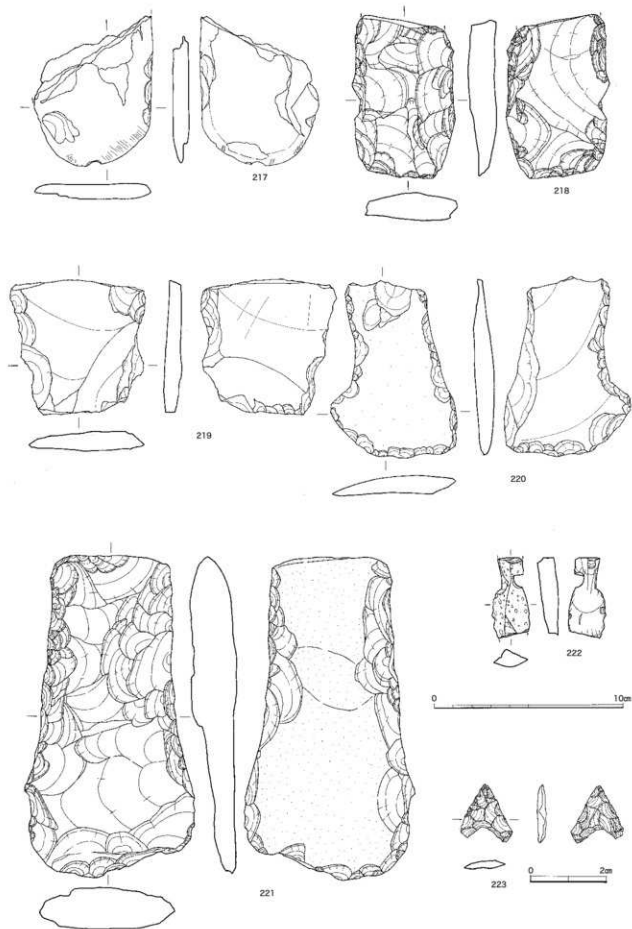
231は石錐である。サヌカイト製である。

7号溝 (第27図234)

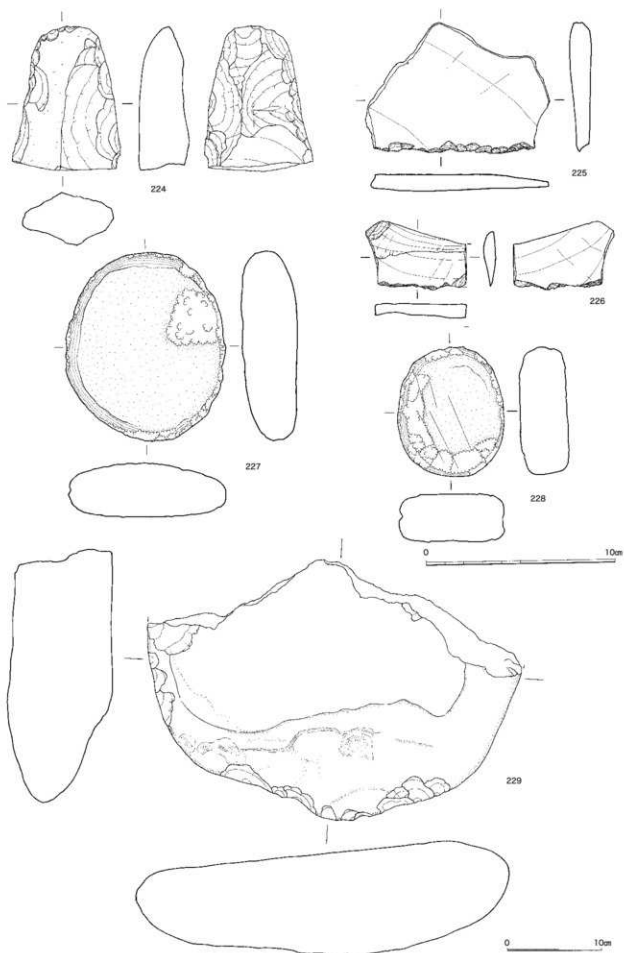
234は扁平打製石斧である。片面に自然面を大きく残すが、反対面はかなり念入りの調整を行っている。



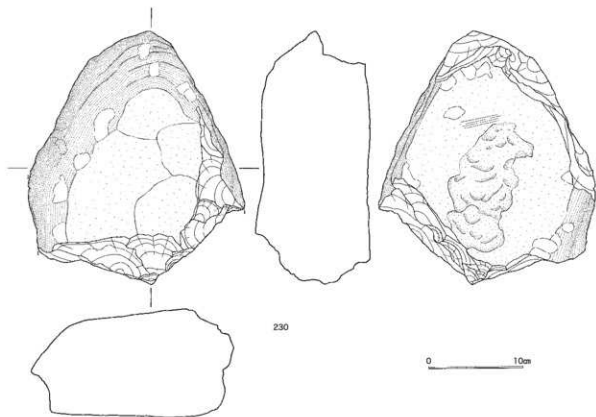
第23図 相原遺跡 7号溝出土石器実測図 (1/3)



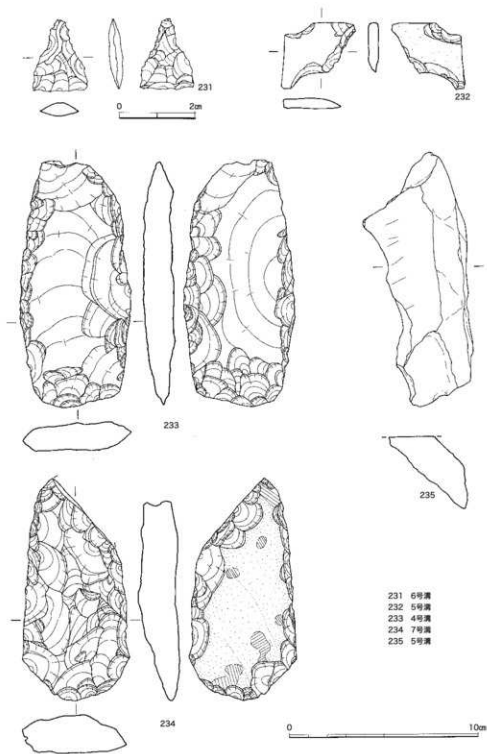
第24図 相原遺跡 1号溝出土石器実測図1 (1/1 1/2)



第25図 相原遺跡 1号溝出土石器実測図2 (1/2 1/4)



第26圖 相原遺跡 1号溝出土石器実測圖3 (1/4)



第27图 相原遺跡 4号・5号・6号・7号溝出土石器実測図 (1/1 1/2)

4. 土坑

1号土坑 (第28図)

南側調査区東側北東壁沿いで検出された。長軸1.8m、短軸1.54mの楕円形の平面プランを呈する。深さは45cmである。

遺物は、縄文後期中葉から晩期後半にかけての土器及び石器が出土したが、いずれの遺物も埋土上層からの出土であり、遺構の時期を明確に示すものではない。

2号土坑 (第29図)

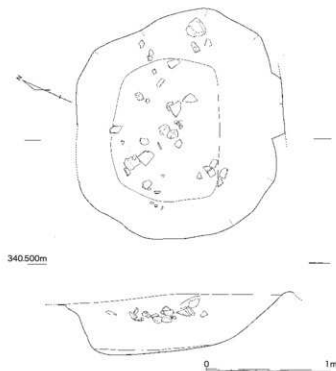
南側調査区北側の1号溝が、分岐する付近で検出された。長軸2.2m、短軸1.18mの長楕円形のプランを呈する。深さは25cmである。埋土中には、炭化物は全く確認できなかった。

遺物は、遺構床面南側において景徳鎮製の碗と瓦質土器が出土した。

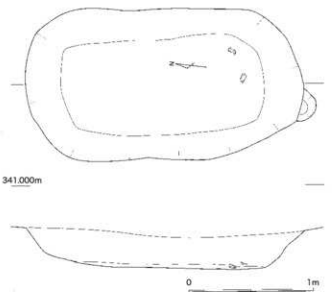
出土状況から判断すると、中世の土坑墓の可能性が高い。

その他の土坑 (第3図)

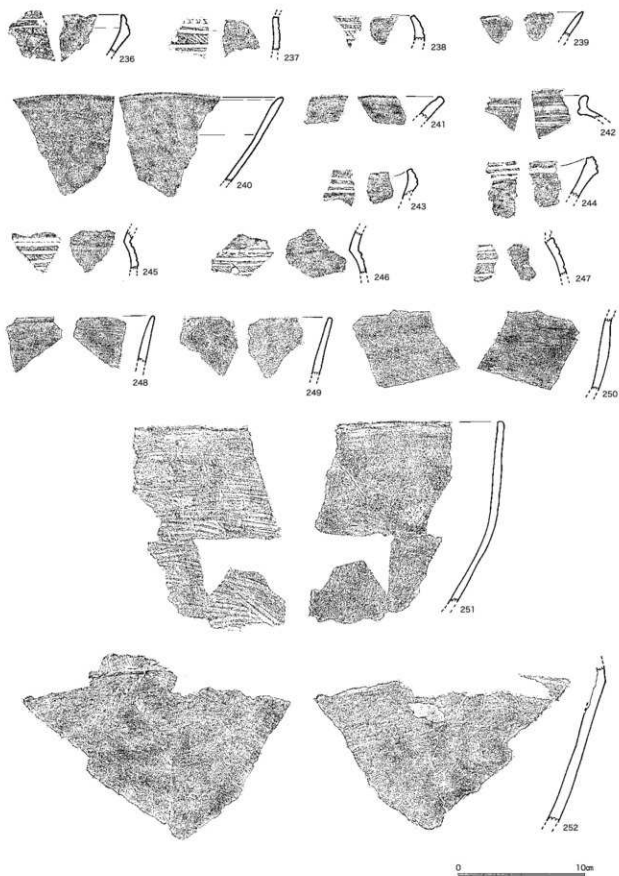
北側調査区5号溝を切る形で、長軸方向が南北方向の土坑が、並んで2基検出された。(3号土坑・4号土坑) この2基はいずれも大型動物の骨が埋められていた。遺物は出土しなかったが、近代以降のウシもしくはウマの死骸を埋めた土坑と思われる。



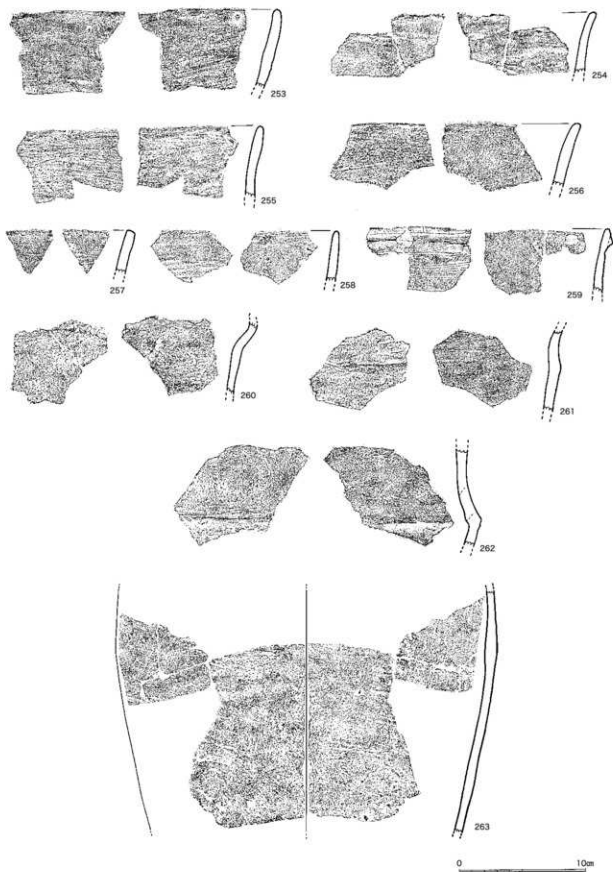
第28図 相原遺跡 1号土坑実測図 (1/30)



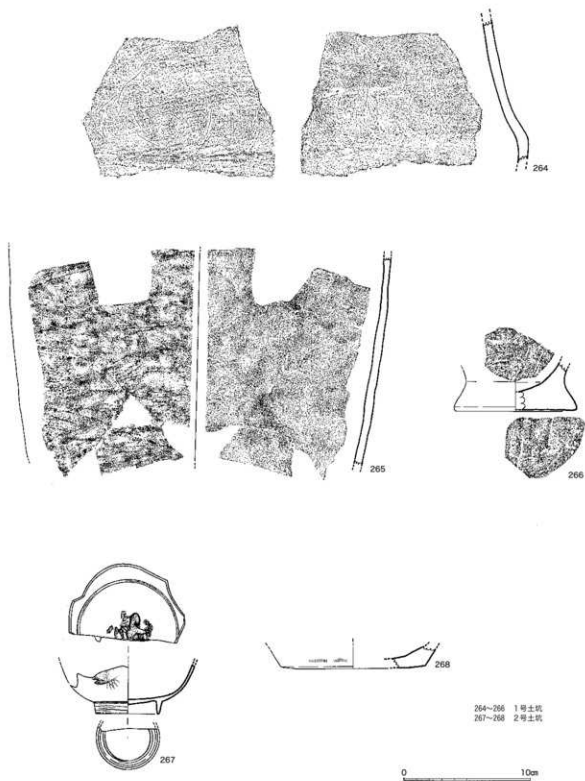
第29図 相原遺跡 2号土坑実測図 (1/30)



第30图 相原遺跡 1号土坑出土土器実測図1 (1/3)



第31图 相原遺跡 1号土坑出土土器実測図2 (1/3)



第32图 相原遺跡 1号・2号土坑出土土器実測図 (1/3)

出土遺物

1号土坑

土器 (第30図236～第32図266)

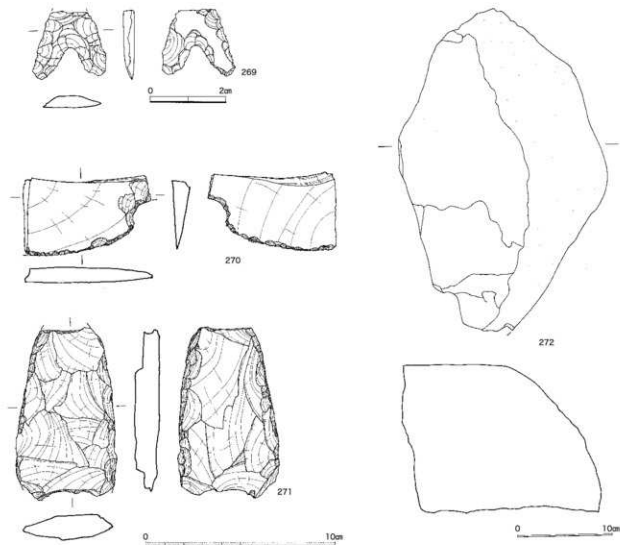
236～242は浅鉢、243～265は深鉢、266は底部である。236～238は、西平式系統の土器である。239～241は口縁部が直行して広がるもので、口縁部内面に浅い稜がつく精製の浅鉢である。242は、口縁部が略化された鍵状口縁の浅鉢である。243～247は、西平式系統の土器である。248～252は、無文の精製土器で、253～258及び260～265は粗製の無文土器である。259は口縁部直下に無刻目の突帯を巡らすものである。

石器 (第33図269～272)

269は、姫島産黒曜石製の石鏃である。270は、横型の石匙と思われる。約1/2を失っている。サヌカイト製である。271は、扁平打製石斧である。両面とも比較的丁寧に調整を施して成形している。結晶片岩製である。272は石皿である。大半が欠けているが、使用面が一部に残るものである。安山岩製である。

2号土坑 (第32図267～268)

267は、景德鎮製青花碗である。外面及び見込み部分に文様を描く。上半部分が失われているため器形の判断がつかないが概ね16世紀後半以降の所産と思われる。268は、瓦質土器で鉢と思われる。外面に部分的にハケ状の工具痕が残る。



第33図 相原遺跡 1号土坑出土石器実測図 (1/1 1/2 1/4)

4. 包含層

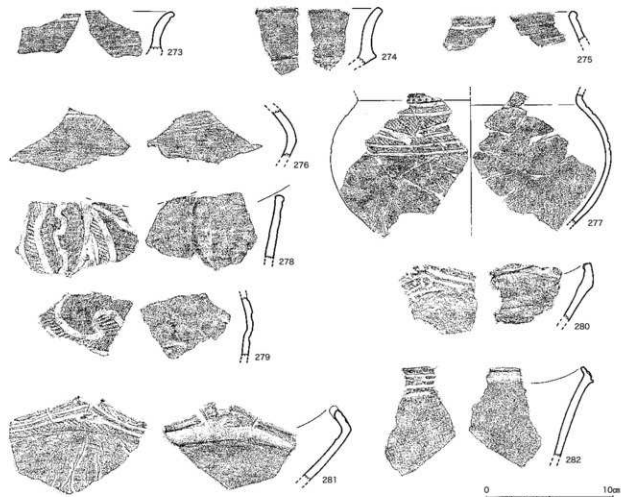
出土遺物

土器 (第34図273～第35図307)

包含層から出土した土器は、縄文後期中葉から後半代の遺物群と縄文晩期後半代の遺物群の2時期に分かれ、基本的に堅穴遺構や溝から出土した土器と並行する時期の遺物が大部分である。ただし、これらの遺物とは若干時期差が生じる土器が含まれる。278～279は、太めの沈線で曲線的な文様を施し、その沈線で囲まれた部分に磨消縄文を施したものである。これは中津式土器の特徴を示す土器であり、縄文後期初頭に比定されるものである。また、289は、縄文晩期の黒川式土器にみられる鰭状突起である。

石器 (第36図308～第37図316 317は表面採集)

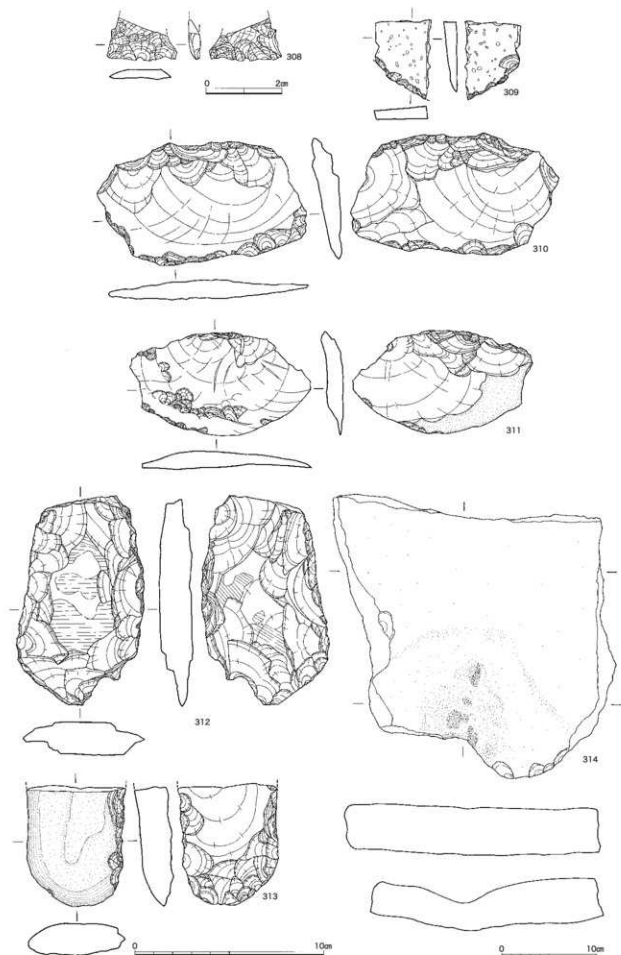
包含層から出土した石器は、石鏃、二次加工剥片、スクレイパー、扁平打製石斧、打製石斧、石皿、磨石及び敲石が出土している。石鏃は、基部の抉りはほとんどない。大きく欠損しているので全体の形状が明瞭ではない。310～311は、円礫を荒く打ち割ってできた剥片の側縁部に調整を加えて刃部を付けたものである。312は扁平打製石斧で、刃部がわずかに欠けているがほぼ完成品である。刃部及び周縁部は比較的丁寧に成形を行っている。313は、片面は自然面が大きく残り、主要剥離面側からの調整で刃部を成形している。314は扁平な角礫を用いた石皿である。315は長楕円形の円礫を利用した磨石。316、317は兼用品であり、磨面中央部に敲石として使用した使用痕が観察される。なお、317は表面採集された遺物である。



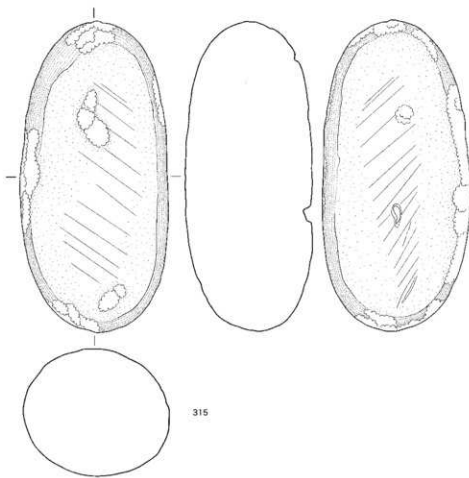
第34図 相原遺跡 包含層出土土器実測図1 (1/3)



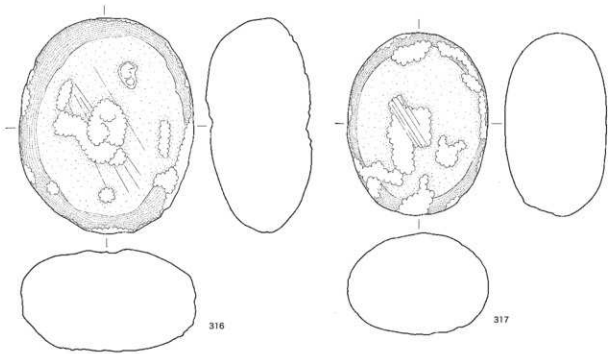
第35図 相原遺跡 包含層出土土器実測図2 (1/3)



第36図 相原遺跡 包含層出土石器実測図 (1/1 1/2 1/4)



315



316

317



第37図 相原遺跡 包含層出土石器及びび表面採集石器実測図 (1/2)

第3表 相原遺跡 出土土器観察表(2)

神田 番号	遺物 番号	遺器	器種	口径 (底径)	器高 (残高)	製造区 底任 (底径)	外面の文様・調整	外面色調	内面の文様・ 調整	内面色調	胎土				備考
											角閃石	長石	石英	その他	
15	-括 溝1	浅鉢					磨消面文・沈線・ナデ	にぶい黄褐色	研磨	にぶい黄褐色	△				波状1線
16	-括 溝1	浅鉢					磨消面文・沈線・条痕・刺突文	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色					波状1線
17	-括 溝1	浅鉢					面文・沈線・研磨	にぶい黄褐色	研磨	にぶい黄褐色	△				
18	-括 溝1	浅鉢					ナデ・沈線	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	△	△			
19	-括 溝1	浅鉢					研磨	黒色	研磨	黒色	△	△			
20	-括 溝1	浅鉢					条痕・研磨	にぶい暗褐色	研磨・沈線	にぶい暗褐色	△	△			赤色面料
21	-括 溝1	浅鉢					研磨	茶褐色～暗褐色	研磨・沈線	茶褐色～暗褐色	△	△			
22	-括 溝1	浅鉢					研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△			
23	-括 溝1	浅鉢					研磨	茶褐色	研磨	茶褐色	△	△			
24	-括 溝1	浅鉢					研磨	黒色	研磨	黒色	△	△	△		
25	-括 溝1	浅鉢					横方向ナデ	暗褐色	横方向ナデ	黒色～暗褐色	△	△	△		ス付着
26	-括 溝1	浅鉢					研磨	にぶい黄褐色	研磨	にぶい黄褐色	△				
27	-括 溝1	浅鉢					研磨・沈線	黄灰色	研磨	黄灰色					
28	-括 溝1	浅鉢					ナデ・沈線	明黄褐色	ナデ・沈線	明黄褐色	△				縦状1線
29	-括 溝1	浅鉢					研磨	黒褐色	研磨	黄灰色	△		△		
30	-括 溝1	浅鉢					研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△			
31	-括 溝1	浅鉢					研磨	鈍黄褐色	研磨	鈍黄褐色					
32	-括 溝1	浅鉢					条痕	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	△	△			
33	-括 溝1	深鉢	(2)				磨消面文・研磨	黒色	研磨	黒色	△	△			波状1線
34	P-34	溝1	深鉢				磨消面文・沈線・研磨	にぶい黄褐色	横方向ナデ	にぶい黄褐色	○	○			波状1線
35	-括 溝1	深鉢					磨消面文・沈線・研磨	黄灰色	研磨	黄灰色					波状1線
36	-括 溝1	深鉢					磨消面文・沈線・研磨	淡褐色	研磨	淡褐色	△	△			波状1線
37	P-11	溝1	深鉢				磨消面文・沈線・研磨	暗灰黄色	研磨	暗灰黄色	△	△			波状1線
38	-括 溝1	深鉢					磨消面文・沈線・研磨	淡褐色	研磨	淡褐色	△	△			
39	-括 溝1	深鉢					磨消面文・沈線・研磨・ナデ	暗褐色～黒色	研磨	暗褐色～黒色	△	△			波状1線
40	-括 溝1	深鉢					磨消面文・沈線	淡褐色	ナデ	暗褐色	△	△			波状1線
41	-括 溝1	深鉢					研磨・沈線	黄褐色	条痕	黄褐色	△	△			波状1線
42	-括 溝1	深鉢					研磨・沈線・条痕・刺突文	黄褐色	条痕	黄褐色	△	△			波状1線
43	-括 溝1	深鉢					磨消面文・沈線・ナデ	淡黄色	ナデ	淡黄色					波状1線
44	-括 溝1	深鉢					研磨・沈線	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	△				波状1線
45	-括 溝1	深鉢					磨消面文・沈線・条痕	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	△	△			
46	P-49	溝1	深鉢				磨消面文・沈線・刺突文	褐色	研磨	褐色	△	△			
47	P-47	溝1	深鉢				磨消面文・沈線・刺突文	淡黄色～褐色	研磨	淡黄色～褐色	△	△			
48	P-48	溝1	深鉢				磨消面文・沈線・刺突文	赤褐色	研磨	赤褐色	△	△			
49	9-49	溝1	深鉢				磨消面文・沈線・刺突文	暗褐色	研磨	褐色	△	△			
50	-括 溝1	深鉢					磨消面文・沈線・刺突文	黄褐色	研磨	黄褐色	△	△			
51	-括 溝1	深鉢					磨消面文・沈線	暗灰黄色	ナデ	にぶい黄褐色	△				
52	P-38	溝1	深鉢				磨消面文・沈線・研磨	にぶい黄褐色	研磨	にぶい黄褐色	△				
53	-括 溝1	深鉢					磨消面文・刺突文	黒褐色	研磨	黒褐色	△				
54	P-42	溝1	深鉢				磨消面文・沈線・刺突文	淡黄色	横方向ナデ	淡黄色	△				
55	-括 溝1	深鉢					磨消面文・刺突文・沈線	淡黄褐色	研磨	淡黄褐色	○	○			
56	-括 溝1	深鉢					磨消面文・沈線・刺突文	黄灰色	研磨	にぶい赤褐色	△	△			
57	-括 溝1	深鉢					磨消面文・沈線・刺突文	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△			
58	-括 溝1	深鉢					磨消面文・沈線	にぶい褐色	ナデ	にぶい褐色					
59	-括 溝1	深鉢					磨消面文・沈線	黒褐色	研磨	黄褐色	○				
60	-括 溝1	深鉢					磨消面文→沈線	にぶい黄褐色	ナデ	黄灰色	△				
61	-括 溝1	深鉢					磨消面文・沈線	淡黄色	ナデ	黄灰色	△				△
62	-括 溝1	深鉢					磨消面文・沈線・刺突文	黄褐色	ナデ	黄褐色					△
63	-括 溝1	深鉢					磨消面文・沈線	黒褐色	ナデ	暗灰黄色			△		
64	-括 溝1	深鉢					研磨→沈線	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色					
65	-括 溝1	深鉢					刻線文・沈線・磨消面文	赤褐色	条痕	黒褐色	○				
66	P-40	溝1	深鉢				研磨・沈線・磨消面文	褐色	研磨	褐色	△	△			
67	P-45	溝1	深鉢				研磨	褐色	研磨	褐色	△	△			
68	P-59	溝1	深鉢				研磨	にぶい黄褐色	研磨	にぶい黄褐色	△	△			
69	-括 溝1	深鉢					研磨	条痕	条痕	△	△				
70	-括 溝1	深鉢					研磨	にぶい暗褐色	研磨	にぶい暗褐色	△	△			
71	-括 溝1	深鉢					研磨	にぶい暗褐色	研磨	にぶい暗褐色	△	△			△
72	P-54	溝1	深鉢				研磨	黄灰色	研磨	にぶい黄褐色	△				
73	-括 溝1	深鉢					条痕・沈線・眉目突帯	黄褐色	ナデ	黄褐色	○	○			
74	-括 溝1	深鉢					横方向ナデ・突帯・条痕	にぶい黄褐色	横方向ナデ	にぶい黄褐色	△	△	△		
75	-括 溝1	深鉢					条痕・突帯	褐色	条痕	褐色	△	△			△
76	-括 溝1	深鉢					条痕・突帯	黄褐色	条痕	黄褐色	△	△			
77	P-33	溝1	深鉢				横方向ナデ・条痕・突帯	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	○	○			
78	-括 溝1	深鉢					条痕・突帯	淡黄褐色	条痕・研磨	淡黄褐色	○				
79	-括 溝1	深鉢					条痕・突帯	条痕	条痕・研磨	淡黄褐色	○				
80	-括 溝1	深鉢					条痕・突帯	にぶい暗褐色	条痕	にぶい暗褐色	○				○
81	-括 溝1	深鉢					条痕・突帯	にぶい暗褐色	条痕	にぶい暗褐色	○				
82	-括 溝1	深鉢					ナデ・突帯	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	○	○			
83	-括 溝1	深鉢					ナデ・突帯	淡粉褐色	ナデ	淡粉褐色	○	○			
84	-括 溝1	深鉢					ナデ・突帯	淡褐色	ナデ	淡褐色	△	△			△
85	-括 溝1	深鉢					横方向ナデ・突帯	淡褐色～暗褐色	横方向ナデ	淡褐色～暗褐色	△	△			
86	-括 溝1	深鉢					ナデ・リボシ伏突帯	暗褐色	ナデ	暗褐色	△	△			△
87	-括 溝1	深鉢					横方向ナデ・条痕・眉目突帯	淡褐色	条痕	淡褐色	△	△			△
88	-括 溝1	深鉢					条痕	暗褐色	ナデ	黒色	△	△			△
89	-括 溝1	深鉢					条痕	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	△	△			
90	-括 溝1	深鉢					条痕・条痕	淡黄褐色	研磨	淡黄褐色					
91	-括 溝1	深鉢					条痕	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	○	○			

第4表 相原遺跡 出土土器観察表(3)

神田 番号	遺物 番号	遺種	器種	口径 (底径)	器高 (残高)	製作 年代 (西暦)	外面の文様・調整	外面色調	内面の文様・ 調整	内面色調				備考
										陶質	長石	石英	その他	
92	-	一括 溝1	深鉢				条痕	黄褐色	条痕	黄褐色	△	△		
93	-	一括 溝1	深鉢				ナデ	黄褐色	ナデ	黄褐色	○	○		
94	-	一括 溝1	深鉢				ナデ	黒褐色	ナデ	黒褐色	△	△		
95	-	一括 溝1	深鉢				ナデ→沈線	淡褐色	ナデ	淡褐色	△	△		
96	-	一括 溝1	深鉢				ナデ→沈線	にぶい褐色	ナデ	にぶい褐色	△	△		
97	-	一括 溝1	深鉢				ナデ→沈線	淡褐色～灰色	ナデ	淡褐色～灰色	△	△		△
98	P-60	溝1	深鉢	底部	(2.6)	(7.8)	ナデ	にぶい黄褐色	研磨	黒色	△	△	△	△
99	-	一括 溝1	深鉢	底部	2.1	(4.0)		にぶい褐色	ナデ	にぶい黄褐色	○	○		
100	-	一括 溝1	深鉢	底部	-	-	条痕	明褐色	ナデ	明褐色	○	○		
101	-	一括 溝1	深鉢	底部	-	-	ナデ	淡褐色～灰色	ナデ	淡褐色～灰色	△	△		
102	P-28	溝1	深鉢	底部	-	-	横方向ナデ	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	○	○		
103	-	一括 溝2	浅鉢	底部	(3.5)	(10.0)	研磨	淡褐色	ナデ	淡褐色	○	○		○
104	-	一括 溝2	浅鉢				研磨	淡褐色～暗褐色	研磨	淡褐色～暗褐色	△	△		
105	-	一括 溝2	浅鉢				研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△		
106	P-6	溝2	鉢					にぶい暗褐色	研磨	にぶい暗褐色	△	△		
107	-	一括 溝2	深鉢				磨削編文・研磨	にぶい暗褐色	研磨	にぶい黄褐色	△	△		波状1線
108	P-4	溝2	深鉢				磨削編文・研磨・押点文	にぶい黄褐色	研磨	にぶい黄褐色	△	△		
109	-	一括 溝2	深鉢				磨削編文・沈線・研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△		△
110	P-11	溝2	深鉢				磨削編文・沈線・研削文	にぶい暗褐色	研磨	にぶい暗褐色	○	○		
111	P-13	溝2	深鉢				磨削編文・沈線・研削文	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△		
112	-	一括 溝2	深鉢				磨削編文・沈線	淡褐色～灰色	研磨	淡褐色～灰色	△	△		
113	-	一括 溝2	深鉢				研磨・沈線	にぶい暗褐色	ナデ	にぶい暗褐色	△	△		○
114	-	一括 溝2	深鉢				条痕	にぶい暗褐色	条痕	にぶい暗褐色	△	△		
115	-	一括 溝2	深鉢				条痕・突帯	にぶい暗褐色	条痕	にぶい暗褐色	△	△		
116	P-5	溝2	深鉢				横方向ナデ・条痕・突帯	にぶい黄褐色	条痕	にぶい黄褐色	○	○		
117	-	一括 溝2	深鉢				条痕・突帯	淡黄褐色	条痕	淡黄褐色	○	○		
118	P-15	溝2	深鉢				研磨	にぶい暗褐色	条痕	にぶい暗褐色	○	○		○
119	-	一括 溝2	深鉢				研磨・沈線	黒色	研磨	暗褐色	△	△		○
120	P-14	溝2	深鉢	底部	(0.7)	11.4	ナデ	淡黄褐色	ケズリ・ナデ	暗褐色	△	○		○
121	-	一括 溝3	浅鉢				研磨	にぶい暗褐色	研磨・沈線	にぶい暗褐色	△	△		
122	-	一括 溝3	浅鉢				研磨	淡黄褐色	研磨	淡黄褐色	△	△		
123	-	一括 溝3	浅鉢				研磨	にぶい黄褐色	研磨	にぶい黄褐色	△	△		
124	-	一括 溝3	深鉢				磨削編文・沈線・研磨	淡褐色～暗褐色	研磨	淡褐色～暗褐色	○	○		
125	-	一括 溝3	深鉢				磨削編文・沈線・研磨	淡褐色～灰色	研磨	淡褐色～灰色	△	△		波状1線
126	-	一括 溝3	深鉢				研磨・沈線・突帯	暗褐色	横方向ナデ	暗褐色	△	△		波状1線
127	-	一括 溝3	深鉢	底部	(4.0)	(11.6)	ナデ	にぶい暗褐色	ナデ	にぶい暗褐色	○	○		
128	-	一括 溝3	壺	底部	(4.8)	1.8	ヘラ調整	にぶい暗褐色	ナデ	にぶい暗褐色	○	○		△ 実底
129	-	一括 溝4	浅鉢				研磨	淡褐色	研磨	淡褐色	△	△		
130	-	一括 溝4	浅鉢				研磨	淡褐色	研磨	淡褐色	△	△		
131	-	一括 溝4	浅鉢				研磨	にぶい暗褐色	研磨	にぶい暗褐色	△	△		
132	-	一括 溝4	浅鉢				研磨・沈線	にぶい暗褐色	研磨	にぶい暗褐色	△	△		△
133	-	一括 溝4	浅鉢				ナデ	暗褐色～淡褐色	ナデ・沈線	暗褐色～淡褐色	△	△		
134	-	一括 溝4	浅鉢				研磨・沈線	暗褐色	研磨・沈線	暗褐色	△	△		波状1線
135	-	一括 溝4	浅鉢				研磨	にぶい暗褐色	研磨	にぶい暗褐色	○	○		
136	-	一括 溝4	浅鉢				横方向ナデ	にぶい暗褐色	研磨	にぶい暗褐色	△	△		波状1線
137	-	一括 溝4	深鉢				横方向ナデ	暗褐色	横方向ナデ	暗褐色	△	△		波状1線
138	P-45	溝4	深鉢				条痕→ナデ	淡褐色	条痕→ナデ	淡褐色	△	△		波状1線
139	-	一括 溝4	深鉢				条痕・突帯	淡褐色	研磨	淡褐色	△	△		△
140	-	一括 溝4	深鉢				横方向ナデ・突帯	黒色	横方向ナデ	黒色	△	△		
141	-	一括 溝4	深鉢				条痕・突帯	にぶい黄褐色	条痕	にぶい黄褐色	○	○		
142	-	一括 溝4	深鉢				研磨・突帯	淡褐色	研磨	淡褐色	△	△		
143	-	一括 溝4	深鉢				横方向ナデ・斜目突帯・条痕	淡褐色～暗褐色	ナデ	淡褐色～暗褐色	○	○		
144	-	一括 溝4	深鉢				研磨	にぶい黄褐色	研磨	にぶい黄褐色	△	△		
145	-	一括 溝4	深鉢				ナデ・研磨・沈線	にぶい黄褐色	ナデ・研磨・沈線	にぶい黄褐色	△	△		
146	P-38	溝5	浅鉢				研磨	にぶい暗褐色	研磨	にぶい暗褐色	△	△		
147	-	一括 溝5	浅鉢				横方向ナデ	にぶい暗褐色	横方向ナデ	にぶい暗褐色	△	△		
148	-	一括 溝5	浅鉢				ナデ・研磨・沈線	にぶい黄褐色	ナデ・研磨・沈線	にぶい黄褐色	△	△		
149	-	一括 溝5	浅鉢				ナデ・条痕	にぶい赤褐色	条痕・沈線	にぶい赤褐色	△	△		
150	P-38	溝5	浅鉢				研磨	にぶい暗褐色	研磨	にぶい暗褐色	△	△		
151	-	一括 溝5	浅鉢				ナデ・沈線	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	△	△		
152	-	一括 溝5	浅鉢				条痕・ナデ	淡黄色	条痕	淡黄色	△	△		
153	-	一括 溝5	浅鉢				横方向ナデ・沈線	にぶい黄褐色	横方向ナデ	にぶい黄褐色	△	△		
154	-	一括 溝5	浅鉢				研磨	淡褐色～灰色	研磨	淡褐色～灰色	△	△		
155	P-2	溝5	浅鉢				研磨	にぶい暗褐色	研磨・沈線	にぶい暗褐色	△	△		波状1線
156	-	一括 溝5	浅鉢				研磨・沈線	灰黄褐色	研磨	灰黄褐色	△	△		
157	P-19	溝5	浅鉢				研磨	黒褐色	研磨	黒褐色	△	△		
158	P-36	溝5	浅鉢				横方向ナデ	にぶい赤褐色	横方向ナデ	にぶい赤褐色	△	△		
159	P-35	溝5	浅鉢				研磨	にぶい黄褐色	研磨	にぶい黄褐色	△	△		
160	-	一括 溝5	浅鉢				研磨	にぶい黄褐色	研磨	にぶい黄褐色	△	△		
161	P-36	溝5	浅鉢				研磨	暗褐色	条痕	黒色	○	○		
162	P-35	溝5	浅鉢				研磨	淡黄褐色	研磨	淡黄褐色	△	△		
163	-	一括 溝5	深鉢				研磨	にぶい褐色	研磨	にぶい褐色	△	△		
164	-	一括 溝5	深鉢				研磨	褐色	研磨	褐色	△	△		
165	-	一括 溝5	深鉢				研磨	にぶい褐色	研磨	にぶい褐色	△	△		
166	-	一括 溝5	深鉢				ナデ・沈線	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	△	△		
167	-	一括 溝5	深鉢				研磨・沈線	明黄褐色	研磨	明黄褐色	△	△		
168	-	一括 溝5	深鉢				研磨・沈線	にぶい黄褐色	研磨	にぶい黄褐色	△	△		
169	-	一括 溝5	深鉢				ナデ・研磨・突帯	にぶい黄褐色	条痕	にぶい黄褐色	△	△		
170	-	一括 溝5	深鉢				ナデ・突帯	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	△	△		
171	-	一括 溝5	鉢				ナデ・条痕・突帯	暗灰黄色	条痕	暗灰黄色	△	△		
172	P-1	溝5	深鉢				条痕・突帯	灰黄褐色	ナデ	灰黄褐色	△	△		○
173	-	一括 溝5	深鉢				ナデ・突帯	にぶい黄褐色	条痕	にぶい黄褐色	△	△		

第5表 相原遺跡 出土土器観察表(4)

神田 番号	遺物 番号	遺種	器種	口径 (底径)	器高 (残高)	製作 年代 (西暦)	外面の文様・調整	外面色調	内面の文様・ 調整	内面色調		胎土			備考
										明暗石	長石	石英	石炭	その他	
174	P-39	溝5	深鉢				横方向ナデ・突帯	暗褐色～暗褐色	横方向ナデ	暗褐色～暗褐色	○	○			
175	-	底溝5	鉢				横方向ナデ・斜目突帯	明褐色	横方向ナデ	明褐色	○	○			
176	-	底溝5	深鉢				条痕・突帯	にぶい黄褐色	条痕	にぶい黄褐色	△	△			
177	-	底溝5	深鉢				条痕・斜目突帯	にぶい暗褐色	条痕	にぶい暗褐色	○	○			○
178	-	底溝5	浅鉢				ナデ・突帯	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色					
179	-	底溝5	浅鉢				ナデ・斜目突帯	明赤褐色	ナデ	明赤褐色	△	△			
180	-	底溝5	大鉢				ヨコナデ		ヨコナデ						土師器土器
181	-	底溝5	浅鉢	底部		(10.6)	横方向ナデ	淡褐色	ナデ	淡褐色	△	△			
182	-	底溝5	深鉢	底部		(8.0)	条痕	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	△	△			
183	-	底溝5	深鉢	底部		(10.0)	条痕	にぶい黄褐色	条痕	にぶい黄褐色	△	△			
184	-	底溝6	浅鉢	底部		(9.6)	ナデ・研磨・沈線	にぶい黄褐色	ナデ・研磨・沈線	にぶい黄褐色	△	△			
185	-	底溝6	浅鉢				研磨	褐色	研磨	褐色	△	△			
186	-	底溝6	浅鉢				研磨・沈線	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△			波状口縁
187	-	底溝6	浅鉢				研磨・沈線	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△			波状口縁
188	P-11	溝6	深鉢				横方向ナデ・斜目突帯	黄褐色	横方向ナデ	黄褐色	△	△			
189	-	底溝6	深鉢				研磨	赤褐色	研磨	赤褐色	△	△			△
190	-	底溝6	浅鉢	底部		(10.8)	研磨	褐色	研磨	褐色	△	△			
191	-	底溝6	浅鉢	底部		(10.5)	条痕	褐色	条痕	褐色	△	△			△
192	-	底溝7	浅鉢				ナデ	淡褐色	条痕	淡褐色	△	△			波状口縁
193	-	底溝7	浅鉢				研磨	にぶい暗褐色	研磨	にぶい暗褐色	△	△			波状口縁
194	P-6	溝7	浅鉢				研磨	黒色	研磨	黒色	△	△			赤色顔料
195	-	底溝7	浅鉢				研磨	黒色	研磨	黒色	△	△			赤色顔料
196	P-7	溝7	浅鉢				研磨	暗褐色～黒色	研磨	暗褐色～黒色	△	△			
197	-	底溝7	浅鉢				研磨・条痕	にぶい暗褐色	研磨・条痕	にぶい暗褐色	△	△			
198	-	底溝7	浅鉢				研磨	暗褐色～黒色	研磨	暗褐色～黒色	△	△			
199	-	底溝7	深鉢				研磨・沈線	淡黄褐色	研磨	淡黄褐色	△	△			△
200	-	底溝7	深鉢				研磨・凹線文	淡褐色	研磨	淡褐色	△	△			
201	-	底溝7	鉢				研磨・条痕	にぶい暗褐色	研磨・条痕	にぶい暗褐色	△	△			
202	-	底溝7	深鉢				研磨・斜交文	暗褐色	条痕	暗褐色	△	△			
203	-	底溝7	深鉢				研磨	にぶい黄褐色	研磨	にぶい黄褐色	○	○			
204	-	底溝7	深鉢				研磨	にぶい暗褐色	研磨	にぶい暗褐色	△	△			
205	P-6	溝7	深鉢				条痕	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	△	△			
206	P-9	溝7	深鉢				研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△			
207	-	底溝7	深鉢				横方向ナデ・沈線	暗褐色～灰褐色	横方向ナデ	暗褐色～灰褐色	△	△			
208	-	底溝7	深鉢				研磨	にぶい暗褐色	研磨	にぶい暗褐色	△	△			
209	-	底溝7	深鉢				ナデ・条痕	にぶい暗褐色	ナデ	にぶい暗褐色	△	△			
210	-	底溝7	深鉢				横方向ナデ・突帯	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	○	○			
211	-	底溝7	深鉢				ナデ・斜目突帯	黄褐色～淡褐色	ナデ	黄褐色～淡褐色	△	△			△
212	P-1	溝7	深鉢				研磨・突帯	暗褐色	ナデ	暗褐色	△	△			
213	-	底溝7	深鉢				ナデ・斜目突帯	淡褐色	ナデ	淡褐色	△	△			
214	P-5	溝7	深鉢	底部		(4.4)	研磨	にぶい黄褐色	研磨	にぶい黄褐色	○	○			
215	-	底溝7	深鉢	底部			条痕→ナデ	にぶい暗褐色	ナデ	にぶい暗褐色	○	○			
216	-	底溝7	鉢	底部		(10.8)	研磨・ナデ	淡黄褐色	ナデ	淡黄褐色	○	○			
226	P-3	土灰1	浅鉢				ナデ・沈線	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	○	○	○		
227	-	底土灰1	浅鉢				磨消縄文・沈線・斜交文	褐色	研磨	褐色	△	△			
228	-	底土灰1	浅鉢				磨消縄文	褐色	横方向ナデ	褐色	△	△			
229	-	底土灰1	浅鉢				研磨	褐色	研磨	褐色	△	△			
240	-	底土灰1	浅鉢				研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	○	○			
241	-	底土灰1	浅鉢				研磨	暗褐色	研磨・押線文	暗褐色	△	△			
242	-	底土灰1	浅鉢				研磨・波状口縁	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△			波状口縁
243	-	底土灰1	深鉢				磨消縄文・沈線・研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△			波状口縁
244	-	底土灰1	深鉢				研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△			波状口縁
245	-	底土灰1	深鉢				磨消縄文・沈線・斜交文	褐色	ナデ	褐色	△	△			
246	-	底土灰1	深鉢				磨消縄文・沈線・斜交文	淡黄褐色	研磨	淡黄褐色					
247	P-12	土灰1	深鉢				磨消縄文・沈線・斜交文	淡黄褐色	研磨	淡黄褐色					
248	P-22	土灰1	深鉢				磨消縄文・沈線・斜交文	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△			
249	P-11	土灰1	深鉢				研磨	黄褐色	研磨	黄褐色	△	△			
250	-	底土灰1	深鉢				研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△			
251	P-4	土灰1	深鉢				条痕	にぶい赤褐色	条痕→研磨	にぶい赤褐色	△	△			
252	P-16	土灰1	深鉢				研磨	黒褐色	条痕→研磨	黒褐色	△	△			
253	-	底土灰1	深鉢				条痕	褐色	ナデ・条痕	褐色	○	○			
254	-	底土灰1	深鉢				条痕→ナデ	褐色	条痕→ナデ	褐色	○	○			
255	-	底土灰1	深鉢				条痕	暗褐色	条痕	暗褐色	△	△			
256	P-10	土灰1	深鉢				ナデ・条痕	褐色	ナデ	褐色	○	○			
257	-	底土灰1	深鉢				ナデ・条痕	黄褐色	ナデ	黄褐色	○	○			
258	-	底土灰1	深鉢				条痕	褐色	ナデ	褐色	△	△			
259	-	底土灰1	深鉢				横方向ナデ・突帯	暗褐色	横方向ナデ	暗褐色	○	○			
260	-	底土灰1	深鉢				ナデ	黄褐色	ナデ	黄褐色	△	△			
261	-	底土灰1	深鉢				横方向ナデ	にぶい黄褐色	横方向ナデ	にぶい黄褐色	△	△			
262	P-14	土灰1	深鉢				条痕	褐色	条痕	褐色	○	○			
263	P-13	土灰1	深鉢			(30.6)	条痕	にぶい黄褐色	ナデ	にぶい黄褐色	○	○			
264	-	底土灰1	深鉢				条痕	暗褐色	ナデ	暗褐色	○	○			○
265	P-17	土灰1	深鉢			(30.2)	条痕	灰黄褐色	条痕→ナデ	オリーブ黒色	△	△			
266	P-30	土灰1	深鉢	底部		(19.4)	ナデ	にぶい黄褐色	条痕	暗褐色	○	○			
267	P-1	土灰2	鉢			4.0	5.0								景徳鎮
268	P-2	土灰2	鉢			1.7	(11.4)								瓦質土器
273	-	底土灰2	浅鉢				研磨・沈線	にぶい暗褐色	研磨	にぶい暗褐色	△	△			
274	-	底土灰2	浅鉢				研磨	褐色	研磨	褐色	△	△			
275	-	底土灰2	浅鉢				研磨	黄褐色	研磨	黄褐色	△	△			
276	-	底土灰2	浅鉢			(22.2)	研磨	褐色	研磨	褐色	△	△			
277	-	底土灰2	浅鉢				磨消縄文・沈線・斜交文	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△			
278	-	底土灰2	深鉢				磨消縄文	にぶい暗褐色	ナデ	にぶい暗褐色	△	△			△ 中津式
279	-	底土灰2	深鉢				磨消縄文	淡褐色	ナデ	暗褐色	△	△			△ 中津式

第6表 相原遺跡 出土土器観察表(5)

採回 番号	遺物 番号	遺構	器種	口径 (現在幅)	器高 (現在高)	胴部径 底径 (現在底)	外面の文様・調整	外面色調	内面の文様 ・調整	内面色調	胎土				備考
											向付石	長石	石英	その他	
280	S-050	包含層	深鉢				磨消面文・沈線・研磨	淡黄褐色	研磨	淡黄褐色	△	△		△	波状口縁
281	-一括	包含層	深鉢				磨消面文・研磨	褐色	研磨・ナデ	褐色	△	△			波状口縁
282	-一括	包含層	深鉢				磨消面文・沈線・研磨	褐色	研磨	褐色	△	△			波状口縁
283	-一括	包含層	深鉢				沈線・研磨	にぶい黄褐色	研磨	にぶい黄褐色					波状口縁
284	-一括	包含層	深鉢				磨消面文・研磨・沈線	淡褐色	研磨	淡褐色	○	○			波状口縁
285	-一括	包含層	浅鉢				研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△		△	
286	-一括	包含層	深鉢				磨消面文・沈線・研磨	暗褐色	ナデ・研磨	赤茶褐色	△	△			波状口縁
287	-一括	包含層	深鉢				磨消面文・沈線・研磨	にぶい褐色	横方向ナデ	にぶい褐色	△	△			
288	-一括	包含層	深鉢				研磨・沈線	にぶい暗褐色	研磨	にぶい暗褐色	△	△			
289	-一括	包含層	深鉢				研磨・沈線・縞状変帯	淡褐色	研磨・沈線	淡褐色	△	△			
290	-一括	包含層	深鉢				ナデ・変帯	暗褐色	素肌	暗褐色	○	○			
291	-一括	包含層	深鉢				横方向ナデ・素肌・変帯	褐色	素肌	褐色	△	△			
292	-一括	包含層	深鉢				横方向ナデ・素肌・変帯	にぶい黄褐色	横方向ナデ	にぶい黄褐色	△	△		△	
293	-一括	包含層	深鉢				ナデ・斜目変帯	暗褐色	ナデ	暗褐色	○	○			
294	-一括	包含層	深鉢				横方向ナデ・斜目変帯 ・研磨	暗赤褐色	ナデ	暗赤褐色	△	△			
295	-一括	包含層	深鉢				素肌・斜目変帯	淡褐色	素肌	淡褐色	△	△			
296	-一括	包含層	深鉢				ナデ・斜目変帯	にぶい黄褐色	素肌	にぶい黄褐色	△	△			
297	-一括	包含層	深鉢				横方向ナデ・斜目変帯	赤褐色	横方向ナデ	赤褐色	△	△			
298	-一括	包含層	甗				横方向ナデ	にぶい黄褐色	横方向ナデ	にぶい黄褐色	△	△			
299	-一括	包含層	土師片 加工品	3.8	3.5			にぶい暗褐色		にぶい暗褐色					縄文土器 転用
300	-一括	包含層	小皿	(8.8)	1.9	(7.0)	ヨコナデ	黄褐色	ヨコナデ	黄褐色	△	△			
301	-一括	包含層	浅鉢	底部		(10.4)	素肌・ナデ	暗褐色	ナデ	暗褐色	○	○			
302	-一括	包含層	浅鉢	底部		(4.8)	研磨	暗褐色	研磨	暗褐色	△	△		△	
303	-一括	包含層	浅鉢	底部		(6.0)	研磨	にぶい暗褐色	ナデ	にぶい暗褐色	○	○			
304	-一括	包含層	深鉢	底部		(12.2)	素肌	にぶい暗褐色		にぶい暗褐色	△	△		△	
305	-一括	包含層	深鉢	底部	(8.0)	(17.0)	横方向ナデ・素肌	淡褐色	素肌	淡褐色	○	○			
306	-一括	包含層	深鉢	底部	(2.6)	(8.6)	ナデ	淡褐色	ナデ	淡褐色	△	△		△	丹塗り 丸底
307	P-1	包含層	甗	底部			タタキ	赤褐色	ナデ	赤褐色	○	○			

第7表 相原遺跡 出土石器観察表(2)

() で表す場合は現存長

押回 番号	遺物 番号	遺構	種 類	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
217	P-8	溝1	磨製石斧	結晶片岩	(6.3)	(6.2)	(0.8)	(66.1)	基部欠損
218	P-6	溝1	扁平打製石斧	結晶片岩	(7.0)	(7.1)	(1.0)	(70.0)	基部欠損
219	P-40	溝1	扁平打製石斧	珩岩	(8.7)	(5.5)	(1.5)	(97.3)	基部欠損
220	P-58	溝1	扁平打製石斧	珩岩	9.3	6.6	1.0	91.8	完形
221	P-51	溝1	扁平打製石斧	珩岩	17.0	9.0	2.2	417.6	完形
222	P-36	溝1	石匙	サヌカイト	(4.3)	(2.0)	0.9	(7.4)	縦型 先端欠損
223	P-36	溝1	石鏃	サヌカイト	1.5	1.4	0.2	(0.4)	基部欠損
224	P-55	溝1	打製石斧	結晶片岩	(7.6)	(5.4)	(2.6)	(150.7)	刃部欠損
225	P-51	溝1	二次加工潤片	珩岩	(6.9)	(9.5)	1.3	(83.1)	一部欠損
226	P-48	溝1	二次加工潤片	サヌカイト	(4.0)	(5.1)	0.6	(17.7)	一部欠損
227	P-48	溝1	磨石	安山岩	10.0	8.4	2.9	272.3	完形
228	一括	溝1	磨石	安山岩	(6.8)	(5.5)	(2.5)	106.7	完形
229	P-30	溝1	石皿	安山岩	(39.2)	(26.9)	(10.5)	(13900.0)	一部欠損
230	P-22	溝1	石皿	安山岩	26.8	22.9	12.0	(8000.0)	一部欠損
231	一括	溝6	石鏃	サヌカイト	1.9	1.3	3.5	0.8	完形
232	一括	溝5	石匙	サヌカイト	(2.6)	(3.1)	0.5	(8.2)	縦型 一部欠損
233	P-35	溝4	扁平打製石斧	安山岩	13.0	5.9	1.5	173.3	完形
234	P-1	溝7	扁平打製石斧	珩岩	(11.8)	5.6	2.0	(170.6)	基部欠損
235	一括	溝5	石皿	安山岩	(13.2)	(5.4)	(2.5)	(208.6)	大部分欠損
269	一括	土坑1	石鏃	姫島黒曜石	(1.8)	1.9	0.3	(0.9)	先端部分欠損
270	P-8	土坑1	石匙	サヌカイト	4.1	(6.7)	1.0	(30.7)	横型 一部欠損
271	P-31	土坑1	扁平打製石斧	結晶片岩	9.1	5.4	1.3	92.1	完形
272	P-33	土坑1	石皿	安山岩	(17.1)	(11.0)	7.8	(1900.0)	一部欠損
308	一括	包含層	石鏃	姫島黒曜石	(1.1)	1.8	0.3	(0.5)	先端部分欠損
309	一括	包含層	二次加工潤片	安山岩	(4.2)	(2.9)	7.0	(10.6)	一部欠損
310	一括	包含層	スクレイパー	結晶片岩	6.4	11.0	1.2	98.6	完形
311	一括	包含層	スクレイパー	珩岩	5.5	9.5	1.0	48.7	完形
312	一括	包含層	扁平打製石斧	結晶片岩	11.1	6.8	1.8	159.5	完形
313	P-10	包含層	打製石斧	珩岩	(6.5)	5.3	1.7	(92.5)	基部欠損
314	一括	包含層	石皿	安山岩	13.5	12.9	3.0	867.9	完形
315	P-33	包含層	磨石	安山岩	16.4	7.9	6.7	1126.4	完形
316	一括	包含層	磨石・蔽石	安山岩	11.4	9.3	5.5	721.4	完形
317		表採	磨石・蔽石	安山岩	9.7	7.5	5.3	579.3	完形

第4節 まとめ

今回の調査で確認された遺構は、竪穴遺構1基、溝7条、掘立柱建物2棟、土坑3基であった。遺構内及び包含層から縄文時代、弥生時代、中世の遺構や遺物が確認された。遺構の大半は縄文時代のものが主体となる。以下、各遺構・遺物について時代ごとのまとめを行う。

縄文時代の遺構と遺物

竪穴遺構

今回確認された竪穴遺構は、規則性のない柱穴やがが付属していないなどの問題もあるが、遺物の出土状況等も含めてこの遺構は竪穴住居跡とした。今回、竪穴住居跡としては1基にとどまったが、本遺跡の北隣、稲葉川を挟んで対峙する下坂田西遺跡で、平成19年度に竹田市教育委員会が実施した調査で、相原遺跡とほぼ同時期の竪穴遺構が多数調査されている。

竹田市の調査例でも、主柱穴が確認できないものやがのないものが含まれており、さらに床面に浅い段を持つなど類似した構造を持つものである。遺構の時期は、出土土器から磨消縄文系の土器が主体となるものである。西平式土器系統の土器に加え、三万田式系統の黒色磨研土器が共伴するもので、縄文時代後期中葉から後期後半代に比定されよう。

この相原地区一帯は、昭和60年頃から段階的に実施された掘地改良工事及び水田改良工事によって地形の改変を受けている場所であるが、今回竪穴住居跡が確認された場所がこの付近の最高所にあたる場所であることから、当時の土地改良工事において遺構面を完全に破壊するほどの削平は行われなかった場所であると思われる。

溝

今回確認された溝は7条で、最も長い溝が1号溝で、約40mを測った。しかしながら今回の調査範囲が限定されていたためにすべての溝が、部分的な調査となった。

溝内からは、縄文時代後期中葉から後半、さらに晩期の遺物が混在して出土しており、層的な出土状況での分類は不可能であった。そのため各溝の時期の特定は難しい。しかしながら、各溝によってわずかに出土遺物に傾向があるようである。

1号溝は、磨消縄文を施す後期中葉の遺物群と無刻目突帯と刻目突帯がほぼ50%の割合で混じる縄文晩期後半代の遺物が主体となる。2号溝も1号溝とほぼ同様の出土状況を示す。3号溝は、遺物の出土数が少ないが1号及び2号溝とほぼ似通った傾向を示すものと思われる。ただし、1点ではあるが弥生時代後期後半代の在地系の甕の底部が出土している。この点については、下坂田西遺跡の調査例をみても、相原遺跡周辺にも同時期の集落があったことは十分想定できる。

4号溝においては、1～3号溝と若干様相が異なり、磨消縄文を施した土器がほとんど含まれず、縄文晩期の土器が主体となる。5号溝においても、4号溝と同様後期後半代の土器はほとんど含まれず、縄文晩期の土器が主体となる。この傾向は以下5号溝～7号溝も同様であり、調査区の南半部（1～3号溝）と北半部（4～7号溝）で若干の差が生じている。

なお、これらの溝の内、1号溝及び4号溝、5号溝は、基底面直上において晩期の突帯土器が出土していることから、現段階ではこの3条の溝に関しては、縄文時代晩期後半代の所産と考えたい。その他の溝については、調査面積も狭く、遺物の出土状況からも縄文時代後期以降の所産であるという以上の時期の特定には至らなかった。

これらの溝の性格であるが、竹田市が行った下坂田西遺跡の調査では、集落内に70m以上の長さを持ち、幅1.5～2.5mの溝を含む4条の溝が調査されたが遺構の性格はつかめていない。相原遺跡の場合もおそらく集落内に掘られているものと思われるが、今回の調査が非常に限定された範囲での調査であるため、全体像をうかがい知ることができず性格を言及することはできなかった。

土坑

土坑から出土した遺物は、縄文後期中葉から後半と縄文晩期後半代の遺物が混じる。層位をみると、いずれの遺物も遺構の中位から上位で出土しており、流れ込みの状態ですべて出土しているため縄文時代後期以降の所産であるという以上の時期の特定には至らなかった。

縄文時代の遺物

今回の調査で出土した土器は、縄文時代後期～晩期にかけてのものである。縄文後期の遺物は、包含層中より後期初頭に比定される中津式土器（278、279）が数点出土している。中葉以降の遺物としては、竅穴遺構（1～12）などで出土した西平式土器系統や三万田式系統の土器及び黒色磨研土器系統の土器があげられよう。これらの土器については、竹田市の調査例とほぼ同様の内容を示すものである。

晩期の遺物としては、突帯文を施した土器の出土数が縄文晩期の出土総量の中では多い傾向にある。ただし、出土土器をみると時期幅がみられる。

例えば、7号溝で出土した土器（199）のように晩期初頭の大石式系統の土器が初現として、7号溝から出土した口縁部にための沈線と2条巡らせるもの（200）や1号溝から出土した細い沈線を平行して数条施すもの（95～97）がこれに続くものと思われる。95～97は、深鉢に施文するなど在地色の強い遺物ではあるが磁質里式系統の施文形態である。これらの特徴から浦久保式と並行もしくは後続する時期の遺物と思われる。また、短めの鍵状口縁（28、242）の浅鉢や無刻目突帯（77、139、170、259、292など）の深鉢と刻目突帯（87、116、141、177、293など）の深鉢がほぼ同数の割合で混在している。さらに、1点ではあるが黒川式にみられる鱗状突起（289）も混じっており、逆「く」の字状の口縁を持つ浅鉢（146、274など）、などと併せて上菅生B式や下黒野式と並行する晩期後半代に比定される遺物がみられる。

中世

今回の調査では、掘立柱建物2棟と土坑1基が確認された。建物については、2棟の建物が主軸がほぼ東西方向に軒を並べて、規格性を持って建てられていたことが確認されている。下坂田西遺跡の調査では総庇の建物が確認されており、何らかの中核的建物の可能性も想定している。このようなことから相原遺跡においても15世紀から16世紀にかけて中世の集落が展開していたことが想定される。

最後に、今回の相原遺跡の調査結果や隣接する下坂田西遺跡での発掘調査例より、当地周辺は、縄文時代後期初頭には生活の場としての利用が始まり、縄文後期→縄文晩期→弥生時代→古墳時代→中世と連続性を持って生活痕が認められた。特に、出土遺物の量から縄文後期後半代及び晩期後半代には下坂田西遺跡で確認された規模の集落を営むような画期があったものと思われる。

今回の調査では、弥生時代や古墳時代の遺構については今回の調査では確認できなかったが、下坂田西遺跡においては、竹田市の調査や当センターが平成22年度に実施した調査において、古墳時代の集落が確認されていることから、同様の状況が展開していたことが十分想定できる。

参考文献

- 1) 竹田市教育委員会「上深迫遺跡 下坂田東遺跡 下坂田西遺跡」
県営経営体育成基盤整備事業に伴う下坂田地区埋蔵文化財発掘調査報告書 2011
- 2) 坂本嘉弘「東九州における縄文時代晩期開始の問題」 おおいた考古 第6集 1993
- 3) 大分県教育委員会「楠野」大分県文化財調査報告書 第63輯 1983
- 4) 荻町教育委員会「荻台地の遺跡」 IV 1979
- 5) 高橋 徹「大分県考古学の諸問題(Ⅰ)―刻目突帯文土器の出現とその展開について―」大分縣地方史98 1980

写 真 图 版



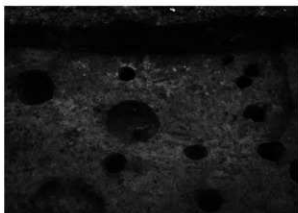
調査区空中写真



基本土層写真 (北西壁)



竪穴遺構遺物出土状況



竪穴遺構完掘状況



1号掘立柱建物完掘状況



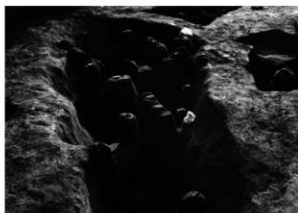
2号掘立柱建物完掘状況



1～3号溝完掘状況 (西から)



1～3号溝完掘状況 (東から)



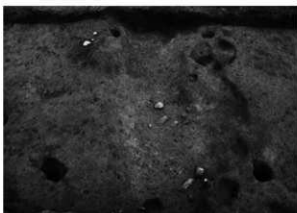
5号溝遺物出土状況



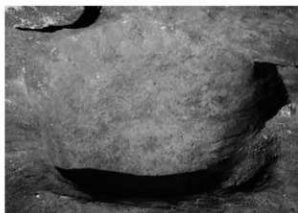
4～5号溝完掘状況（東から）



6号溝完掘状況（西から）



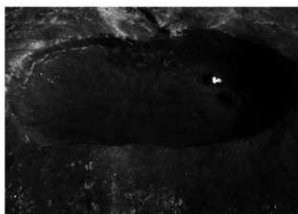
7号溝完掘状況（北から）



1号土坑完掘状況



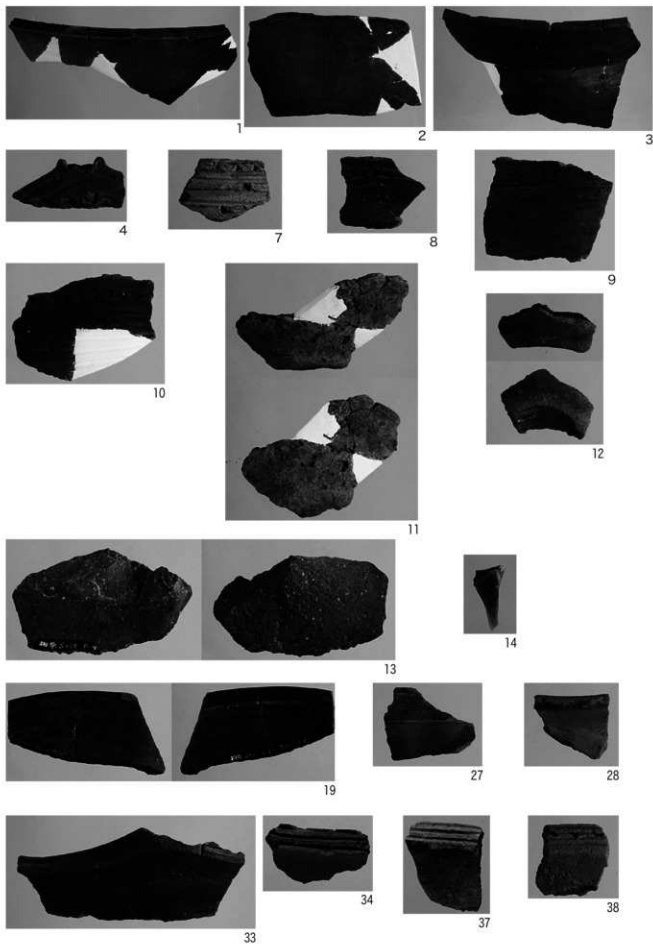
1号土坑遺物出土状況

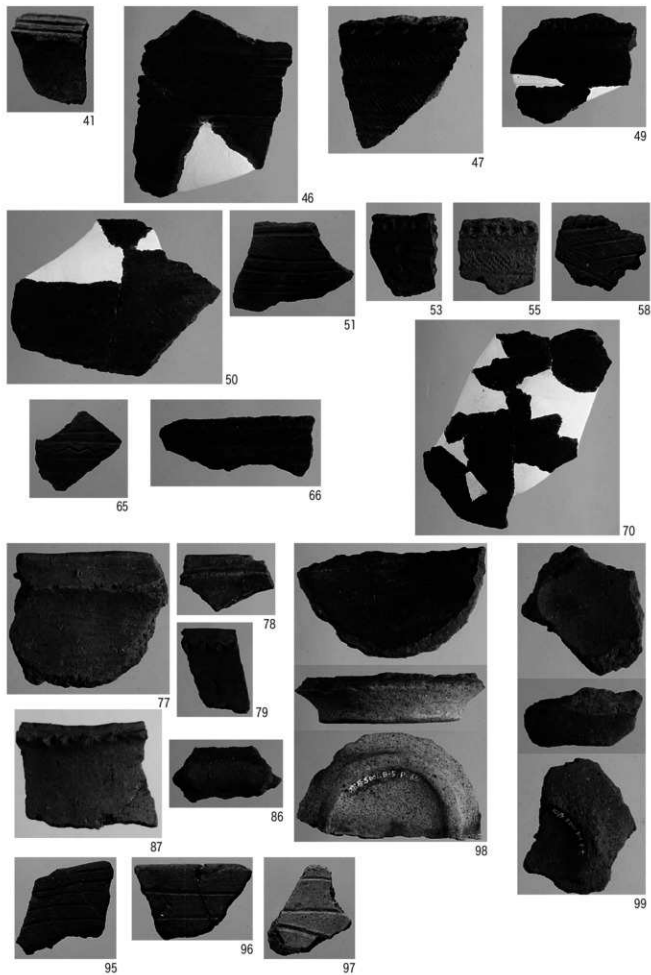


2号土坑完掘状況



2号土坑遺物出土状況







107



108



110



111



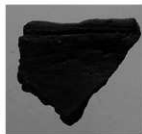
113



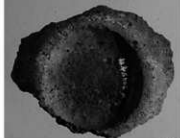
124



125



126



120



128



129



131



134



136



137



139



140



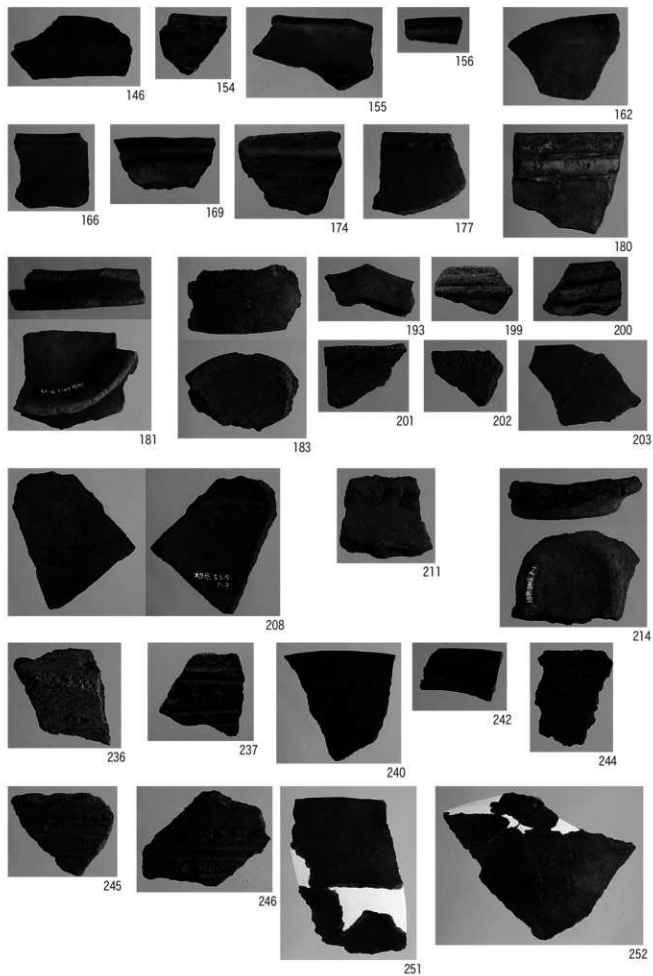
141

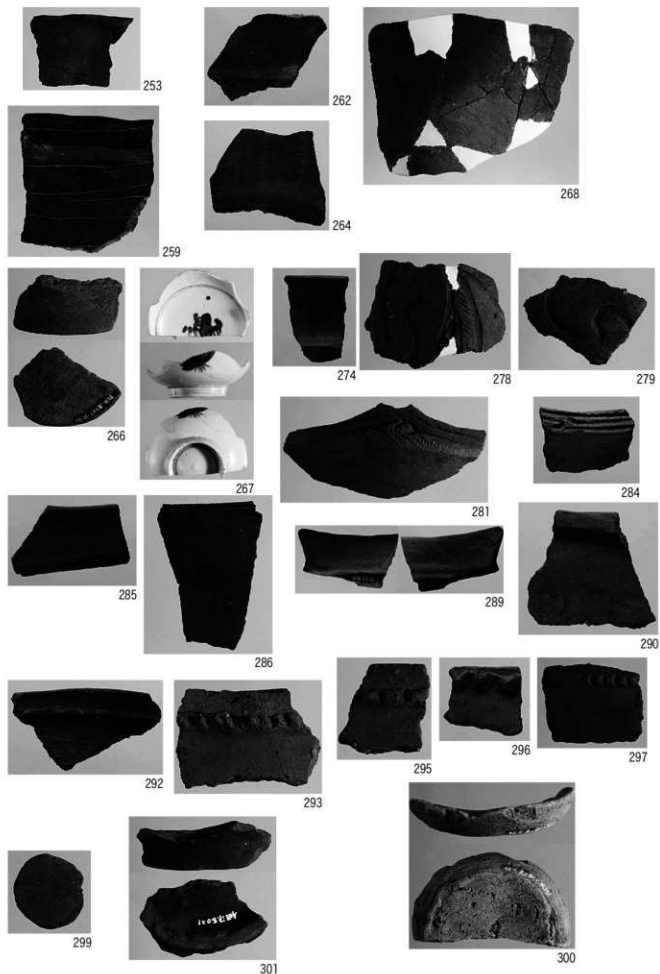


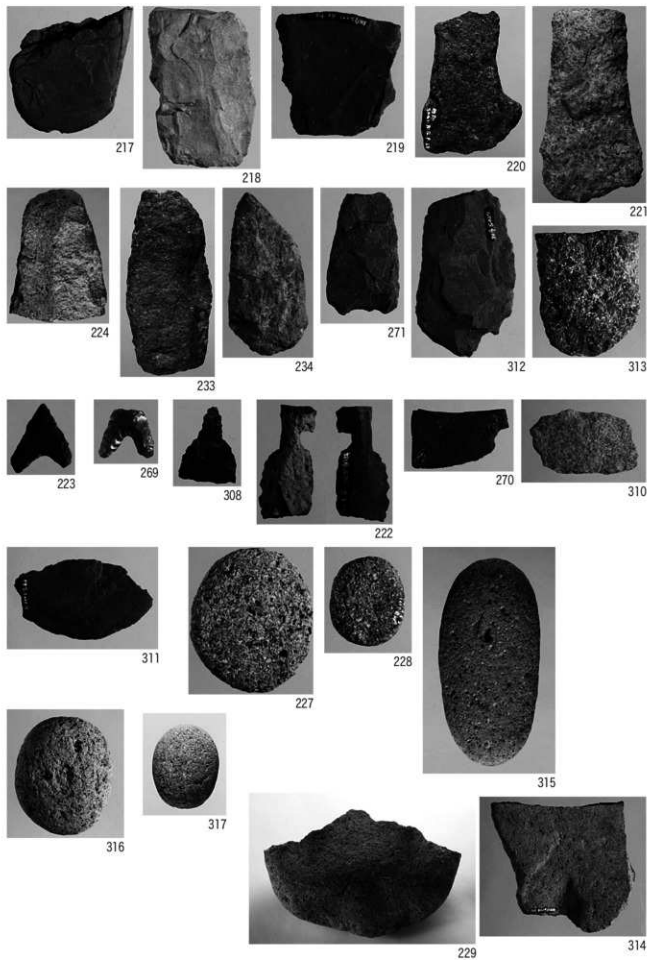
142



145







第4章
下坂田西遺跡



2010年8月 猛暑の夏

第1節 調査の経過

1-1 調査の経緯 (第1図)

下坂田西遺跡は竹田市教育委員会が駐車場整備事業にさきだって2007年に発見され、一部調査された遺跡である(注1 30図)。その本調査個所の北側にあたる河岸段丘斜面を東西に横切るように計画されたのが県道白丹竹田線である。そのため建設予定地の段丘上には遺跡等が存在することが予想された。そこで路線内を試掘調査して、工事以前に遺跡の保護を図る必要が生じた。

試掘調査 路線内にあたる2007年度に竹田市教委が行った試掘調査トレンチの1本から、すでに須恵器等が出土し、下坂田西遺跡の範囲が路線内まで広がることは確実であったが、範囲を確定するため遺跡の立地する段丘上の路線内全体を重機を使って2009年度に試掘調査をおこなった。その結果竹田市教委が調査したトレンチ周辺において竪穴遺構が複数発見された。そのため遺構の確認できた範囲の本調査を行うこととなった。

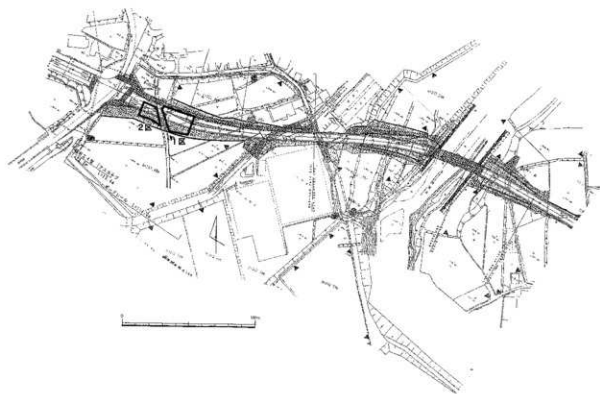
本調査 2010年夏季8月に発掘調査をおこなった。現地の調査実務については九州文化財総合研究所に委託し、田中の指揮のもと、研究所の職員2名と調査をおこなった。現状は水田であったが、重機で水田床土と水田化以前の畑地耕作土を除去すると遺構検出面に達し、その後遺構を検出して掘り下げた。わずか1カ月の調査期間であるが、以下はその日誌抄である。

注1 城戸誠「上深迫遺跡 下坂田東遺跡 下坂田西遺跡」竹田市教委 2011

1-2 調査日誌抄

2010(平成22)年

- 7月16日(金) 支援委託業者に株式会社九州文化財総合研究所決定。さっそく調査員の松浦智氏と段取りを協議。
- 22日(木) 竹田土木事務所担当者と支援業者と3者で調査区の境界確認。
- 27日(火) 調査区の範囲設定。近接する竹田市立城原小学校と宮城台小学校を学校訪問し、発掘調査が行われることを伝え、その間学校の利用をお願いする。



第1図 下坂田西遺跡 調査区の位置

- 28日(木) 調査事務所倉庫、作業員詰所等搬入。
- 29日(木) 1区から重機による表土剥ぎ開始。事務所に電気を引く。竹田市教委文化財課城戸誠氏来跡。
今日から県の担当田中、支援業者の調査員松浦、調査助手吉田正仁により調査開始。
- 30日(金) 引き続き1区の表土剥ぎ。方形の竪穴遺構が頭を出し始める。グリッド振打ち。
- 8月2日(月) 1区調査区の四面の壁を清掃、2区の表土剥ぎ開始。さっそく方形竪穴遺構発見。
- 3日(火) 1区遺構検出作業。遺構配置図を作成し始める。
- 4日(水) 1区SB01掘り下げ。2×3間の掘立柱建物になる。2区壁面清掃。遺構検出作業に移る。
- 5日(木) 1区ピット等掘り下げ。2区遺構配置図作成。
- 6日(金) 1区SH04より6世紀代の須恵器坏蓋出土。調査面積確定。
- 9日(月) 雨天により作業中止。
- 10日(火) 1区遺構掘り下げ。
- 11日(水) 台風4号のため現場中止。風対策実施。
- 16日(月) 1区SK05とSH04掘り下げ。
- 17日(火)～18日(水) 1区SK05とSH04掘り下げ。SH06発見し掘り下げ。
- 19日(木) 1区遺構掘り下げ。
- 20日(金) 1区さらに2区SH24掘り下げ。
- 23日(月)～24日(火) 1区遺構掘り下げ、記録、掘り下げ、2区遺構掘り下げ。
- 25日(水) 1区・2区遺構掘り下げ。工藤幸久氏（大分県地質学会）来跡。
- 26日(木) 1区・2区遺構掘り下げ、記録作業。
- 27日(金) 全体清掃、空撮（九州航空）、SH24写真撮影。
- 30日(月) 1区・2区完掘、写真撮影。今日で現地調査終了。
- 31日以後。事務所撤去。重機による埋め戻しを行う。遺物を埋文センターに搬入。
- 9月14日(水) 支援業者、平面図、写真、遺構デジタルトレース等納入。

なお報告書作成にあたり、遺物の写真撮影は埋蔵文化財センター嘱託友廣美和が行った。

第2節 遺跡の概要と基本層序

2-1 発見された遺構（第2図 第2表）

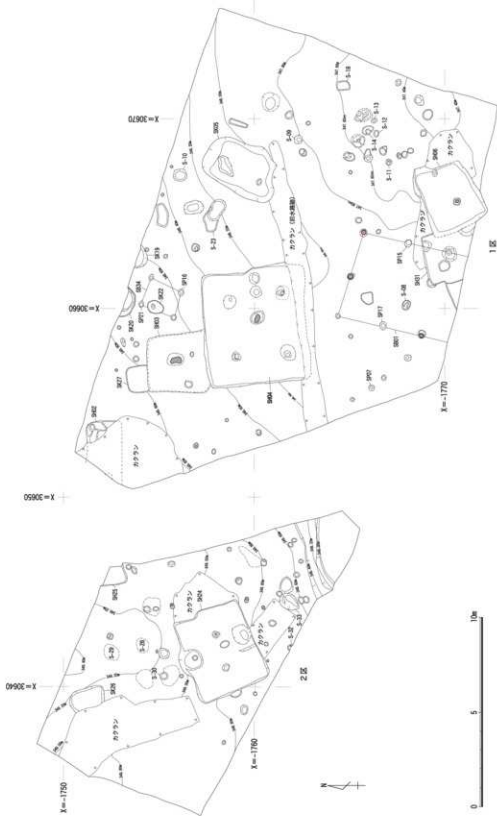
2ヶ所の調査区からは、古墳時代前期後葉の竪穴建物5棟、土坑3基等を検出した。竪穴建物はいずれも方形平面で、4本柱が1棟、2本柱が1棟、無柱穴が3棟発見されている。さらに中世の掘立柱建物2棟を発見した。ほかに時期不明の小土坑やピットが多数発見されたが、時期の不明なものは第2表に一括して記載するにとどめた。

2-2 基本層序（第3図 図版1）

調査区の層序を2区東壁で代表して解説する。第1層は現表土で、その下に水田時の耕作土である第4層があり、その下に水平に硬化してマンガンが沈着した第5層が広がる。その下の第8層は水田化される以前の高地時代の耕作土である。第9層は黒褐色の締まった土層で調査区全体にひろがり、基本的にこの層から遺構が掘り込まれている。第12・13層は黄色土で、弥生中期の壺片（第4図23）はこの層から採集した。さらにその下には断面図にはないが、1cm大の各礫をふくむ黒褐色粘質土と砂礫をふくむ淡黄灰色土が続く。遺構の大半は第9層から掘り込まれ第13層上面で検出したものである。



写真1 下板田西遺跡 全体空中写真



第2図 下坂田西遺跡 1区・2区全体遺構図 (S=1/200)

第1表 下坂田西遺跡 遺構一覧表

遺構番号	調査区	性 格	時 期	切合関係	形態・構造	規 模	最 新 の 出 土 遺 物	残留遺物	備 考
SD01	1区	掘立柱建物	中世	SB01を切る。	2間×2間以上	南北5m以上東西4.7m	—	—	SP15と17から土師小片
SD02	1区	竪穴建物	古墳時代前期	—	方形	5.5m以上×1.5m以上	土師器小片4点	縄文晩期土器片2点	
SD03	1区	竪穴建物	古墳時代前期	SK27を切り、SB04に切られる。	方形無柱穴、地床が1	3.65m×3.10m	土師器	縄文晩期土器片1点	
SD04	1区	竪穴建物	古墳時代前期	SB03を切る。	方形4本柱・貼り床あり、地床が1、小土坑2	南北5.5m東西6.0m	土師器・高坪	縄文後晩期土器	高坪転用桶の引口1点
SD05	1区	土坑	古墳時代前期	—	不整形方形	長さ4.1m、幅2.5m、深さ0.6m	土師器	—	炭焼土土器一括廃棄・埋め戻し?
SD06	1区	竪穴建物	古墳時代前期	SB01を切る。	長方形無柱穴・貼り床あり、地床が1	南北2.1~2.9m、東西3.0~3.2m	土師器	—	土師器を埋置する。
SD07	1区	柱穴	不明	—	円形	30×30cm、深さ15cm	土師器高坪	—	
S-08	1区	自然のピット	不明	—	円形	—	—	—	土師小片2点
S-09	1区	ピット	不明	—	円形	45×40cm、深さ30cm	—	—	土師小片1点
S-10	1区	ピット	不明	—	円形	70×65cm、深さ30cm	—	—	土師器口縁片他2点
S-11	1区	ピット	不明	—	不整形円形	30×30cm、深さ30cm	—	—	縄文小片1点
S-12	1区	ピット	不明	—	長円形	35×25cm、深さ40cm	—	—	土師小片3点
S-13	1区	ピット	不明	—	不整形円形	30×25cm、深さ20cm	—	—	土師割部片1点
S-14	1区	ピット	不明	—	円形	30×30cm、深さ20cm	—	—	土師小片6点
SP15	1区	SB01の柱穴	中世	—	円形	45×35cm、深さ60cm	—	—	土師小片2点
SP16	1区	SB34の柱穴	中世	—	円形	35×30cm、深さ20cm	—	—	土師小片2点
SP17	1区	SB01の柱穴	中世	—	円形	45×40cm、深さ40cm	—	—	土師小片2点
S-18	1区	土坑	不明	—	不整形方形	70×50cm、深さ15cm	—	—	
SK19	1区	土坑	不明	—	円形	1.3×0.6m以上、深さ20cm	—	—	土師器割部片3点
SK20	1区	土坑	不明	—	円形	1.7×0.6m以上、深さ30cm	—	—	土師器割部片2点
SP21	1区	SB34の柱穴	中世	—	円形	35×25cm、深さ30cm	土師器	須恵割部片1点	
SK22	1区	土坑	古墳時代前期	—	不整形円形	100×80cm、深さ35cm	土師器	縄文土器片	SK05と同一個体土師器あり。
S-23	1区	欠番	—	—	—	—	—	—	遺構ではない。
SE4	2区	竪穴建物	古墳時代前期	—	方形2本柱・貼り床あり、地床が1、小土坑2	南北3.8m東西4.7m、深さ0.7m	土師器	縄文後晩期土器	SK05と同一個体土師器あり。
SE5	2区	竪穴建物	古墳時代前期	—	方形・貼り床あり	南北1.5m以上東西1m以上、深さ20cm	土師器片2	縄文晩期土器	
SK26	2区	土坑	古墳時代前期	—	不整形方形	長さ1.95m、幅1.05m以上、深さ0.4m	土師器小片	縄文土器片	覆瓦坑により切られる。
SK27	1区	土坑	古墳時代前期以前	SB03に切られる。	方形	1.4m×1.1m以上、深さ7cm	—	—	土師小片1点
S-28	2区	自然ピット	不明	—	不整形円形	—	—	—	
S-29	2区	自然ピット	不明	—	不整形円形	—	—	—	
S-30	2区	ピット	不明	—	円形	45×40cm、深さ20cm	—	—	土器小片1点
SD1	1区	竪穴建物	古墳時代前期	SB06とSB01に切られる。	方形無柱穴・貼り床あり、小土坑4	南北3.0m以上、東西2.7m	土師器	縄文中晩期土器	
S-32	2区	ピット	不明	—	円形	30×20以上cm、深さ15cm	—	—	土師小片1点
S-33	2区	ピット	不明	—	不整形	115×90cm、深さ20cm	—	—	縄文小片1点
SB4	1区	掘立柱建物	中世	—	1間×1間	180×150cm	底部回転系切りの土師器	—	SP21から土師器

第3節 縄文・弥生時代の遺物 (第4図 図版8・9)

縄文時代と弥生時代の遺構は今回の調査区においては発見されなかったが、古墳時代の遺構の覆土中や、遺構検出時に比較的多数の遺物が出土した。南側の竹田市教委調査区では縄文時代後期の遺構や弥生時代後期さらに古墳時代後期の竪穴建物が発見されているが、今回の調査区からは発見されなかった。その時代の遺構は、南側の河岸段丘平坦面に遺構が存在すると思われる。

3-1 縄文時代

中期 1はSH031検出時に出土した、細かい縄文を施文した上に斜め方向に突帯を貼り付け、刻み目をほどこした胎元式土器の深鉢の破片。

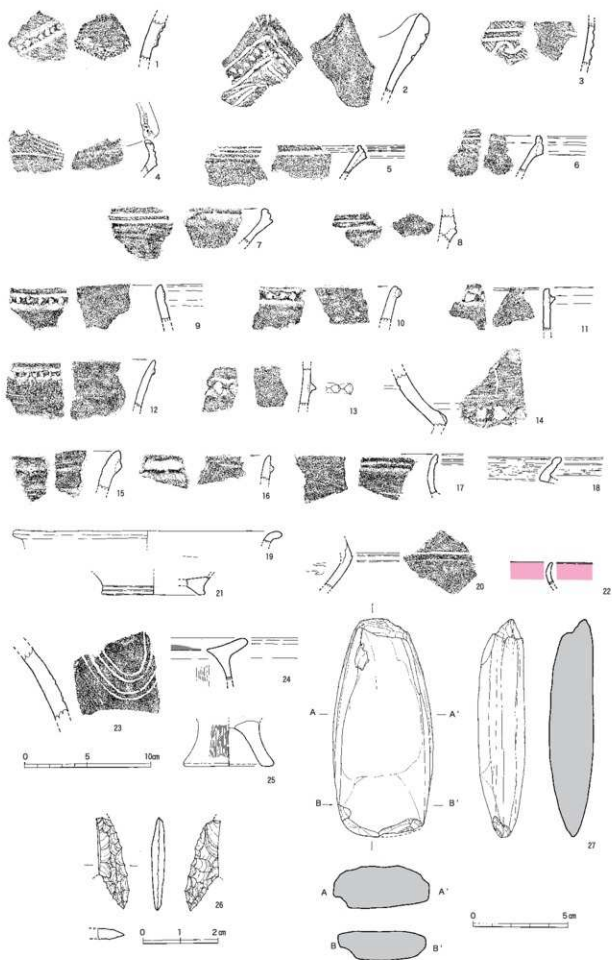
後期 2は1区表土剥ぎ中に出土した、二重の沈線の間に刺突文を1列施したコウゴロ松式土器の深鉢波状口縁。3は2区SH24竪穴の貼り床内から出土した後期中ごろの磨消縄文に沈線文を施す西平式よりやや古い時期の鉢胴部片。4は1区SH04覆土から出土した波状口縁に3本沈線の西平式の深鉢口縁片。5は2区SH24覆土出土の後期後半西平式から三万田式古段階の深鉢口縁で、口縁帯に縄文を施し、外面に3本内面に一本の沈線がめぐる。6は1区SH31出土の西平式から三万田式古段階の深鉢口縁片、文様構成は5と同じ。7は1区SH04出土の深鉢口縁片、沈線は2条。8は1区SH04出土の深鉢の胴部片。

晩期 9から14はいずれも古墳時代の遺構覆土から出土した縄文時代晩期の刻目突帯文土器の深鉢である。9～12は口縁外面直下に一条の突帯を貼り付けてその上から刻目を施す。14は胴部屈曲部に直接刻目をいれたもの。15から17は同じく古墳時代の遺構覆土から出土した刻み目のない突帯文土器である。13～16は突帯を断面三角状に貼りつける。17は沈線で区画するものである。18は口縁端部を内側に肥厚させ、外面に一条沈線をめぐらす浅鉢の口縁片。横方向のミガキが明瞭で、胎土にこの付近で産出しない大型石英粒子を含むので、遠隔地からの搬入品であると考えられる。19は口径21cmほどに復元される浅鉢の口縁片。20は胴部屈曲部に二条の沈線を施した浅鉢片。21は浅鉢の底部で高台状の底部外面に二条の沈線を施す。22は2区SH25覆土から出土した、丹塗りの小型壺形土器の口縁片。胎土に砂粒は少なく、丹塗りは内外破片の全面に施されている。

3-2 弥生時代

土器 いずれも古墳時代前期の遺構中から出土した遺物である。23は大方県沿岸部に分布の中心をもつ弥生時代中期後半の下城式土器の壺の胴部片で、二条一単位の沈線を二重にして円弧を描く。24と25は熊本県に分布の中心を持つ中期後半の黒髪Ⅱ式土器。24は内面に突出がある口縁、25は脚台部で、いずれも胎土は地元の土器とことになっており、熊本県地域からの搬入品と考えられる。

石器 26は安山岩製の打製石鏃、先端と2分の1が失われている。27は蛇紋岩製の磨製石斧。長さ11.5cm重さ254gの小型品である。基部は自然面を残し、刃部が一方に偏ることと断面形態から横斧として使用されたものと考えられる。刃部は使用による刃こぼれがある。このほかにSH06の覆土中から姫島産黒曜石の小破片が3点出土している。



第4図 下坂田西遺跡 縄文・弥生時代の遺物 (S=1/3 26=1/1 27=1/2)

第4節 古墳時代前期の遺構と遺物

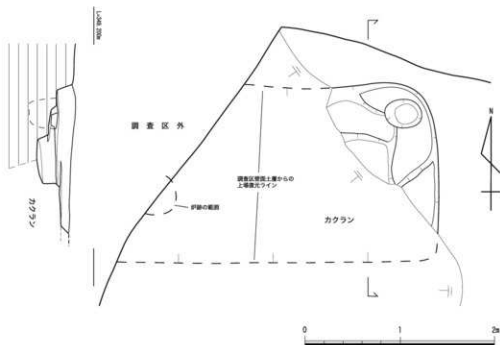
4-1 遺構の配置 (第2図 写真1 図版1)

北から南に傾斜する斜面に集落は作られている。1区では4本柱の竪穴建物1軒、無柱穴の小型竪穴建物3軒、廃棄土坑1基、2区では2本柱の竪穴建物1軒と竪穴1軒、さらに土坑1基を発見した。SH03をSH04が切り、SH31をSH06が切るといふ相互の切りあい関係があるので、同時期に存在したものではない。しかし遺構密度がそれほど濃くない場所で、遺構が重複するのは、同じ場所あるいは範囲が、宅地として一定していたからであろう。

4-2 遺構名説

竪穴遺構SH02 (第5図 図版2)

1区北西隅で覆土坑に大きく破壊された状態でコーナーを検出した。調査区の壁にも落ち込みがあり、そこに跡が認められた。削平された範囲が南側に推定されるので、本来は竪穴遺構になると推定される。覆土は炭と焼土の小粒子を多量に含む茶褐色粘質土の単一層からなり、残留した縄文土器小片 (第4図10・16) のほかに、土師器の破片が出土しているが、図示できるものはない。



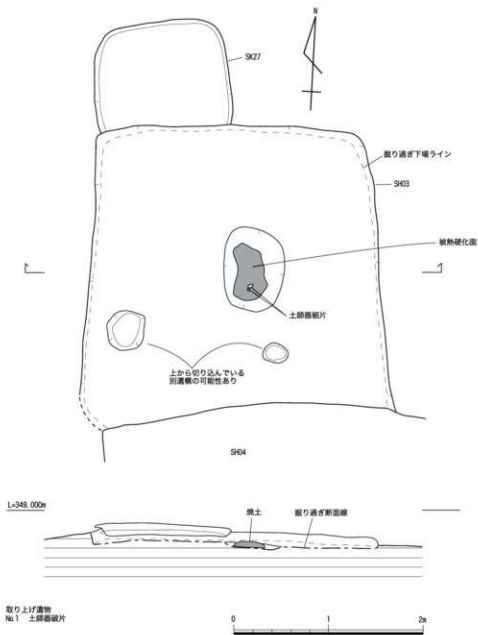
第5図 下板田西遺跡 1区 SH02平面図・見通し図 (S=1/40)

竪穴建物SH03・土坑SK27 (第6図 図版2)

隅丸方形の土坑SK27をSH03が切る。SK27は1.4m×1.1m以上、深さ7cmの浅い土坑で、底面は平坦である。覆土は茶褐色粘質土の単一層からなり、土師器の破片が出土しているが、図示できるものはない。

SH03は中央に地床があり、床面を方形に削りだして平坦にしているのが竪穴建物と推定されるが、柱穴はない。2ヶ所のピットは検出時に発見されたもので、埋没後に上部から掘られたものである。平面形は3.05m×3.10mの方形で床面積8.6㎡以上である。長門形に掘りくぼめた地床が中央部が被熱赤変した硬化面となり、厚さ数cmの焼土の堆積があった。覆土は茶褐色粘質土の単一層からなり、残留した縄文土器片 (第4図13) のほかに内面へ削りて外面に煤の付着した土師器甕の胴部片や壺の小片が出土しているが、図示できるものはない。

地床の凹みは90×60cmの規模は、ほかの竪穴建物のほうが大きく、竪穴が小規模にもかかわらず地床が大きく切られていることから、この竪穴が炊事場などの特殊な機能を持っていたことをうかがわせる。

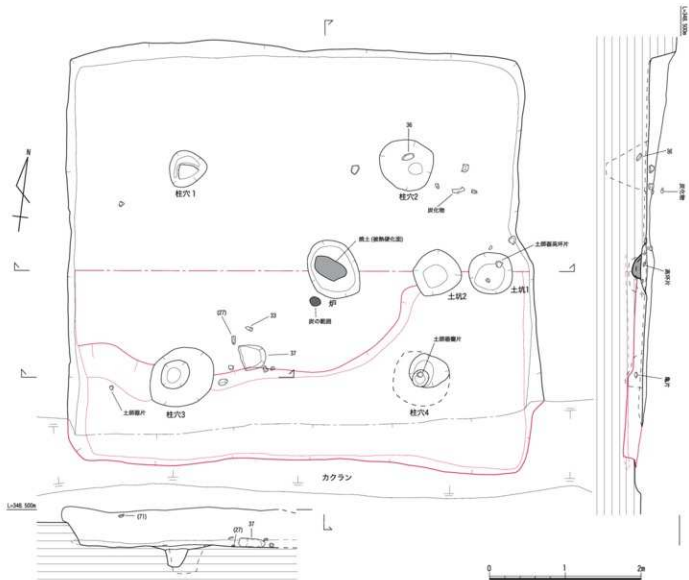


第6図 下坂田西遺跡 1区 SH03・SK27平面図・見通し図 (S=1/40)

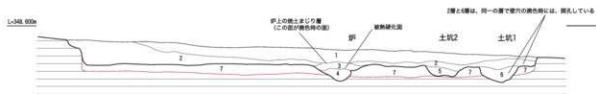
竪穴建物SH04 (第7～10図 図版2)

1区中央西寄りにおいて検出した方形の竪穴建物である。およそ南北5.5m東西6.0m、床面積30.7㎡。竪穴の方向は長軸で方位角84度。床面は平坦であるが南に向かって6cmほど下降する。そのままだと生活に不便なので、本来の傾斜かどうかは検討を要する。壁は北側で40cmほど残っていたが本来はさらに高いものと考えられる。床面は厚さ10cm前後の基盤層由来の粘土ブロックをまじえた黒褐色粘質土(第8図7層)を敷き詰めた貼り床である。貼り床上面は使用のためかかなりの凹凸がある。床面南半分を除去して竪穴の掘削状況を観察したところ壁に沿う形で5cmほど低くなった幅広の掘りくぼめ(平面図赤ライン)があり、方形の竪穴はまず方形の輪郭を掘下げその後中央を掘下げることで深さを均等に調整したものと考えられる。その床土の中には内面へう割り土師器の破片や壺の口縁(第10図28)などの破片が含まれていた。

柱穴や地床などが竪穴内の構造物は、すべて貼り床の上から掘り込まれている。柱穴は対角線上に4本検出し、柱穴4では柱根を認めた。柱間は中心から測って東西3.1～3.25m、南北2.8mである。径20cmほどの円形の本材を想定できる。柱を据え付けたのちに床面を貼る場合があるが、この竪穴はそうではない。そのため柱穴の埋め土が締まっていなかったのか、柱穴の上面はやや陥没していた。中央からやや東に寄って床面を掘りくぼめた地



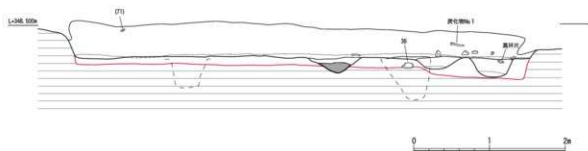
第7図 下坂田西遺跡 1区 SH04平面図・見通し図 (S=1/50)



SH04 土層記号

- | | | | | |
|------------|----------|-------|------------------------------|-------------------|
| 1. 灰黄褐色粘質土 | 7.205A/2 | よこしまる | φ1~5mm次の暗褐色砂を含む | 住居跡の埋土 |
| 2. 灰褐色粘質土 | 7.197A/2 | よこしまる | φ1~5mm次の暗褐色砂を含む | 住居跡の埋土 |
| 3. 灰褐色粘質土 | 1079A/3 | よこしまる | φ1~5mm次の灰土とφ1~3mm次の灰化土片を少量含む | 中央部の埋土 |
| 4. 灰褐色粘質土 | 1079A/3 | よこしまる | φ10~30mm次の灰土に土ブロックを多数含む | 土坑1の埋土 |
| 5. 灰褐色粘質土 | 1079A/3 | よこしまる | φ1~5mm次の暗褐色砂を少量含む | 土坑1の埋土 |
| 6. 灰褐色粘質土 | 1079A/3 | よこしまる | φ1~5mm次の暗褐色砂を少量含む | 土坑1の埋土 |
| 7. 黄褐色粘質土 | 1079G/2 | よこしまる | φ10~30mm次の暗褐色ブロックを多数含む | φ1~5mm次の灰化土片を少量含む |

第8図 下坂田西遺跡 1区 SH04東西土層図 (S=1/50)



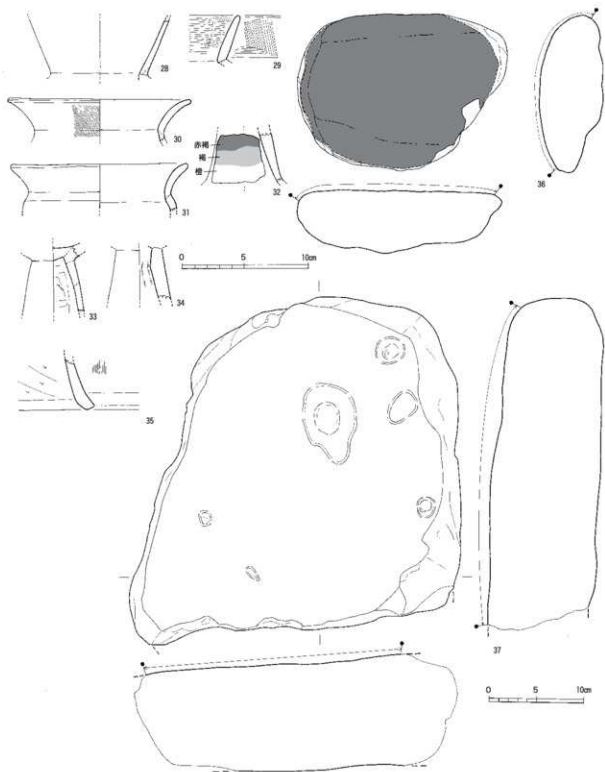
第9図 下坂田西遺跡 1区 SH04見通し図 (S=1/50)

床ががある。凹みは、85×65cmの規模で、底面は被熱して硬化し焼土の堆積をみとめた。がの偏った方向にむかって2基の小土坑が並んでいた。土坑1は壁際、土坑2はがと土坑1の間に、掘られている。ともに径50～60cmの略円形で深さは20cm程度である。両土坑ともその埋土は堅穴覆土と同じ土からなり、貼り土が行われたり異なる土で埋め戻された痕跡はなく、堅穴築造時には地床がと同様、開口していたものと推定される。地床がと小土坑の存在からこの建物は住居として使用されたものと考えられる。

埋没の状態は特に不自然な点はなく、中央に窪みを残しながら自然に埋没していった状態である。出土した遺物は礫、土器の小片、石器などが覆土下層（第2層）から出土したが、いずれも小破片が散在したもので、唯一37の磨り面をもつ台石が床面に密着してそのまま出土した。また縄文時代の遺物が多く混ざり込んでいた。おそらく堅穴建物移転廃絶後は、自然に窪みがのこり、そこに周辺からの不要物の廃棄があり、土器の破片が残されたものであろう。したがって以下に記載する遺物は直接この堅穴住居に生活した住人とは無関係であるが、住居の使用時期を推定する材料にはなるだろう。

第9図28は貼り床内から出土した土師器直口壺の口縁部破片で、復元径部径は7.6cmと小さい。29から35は覆土内出土の土師器片である。29は土師器甕の口縁部片、内外刷毛目調整で仕上げているが、器厚は厚い。30は同じく甕の口縁部片だが径部が屈曲せず、胎土もやや異なっている。復元口径14.4cm。31は小型の甕あるいは壺の口縁部片。復元口径14.0cm内外とも丁寧なナデで仕上げ、刷毛等はみえない。胴部径は口縁径より細いと推定される。32は土師器高環脚部を転用した輪の羽口の破片である。胎土には石英粒子が含まれ、ほかの土師器とはやや異なっている。鈍い赤褐色に変色は被熱によるもので、脚上部に行くほど変色も進み、硬化変質する。高環の坏部をはずし脚部の上部先端をがの側面に差し込んだ転用羽口に使用されたものであると考えられる。33は床面から5cmほど上で出土した高環の顔部片である。坏部にはミガキの跡がある。胎土に微細なチャートや石英小粒子が多く含まれる搬入品である。高環の製作技法は坏部と脚部をまず一体で製作する連続成形後に円盤充填を行っている。34も高環脚部片である。35は内面にヘラ削りを施す器台状土器の脚部片か？。以上の内29.31.34.35は角閃石粒子をふくむ凝灰岩に由来する在地の胎土を用いている。36は柱穴2の掘形埋土内から出土した一面に磨り面をもつ石皿状の12～16cmの石器である。凝灰岩質安山岩で、重さ1500gである。37は柱穴3の近くの床面に密着して発見された35cm前後、厚さ11cm強、重さ23kgの安山岩製の石皿である。上面のみ磨り面があり他の面は自然面のままである。36と37の石皿状石器は縄文時代の遺物の可能性もあるが、大野川上流部の集落遺跡では古墳時代前期になっても、石皿や磨り石が使用されているので、ここでは堅穴の時代の遺物と考えたい。

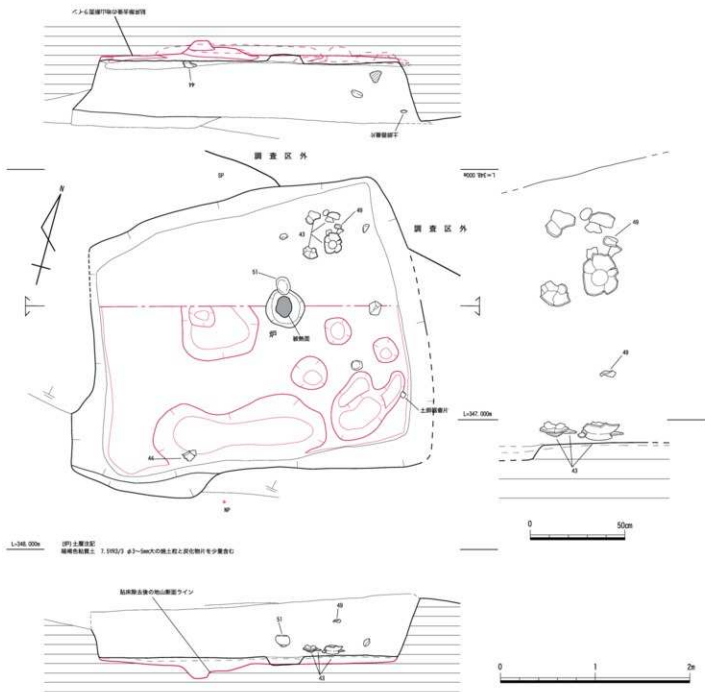
以上まとめると堅穴建物SH04は①地床がや壁面土坑の存在と床面積の規模から居住用として使用された。②ほぼ正方形の4本柱をそなえ、すでにベッドを消失していることや土師器の形態などから古墳時代前期後半に使用されたもので、③この付近には32の高環転用羽口を使用する鍛冶職人が訪れていたことが推定される。



第10図 下坂田西遺跡 1区 SH04出土遺物 (S=1/3 37=1/4)

竪穴建物SH06 (第11~13図 図版3・4)

1区南端において検出した方形の竪穴建物で、竪穴遺構SH31を切っている。底面ではかつて南北2.1~2.9m、東西3.0~3.2mの矩形で床面積8.0㎡である。竪穴の方向は長軸で方位角66度。床面は傾斜のない平坦に作られている。壁は北側で60cmほど残っていた。本来はさらに高いものと考えられる。床面は厚さ10~20cm前後の基盤層由来の粘土ブロックをまじえた黒褐色粘質土(第12図6層)を敷き詰めたしっかりした貼り床である。貼り床上面は使用のため明瞭に硬化している。床面南半分を除去して竪穴の掘削状況を観察したところ壁に沿う形で10cmほど低くなった掘りくぼめ(平面図赤ライン)が数か所ある。その床土の中には土師器直口壺の口縁(第13図39)などの破片が含まれていた。北側の壁面には黄色土と黒色土の混じった層(第12図5層)が壁に沿って貼りつい



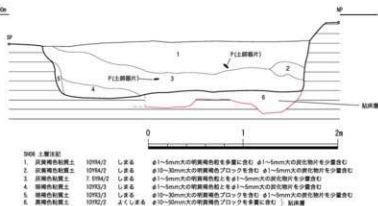
L-346.000 (P)土層透視
 縦向き断面 1. 1993/3 43-50cmの掘土層と灰化層片を多少露出

第11図 下板田西遺跡 1区 SHO6平面図・見通し図・詳細出土状況図 (S=1/40・1/20)

ていた。これは本来壁材と壁面の間に入れた土であろう。

柱穴はなく、中央からやや東に寄って床面を掘りくぼめた地床跡があり、跡は貼り床の上から掘り込まれている。凹みは43×42cmの規模で、底面は被熱して硬化し、焼土の堆積をみとめた。また地床跡からつく床面全体に薄く炭を含む層が広がっていた。堅穴が小規模にもかかわらず地床跡が切られていることは、この堅穴が火力を使用する炊事場あるいは、ほかの特殊な機能を持っていたものと考えられる。SH03と同じ性格の遺構といえる。

埋没の状態は標高の高い北側から埋没していった状態である。短時間に埋没した状況を思わせる。底面に遺棄された土師器の出土状況から見て、人為的に埋め戻された可能性が高い。覆土の最下部床面直上で、土師器の甕を2個体発見した。1個体(第13図43)は堅穴の北東隅に逆さにして置かれた状態で出土した。胴部上位以上は口縁部を含めてそのまま逆さで、胴部の破片はばらばらになって周囲で見つかった。しかし底部の破片は見つからず、恐らく廃棄前に底部をぬいて底部破片はその行為のおこなわれた場所に廃棄されたものであろう。もう一個体の甕(第13図44)は胴部上半4分の1片が、堅穴南西の床面直上に内面を上にして発見された。また出土位



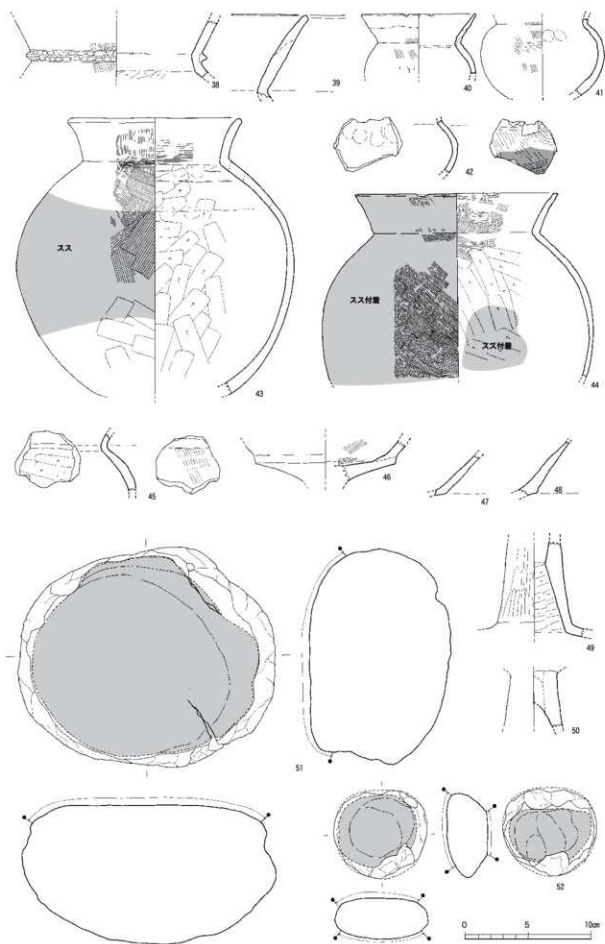
第12図 下坂田西遺跡 1区 SHO6南北土層図 (S=1/40)

中上層(第12図1・3層)から出土したが、いずれも小破片が散在したものであった。

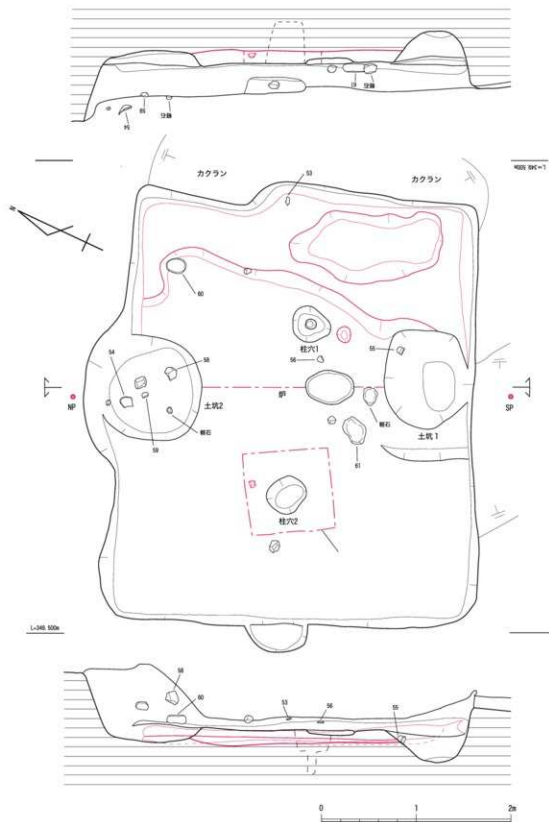
第13図38は竪穴南東部の覆土内から出土した安国寺式の壺形土器の頸部片である。頸部径は13.6cm、胎土は在地産で、胴部内面にはヘラ削り痕があり、外面はハケ仕上げの後、ヨコナデをおこなわず、指圧痕を文様にした三角突帯をほどこす。39は貼り床土中から出土した直口口縁の土師器壺の口縁部片。40と41は同一個体と推定される竪穴東部の覆土内から出土した小型の土師器壺片。口縁部径8.8cm、胴部最大径8.8cmと胴部に比べて口縁部が大きく作られている。胎土は在地産で、口縁部外面に粘土紐の接合痕がのこり、内面はナデ仕上げで外面にはハケが残る。口縁部に欠けた部分があるが、故意のものかどうかは不明。42は竪穴南東部の覆土内から出土した小型壺の胴部片で外面下半に煤が付着している。外面のハケが荒く、40・41とは別個体である。43は竪穴の北東隅に逆さにして置かれた状態で出土した土師器の甕。口径13.7cm、胴部最大径21.9cm、器高は21.8cm以上。胎土は在地産で、胴部内面上位に二条ないし三条の粘土紐接合痕と指圧痕がのこりその上を不完全なヘラケズリが下から上に掻き上げている。外面上半から口縁部はハケメ調整で下半はヘラ状工具による調整である。胴部中に煤が付着しているため、実用に供されたものである。44は竪穴南西部の床面直上に内面を上にして発見された土師器甕である。口径16.0cm、胴部最大径21.4cm。胎土はほかの土師器とやや異なっているため、この集落の産ではないだろう。胴部から口縁部さらに胴部内面までいったん細かい条痕をもつハケメ調整をおこなった後、口唇部はヨコナデで端面を作りだし、胴部内面はヘラケズリで薄くする。43に比べて端正につくられ、かつ布留式の製作技法を守っている。胴部外面には43と同じく一部に煤が付着し、内面も黒色に変色し、二次加熱をうけている。口唇部には一カ所、故意の打ち欠きがある。これは竪穴埋置きに先立つ儀礼行為の跡であろう。45は竪穴北西部の覆土内から出土した在地産胎土の甕の頸部片、内面に横方向のヘラケズリが観察される。46・47・48は竪穴東部の覆土内から出土した土師器高坏の坏部片。胎土は砂粒の多い在地産。48は摩滅が激しく、残留遺物である。49は竪穴北東部の覆土上位から出土した土師器高坏の脚部上位片。在地産胎土を用い、内面は横方向のヘラケズリが明瞭に観察され、外面はタテ方向のヘラ磨きがよく残る。技法・形態ともSH04出土の高坏片(第10図34)と似ている。50は竪穴南西部の覆土内から出土した在地産胎土の高坏脚部で、下部から粘土をつめて中実にする古墳時代初期に伝わった伝統的V様式系の技法を残している。内外面ともナデ調整。51は竪穴中央の竪穴の上位から出土した一面に磨り面をもつ完形の石皿状の石器である。凝灰岩質安山岩の円盤を利用したもので、重さ5000gである。52は竪穴北西部の覆土内から出土した重さ220g拳大の安山岩製の磨石である。上下2面に磨り面があり他の面は自然面のままである。両者の石皿状石器は縄文時代の遺物の可能性もあるが、大野川上流部の集落遺跡では古墳時代前期になっても、石皿や磨り石が使用されているので、ここでは竪穴の時代の遺物とする。

以上まとめると竪穴建物SH06は①貼り床構造の竪穴で、②柱を使用しないほどの規模の上層が想定され床床を伴うことから、住居ではなく炊事施設などとして建設利用され、③廃絶時には実用の甕を破壊埋置する儀礼がおこなわれている。④時期は土器型式から推定して古墳時代前期後半である。

置は特定できなかったが、同一個体と考えられる東半の覆土中から出土した二片の小型壺の破片(第13図40・41)も甕と同じ部位が発見されているので、同じ時に廃棄された可能性がある。これらの土師器は竪穴建物廃絶直後におこなわれたこの建物を対象にした儀礼行為にともなって住居床面に供えられたものと推定される。ほかに、土器の小片、石器などが覆土



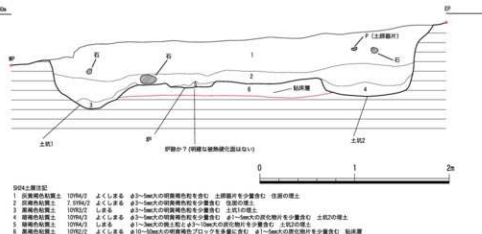
第13図 下坂田西遺跡 1区 SH06出土遺物 (S=1/3)



第14図 下坂田西遺跡 2区 SH24平面図・見通し図 (S=1/40)

竪穴建物SH24 (第14～18図 図版4・5)

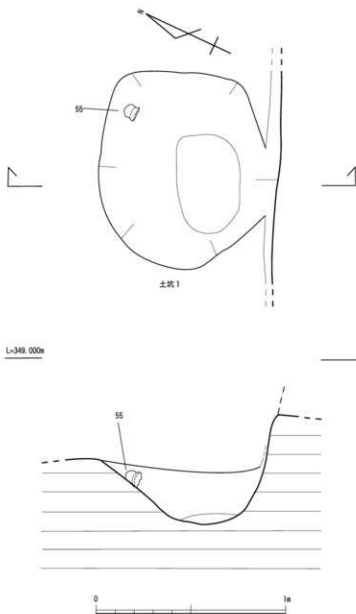
2区中央南寄りにおいて検出した方形の竪穴建物である。およそ南北3.8m東西4.7m、床面積15.9㎡。竪穴の方向は長軸で方位角65度。床面は傾斜のない平坦に作られている。壁は北側で70cmほど残っていた。本来はさらに高いものと考えられる。床面は厚さ15cm前後の基盤層由来の粘土ブロックをまじえた黒褐色粘質土(第15図6層)を敷き詰めた貼り床である。貼り床上面は使用のためかかなりの凹凸がある。床面東半分を除去して竪穴の掘削状況を観察したところ壁に沿う形で15cmほど低くなった幅広の掘りくぼめ(平面図赤ライン)があり、方形



第15図 2区 SH 24東西土層図 (S=1/40)

の竪穴はまず方形の輪郭を掘下げ、その後中央を掘下げることで深さを均等に調整するものと考えられ、SH06と同じ工法である。その床土の中から甕の口縁（第17図57）などの土師器破片が含まれていた。SH24同様貼り壁らしき土層が東西の壁で観察された。

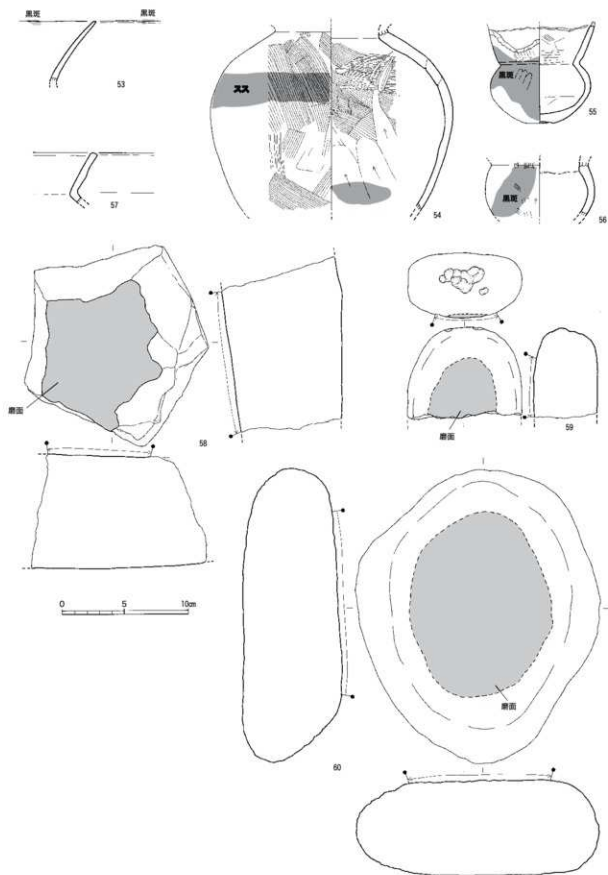
柱穴や地床などが竪穴内の構造物は、すべて貼り床の上から掘り込まれている。柱穴は東西軸上に2本検出し、柱穴1では柱根を認めた。径10cmほどの円形の木材を想定できる。柱間は中心から測って1.8mである。中央からやや南に寄って床面を掘りくぼめたがらしき窪みがある。凹みは50×35cmの規模で、焼土炭混じり層（第15図5層）の堆積をみとめたが、焼土層や被熱硬化面はなかった。しかしこの凹みの周囲から土坑1に流れ落ちるように炭層の広がりが観察されたので、竪として利用されたことは間違いない。一方、南北軸中央の壁面に接して大型の土坑が掘られていた。土坑1は南側壁際、土坑2北側壁際に掘られている。土坑1は105×90cm深さ35cmの規模で断面は半円形をなし、土坑2は110×105cm深さ15cmの浅い逆台形の形態である。両土坑とも埋土は竪穴覆土の同じ土で、貼り土が行われたり、異なる土で埋め戻された痕跡はなく、竪穴廃絶時には地床がと同様、開口していたものと推定される。特に土坑1では竪



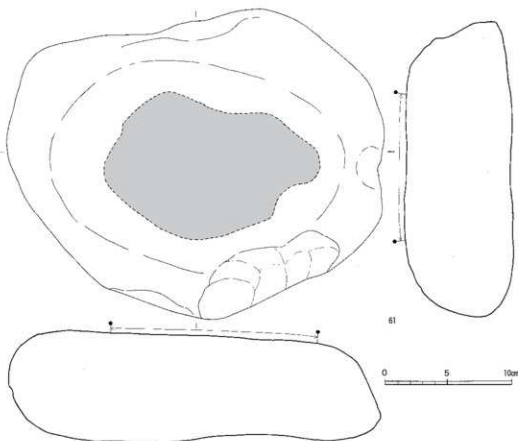
第16図 下坂田西遺跡 2区 SH 24土坑1平面図・見通し図 (S=1/20)

の方向から炭の混じった層をかきだしたような堆積（第15図3層）があり、竪の使用中には大きく開口していたことは確実である。このような地床と土坑の存在からこの建物は住居として使用されたものと考えられる。

土坑1の内部傾斜面直上で、土師器の小型丸底甕を1個体発見した（第16図）。この個体（第17図55）は土坑斜



第17図 下坂田西遺跡 2区 SH24出土遺物1 (S=1/3)

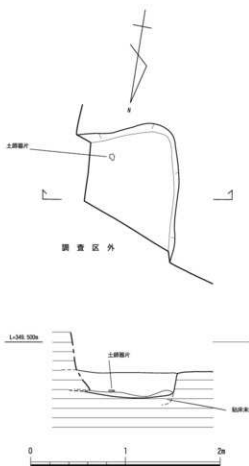


第18図 下坂田西遺跡 2区 SH24出土遺物2 (S=1/3)

面の中央に口をむけて横倒しの状態で出土した。口唇部をひろく打ち欠いており、この壺は使用できないという表示をしたのち、埋置したものと推定される。

埋没の状態は特に不自然な点はなく、中央に窪みを残しながら自然に埋没していった状態である。出土した遺物は礫、土器の小片、石器などが覆土下層（第15図2層）から出土したが、いずれも小破片が散在したもので、唯一土坑2の上層（第15図1層）において外側から内側に流れ込むように石器と土器片（第17図54・58・59）が出土し、竪穴埋没の最終局面で遺物の廃棄が行われたことを示している。また石皿2点が床面直上に残されていた（第17図60・第18図61）。これはSH06と同じ状況である。また縄文時代の遺物が多く混ざり込んでいた。おそらく竪穴建物移転廃絶後は、しぜん窪みがのこり、そこに周辺から不要物の廃棄があり、土器の破片が残されたものであろう。したがって以下に記載する遺物の大半は直接この竪穴住居に生活した住人とは無関係と考えられる。

第17図53は竪穴覆土2層中から出土した土師器単口縁壺の口縁部片である。薄手のつくり。54は土坑2の上位1層中出土の甕胴部片で、胴部最大径は19.0cm。在地産胎土を用い、やや肩がはる形態を内外ともハケメ調整で仕上げ、その後内面下半からケズリ上げて薄くする。しかし内面上位には粘土紐の接合痕が残り、器厚も厚いままである。胴部外面下半は被熱して赤変し、中位には煤が帯状に付着する。55は土坑1の斜面に廃絶時に埋置された小型壺で完形品である。口径が胴部最大径より大きく、底部に上げ底風の平底をつくる。口径8.5cm以上、器高7.1cm以上、胴部最大径8.0cm。在地産胎土を用い、胴部内面は丁寧は工具を使ったナデ仕上げを行い、外面は縦方向のへう磨きでしあげる。外面に焼成時の黒班がある。口縁は端部全周が剥離しており、故意に打ち欠いたものである。56は戸の北側で10cmほど床から浮いて検出した小型壺の胴部片である。胴部最大径は8.6cmに復元される。在地産胎土を用い、頸部内面には口縁部の接合痕が残り、ハケメ調整の後丁寧にナデで仕上げる。57は貼り床内から出土した土師器甕の口縁部、中位でやや肥厚し、口唇単面を平坦に作りだす。胎土に金雲母が入っており、在地産ではない可能性がある。58は土坑2の上層に廃棄された凝灰岩質安山岩製の石皿の破片である。3面が欠けており、磨り面は1面のみである。残片で重さ3kg。59は同じく土坑2の上層に廃棄された安山岩製の磨石の



第19図 下坂西遺跡 2区
SH25平面図・見通し図(S=1/40)

2分の1破片である。上下両面に磨り面があり、一方の端部に叩き痕がある。7cm以上×9cm厚さ5cmの円礫を利用したもので、残片の重さは530g。60は竪穴北東部の床面に密着して残されていた完形の石皿である。凝灰岩質安山岩の自然礫を用い、1面のみ磨り面がある。長さ23.2cm、幅19.1cm、厚さ7.9cm、重さ4.5kg。

61もがのそばの床面に密着して残されていた完形の石皿である。凝灰岩質安山岩の自然礫を用い、1面のみ磨り面がある。長さ29.7cm、幅23.6cm、厚さ8.6cm、重さ9kg。そのほかに土師器と縄文土器の破片が出土している。

その中の一片の土師器はSK05出土土器(69)と同一個体である。

以上まとめると竪穴建物SH24は①地床がや壁面土坑の存在と床面積の規模から小型ながら住居として使用された。②上屋は2本柱構造で貼り床をおこなう竪穴建物である。③焼絶時には小型壺を埋置する儀礼がおこなわれている。④埋没過程で西方向から一括廃棄が行われている。⑤時期は土師器の形態から古墳時代前期後半である。

竪穴建物SH25(第19図 図版6上)

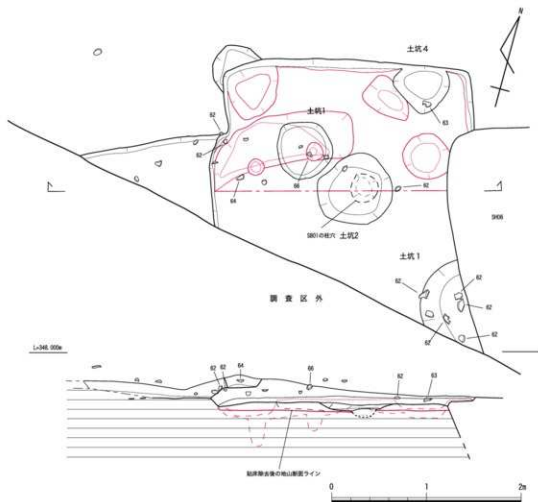
2区北東隅において検出した方形の竪穴建物と推定される遺構である。およそ南北1.5m以上東西1m以上、床面は平坦に作られている。壁は北側で20cmほど残っていた。床面は貼り床である。覆土からは縄文土器のほかに土師器の破片が40点ほど出土したが、図示できるものはない。

竪穴建物SH31(第20・21図 図版6)

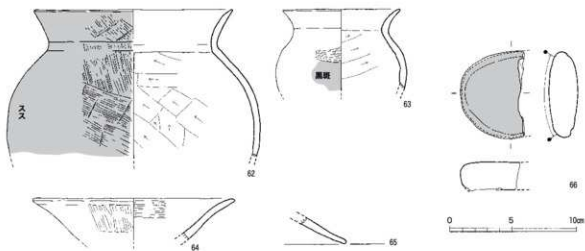
1区南端において検出した方形の竪穴建物で、竪穴遺構SH06に切られる。底面ではかつて南北3.0m以上、東西2.7mの長方形で床面積5.7㎡以上である。竪穴の方向は長軸で方位角76度。床面は傾斜のない平坦に作られている。壁は北側で25cmほど残っていた。本来はさらに高いものと考えられる。床面は厚さ10cm前後の基盤層由来の粘土ブロックをまじえた黒褐色粘質土を敷き詰めたしっかりした貼り床である。床面北半分を除去して竪穴の掘削状況を観察したところ壁に沿う形で10cmほど低くなった掘りくぼめ(平面図赤ライン)が数か所ある。柱穴と地床がはなく浅い土坑が4ヶ所貼り床の上から掘り込まれている。そのうち土坑1は壁面に接しており、土器片が土坑の底面に向かって落ち込むように見つかったので、焼絶時には開口していたものと推定される。

埋没の状態は浅いので不明である。この建物焼絶時に投棄された遺物は土坑1と4に廃棄された土師器62と63である。それ以外は覆土中に含まれたもので、この竪穴に伴う可能性は少ない。

第21図62は土坑4と竪穴全体に破片が散在していた土師器の甕である。口縁部先端を尖らし、外反する特徴がある。口径は15.6cmに復元され、胴部最大径は19.6cm。在地産胎土を用い外面ハケ調整で内面は頸部直下までヘラ削りで整える。口縁部外面まで破片全体に煤が付着する。63は土坑4の埋土中から出土した土師器小型壺の破片である。復元口径9.2cm、胴部最大径10.2cm。口唇部をとがらせる点は62の甕と共通する。胎土には在地産とは異なる大型粒子が含まれるので、他所で作られた可能性が高い。外面胴部にヨコハケがあり、内面はヘラ削りで仕上げる。64は覆土上位で出土した土師器高杯の口縁部片。復元口径は16cm。胎土は在地産。65は在地産胎土の土師器高杯の脚端部片。66は覆土上位で出土した安山岩製の磨石の2分の1破片である。磨り面は一面あり、4.7cm以上×6.9cm、厚さ2.3cmの円礫を利用したもので、残片の重さは88g。



第20図 下坂田西遺跡 1区 SH31平面図・見し図 (S=1/40)

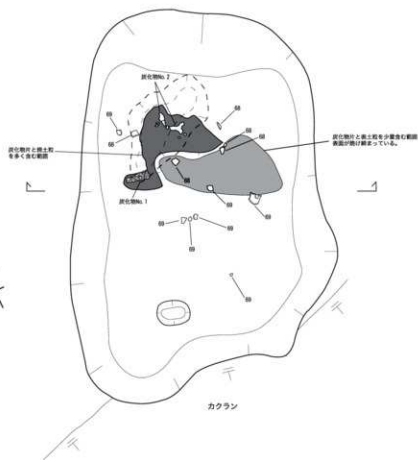


第21図 下坂田西遺跡 1区 SH31出土遺物 (S=1/3)

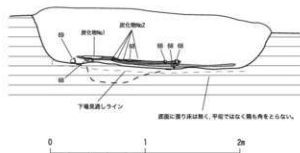
土坑SK05 (第22~24図 図版7)

1区東北部で検出した平面形不整長方形の土坑である。長さ4.1m、幅2.5m、深さ0.6mで、底面は緩やかに傾斜し比較的平坦に掘られているが、中央部は深くなっている。底面に柱穴や貼り床はなく、遺物の廃棄の状況からごみ捨て穴(廃棄土坑)として掘られたものと推定される。底面にはやや北側に偏って、焼土や炭片が堆積していた。それに混じって土師器片が数多く発見され、接合すると68や69の土師器甕に復元された。堆積土は、炭焼土土器片の混じる一括廃棄層(第23区2層)の上に灰褐色粘質土層(第23区1層)が厚く堆積する。1層からはほとんど遺物が出土しないことから、2層廃棄後一気に埋め戻された可能性が高い。

67は在地産胎土の甕口縁部の小破片である。端部をまるく取める。68は2層中に破片が散在していた甕の胴部上半片である。胴部はほぼ球形で最大径は26.4cmに復元される。胎土は石英の小粒子が含まれていて在地産とは異なっている。口縁内面から外面にかけてはハケメ調整、胴部内面はヘラケズリで薄く仕上げられる。胴部中位には煤が付着し実用品である、また同一個体の破片の一点が2区の竪穴建物SH24の北西部覆土中とS002から発見されている。69は同じく2層中に破片が散在していた甕の胴部上半片である。在地産胎土を用い、外面はハケメのつかない工具ナデ、内面はヘラ削りで、内面口縁屈折部の稜を削り取っている。同一個体と推定される破片が竪穴建物SH06東部の覆土から出土している。70は在地産胎土を用いた高坏の脚端部である。

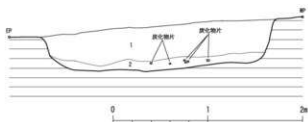


L=048.500m



第22図 下坂田西遺跡 1区 SK05 平面図・見通し図(S=1/40)

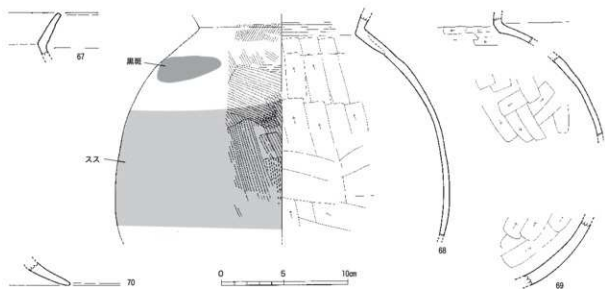
L=048.500m



図例 土層断片

1. 灰褐色粘質土 1.50/2.0 ぐくしまる φ1~3cmの炭土層とφ3~5cmの炭化燻焼土を少量含む
2. 炭褐色粘質土 1.50/2.0 ぐくしまる φ1~3cmの炭土層とφ3~30cmの炭化燻焼土を多く含む 土層断片を少量含む

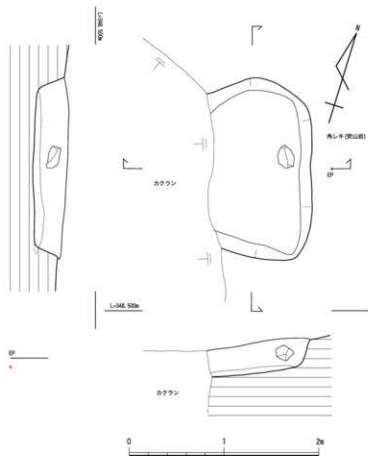
第23図 下坂田西遺跡 1区 SK05 東西土層図(S=1/40)



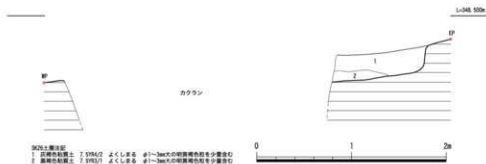
第24図 下坂田西遺跡 1区 SK05出土遺物(S=1/3)

土坑SK26 (第25・26図 図版7中)

2区北部で検出した平面形不整長方形の土坑で、西半を掘乱坑で失われている。長さ1.95m、幅1.05m以上、深さ0.4mで、底面は緩やかに傾斜するが比較的平坦に掘られている。覆土は2層に分かれ、ほかの堅穴と同じ質である。覆土からは縄文土器片のほかにも土師器の破片が数点出土した。



第25図 下坂田西遺跡 2区 SK26平面図・見通し図(S=1/40)

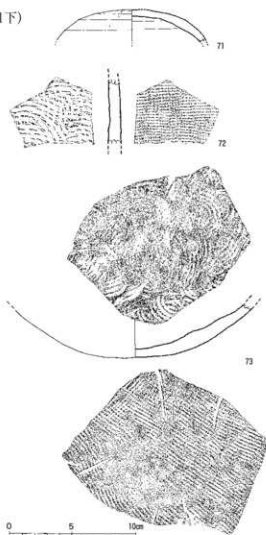


第26図 下坂田西遺跡 2区 SK26東西土層図(S=1/40)

第5節 古墳時代後期の遺物 (第27図 図版11下)

遺構検出時や基本層序第1層掘下げ中、あるいは壁面清掃中数点の須恵器が出土している。今回の調査区から遺構は発見されていないが、近接地に古墳時代後期の生活面があると推定される。

71は1区SH04の覆土上層より発見した須恵器環蓋の破片である。おそらく竪穴覆土上からのピットなどの掘り込みに入っていた遺物であろう。軸軸回転右方向のヘラケズリが施されている。古墳時代後期の製品。72は2区壁面清掃時出土の須恵器甕胴部片。外面は並行叩き、内面には同心円のあて具痕がこのころ。73は2区の竹田市教委による試掘トレンチ内に残されていた須恵器甕底部片。外面は並行叩き、内面には同心円のあて具痕。3点はいずれも胎土に石英などを含み、遠隔地から持ち込まれたものである。



第27図 下坂田西遺跡
古墳時代後期の出土遺物 (S=1/3)

第6節 中世の遺構

1区で2軒の掘立柱建物が発見されている。古墳時代前期の遺構とは方向を異にして、2軒はほぼ同じ向きで検出された。SB01は2×3間の建物と復元されるが、他方SB34は超小型の建物である。後者の建物の柱穴から出土した糸切底の土師質土器片からこれらの建物を中世の遺構と認定した。

掘立柱建物SB01 (第28図 図版7下)

1区南端で発見された2間以上×2間の掘立柱建物で、南端の柱穴は調査区外と推定される。南北5m以上東西4.7m、床面積は26.6㎡以上。古墳時代前期の遺構SH31の上から掘り込まれている。建物は南北に長く配置され長軸の方向は方位角15度である。検出した7本の柱穴の径は30ないし40cmの円形掘形で、深さは40cm以上である。柱穴の底の高さは傾斜に合わせて低くなっている。そのうち3本から柱痕を認めたいずれも円形で径20cmほどであった。埋土は黒色土で明瞭であった。遺物は土師質土器の小片のみで時期の特定はできないが、切りあい関係と埋土の新しさから中世の遺構と推定される。規模からみて居住用の建物とみられる。

掘立柱建物SB34 (第29図 図版7下)

1区北部で発見された1間×1間の掘立柱建物である。南北に長く長軸の方向は方位角24度。心々で南北1.8m、東西1.5m、傾斜面に立っているにもかかわらず柱穴の底面の高さは揃っている。床面積は2.6㎡。検出した4本の柱穴の径は30cmの円形掘形で、深さは30cm以上である。かなりの傾斜面に傾斜に合わせて南側が低くなっているため、もともと斜面上に建てられたものと推定される。埋土はSB01ほど黒色が強くないが、北西の柱穴SP21から糸切底の土師質土器小片が出土している。

第7節 成果と課題

今回の下坂田西遺跡の調査成果を時代別にまとめておきたい。

7-1 縄文時代

今回の調査区では遺構は発見されなかったが、遺物として縄文土器や石斧、石鏃が出土している。

特に中期の船元式土器の出土は、そのころの遺跡が竹田市内では希薄であるために貴重である。それをのぞくと大半の土器は後期後半の西平式から三万田式の土器であり、それは段丘面に集落が立地した時期のものである。第30図に示した竹田市調査個所の範囲がその時期の集落の中心部である。また集落が衰退した時期の晩期の土器が夜白式並行期まで認められることは、縄文時代の終末までなおこの段丘面に生活が継続したことを物語っている。

7-2 弥生時代

遺構は存在しないが、中期後半の下城式土器の壺と黒髪Ⅱ式の甕が出土したことは特筆される。下城式は大分県別府湾岸を中心とする海岸に広く分布する前期末から中期の土器形式で、黒髪Ⅱ式は熊本県に分布の中心を持つ土器である。ことに黒髪Ⅱ式の甕は胎土から見ても搬入品である。したがって九州の東西からこれ等の土器はやってきたといえ、この竹田市付近で両者は出会っていたといえよう。

弥生時代後期後半の遺構遺物は今回の調査では出土していないが、竹田市調査区では複数の堅穴遺構が発見されている。

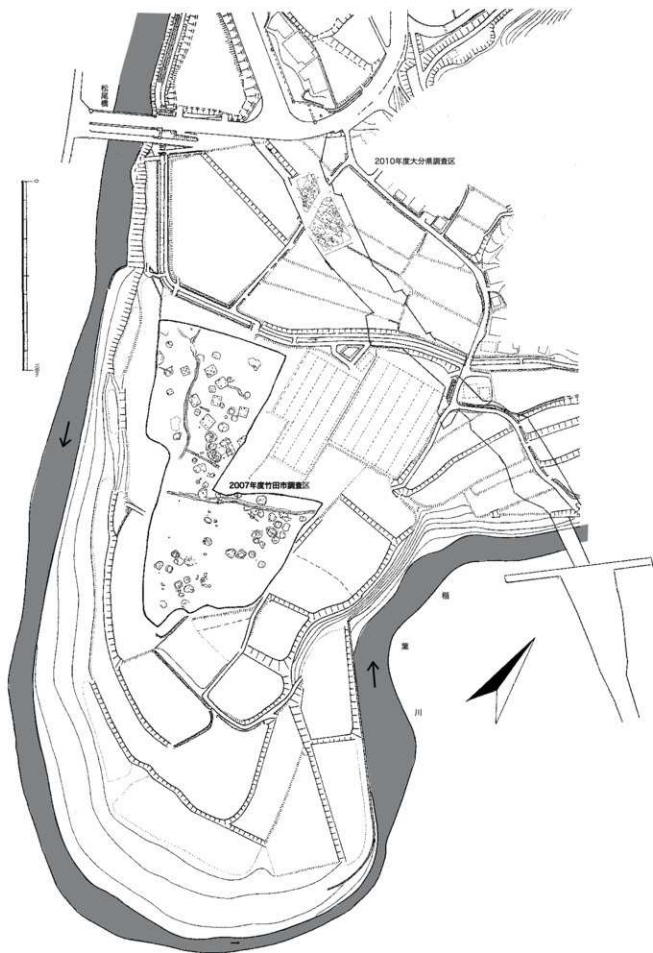
7-3 古墳時代前期後半

今回の調査区から発見された遺構の大半はこの時期のものである。下坂田西遺跡の所在する大野川上流域の土師器編年研究としては、稲葉川流域の南側の楠野から菅生台地の資料を用いた小柳和宏の研究（小柳1983・1984）が、もっとも詳細かつ現在でも訂正を要しない研究である。その後おこなわれた九州の編年網のなかに位置づけると第3表のようになる。下坂田西遺跡の出土土師器を比較するとS1E4の壺および小型丸底壺の形態は小柳ⅡB期に、SH04の高環、SH04の甕の内面に接合痕が顕著な点や、小型丸底壺の形態などからSH04は小柳ⅢA期に該当するものと考えられる。ほぼ古墳時代前期後半～末の時期である。

その土師器型式と土器の接合関係および遺構の切りあい関係から2区の堅穴建物S1E4と1区の堅穴建物S1B1・SH03などがⅡB期に、堅穴建物SH04・SH06・土坑SK05、小土坑SK22はⅢA期の遺構であると考えられ、今回の調査区としては以上前後に二期にわけられる。しかし各期に属する遺構が同時存在かどうかはなお検討を要する。

時間的な変遷はこれ以上追えないが、遺構の内容について注意される点を列挙する。

1) 小型堅穴の用途 2区のSH03やSH06、S1B1など無柱穴で規模が一辺2×3m前後で長方形を呈する堅穴建物が存在する。床面は貼り床で作られ中央に地床を設けたSH03やSH06の場合ほとんど寝る場所がなく、炊事場あるいは作業場であった可能性が考えられる。周辺に存在する上深追跡、下坂田東遺跡、下坂田西遺跡竹田市調査区でも類似の遺構が発見されている（城戸2011）。時期は弥生時代後期後半から古墳時代中期前半までに及ぶ。また炉の形態はやや異なるがほぼ同時期に存在した楠野遺跡においても存在する。小土坑が複数存在するS1B1については楠野遺跡第2号堅穴が類似する（玉永1983）。貯蔵用の堅穴であろうか。このように通常の居住用の建物であるS1E4やSH04とは異なる機能を有する建物が居住区の中に存在していることは明らかである。楠野遺跡では未調査の例をふくめて19堅穴中4基の建物がこのような小型堅穴であった。堅穴の性格が異なれば使用時間は異なるであろうが、かりに小型堅穴が通常の居住用堅穴建物の使用時間の二倍の長さ使用されたとすると、小型堅穴は二基の居住用の中小型堅穴に対して1基の割合が存在したと推定され、その場合には2つの世帯が一基の小型堅穴を共有したことになり、さらに例の少ない貯蔵用の小型堅穴は特別な世帯によって使用された施設という



第30図 下坂田西遺跡の遺構分布 (S=1/2000)

推定がなりたつ。共用・共有施設という観点から検討する必要がある。

2) 廃絶時の儀礼 堅穴建物の廃絶に際して、土器を廃棄する行為を伴う儀礼がおこなわれている。SH24の土坑1内への口縁全周を打ち欠いた小型丸底甕1個体の埋置と、SH06の甕を破壊して口縁部を逆さに置いた行為である。SH06の場合にはさらに堅穴を埋め戻した可能性を指摘でき、同じことはSK05についてもいえる。このような廃絶儀礼と埋め戻し行為は、最近堅穴建物では頻繁にみられることが、あきらかになっている(宮内2004)。近接する同時期の集落では楠野遺跡の2号・3号堅穴で同様なことが指摘されている。

7-4 中世

時期は詳細に限定できないが親切底をもつ土師質土器がともなう掘立柱建物跡が2棟発見されている。竹田市調査区においても、掘立柱建物や柱穴群、さらに土坑群が発見され、土師器の形態からは13世紀以前の遺構と考えられる。今回の調査区の遺構も同じ時代の可能性がある。

《文献》

玉永光洋編1983『楠野』(大分県文化財調査報告第63編)1983 大分県教育委員会

小柳和宏1983『土師の編年(古式土師器を中心として)』『楠野』(大分県文化財調査報告第63編)1983 大分県教育委員会

小柳和宏1984『土師器の編年の位置付け』『菅生台地と周辺の遺跡』IX 竹田市教育委員会

宮内克己2004『堅穴式住居跡の廃絶』『九州考古学』79 九州考古学会

城戸誠2011『上深迫遺跡 下坂田東遺跡 下坂田西遺跡』竹田市教育委員会

第2表 古墳時代前中期土師器編年対応表

時代	甲中 2006	久住 1999 2006	重藤 1995 2002	小柳 1983 1984	中西 飯部 2002	坪根 2010	標 識 資 料		
弥生時代 終末	庄内 並行期	I A I B					大分平野・別府湾岸	大野川上流域	下坂田西遺跡
	1	II A	I			土師器 I期	下郷90次SH020		
	2	II B		I A	II a期	守園19住・浜第7土器群	都野原田42堅穴		
	3	II C		I B	II b期	浜3号石棺・東田室 SH3205/SK1108	小園107住・都野原田44堅穴		
	4	III A	古	II	II	東田室 SH2109/SH4012	塚原堅穴群・都野原田 41/216B/213/32堅穴		
	5					新	東田室 SH3206/ SD1111a	小園110住・枚ノ原方形周溝 墓・都野原田53堅穴	SH24/SH31
6	III B	III A	III A		東田室 SH2101/SH2106	石井入口250住・塚原方門 形周溝墓・楠野3堅穴	SH04/SH06・SK05		
古墳時代 中期	集成5 (須恵器陶器)	III B	III B	1期	東田室 SH3205				
	集成6	TK73	IV	2 A期	下郷 SH01				
	集成7	TK216~208			大木 SH04				
	集成8	TK23 TK47	V	2 B期	植田市 SH05				
集成9	MT15	植田市 SH23							
後期				3期	植田市 SH11				

小柳和宏1983『土師の編年(古式土師器を中心として)』『楠野』大分県文化財調査報告63 大分県教委

小柳和宏1984『土師器の編年の位置付け』『菅生台地と周辺の遺跡』IX 竹田市教委

重藤輝行・西健一郎1995『埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性』『日本考古学』2 日本考古学協会

久住猛雄1999『北部九州における庄内式並行期の土器様相』『庄内式土器研究』X IX 庄内式土器研究会

重藤輝行2002『福岡県における古墳時代中期～後期の土師器』『古墳時代中・後期の土師器』発表要旨資料 九州前方後円墳研究会

中西尚一・飯部直和2002『古墳時代中期～後期の土師器一大分編一』『古墳時代中・後期の土師器』発表要旨資料 九州前方後円墳研究会

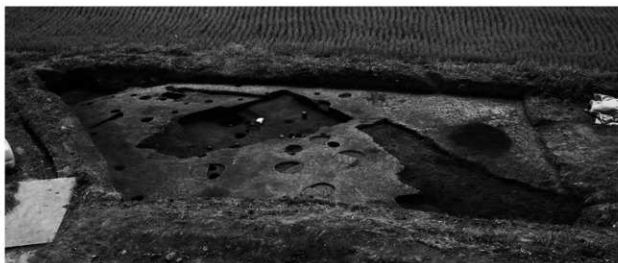
久住猛雄2006『土師器からみた前期古墳の編年』『前期古墳の再検討』発表要旨資料集 九州前方後円墳研究会

田中船分2006『九州の出現期古墳』『日本考古学協会2006年度愛媛大会発表資料集』

坪根伸也2010『弥生時代後期から古墳時代前期の土器による時期区分』『下部遺跡群』VII 大分市埋蔵文化財発掘調査報告100 大分市教委



1区全景



2区全景



2区東壁南北土層



土層細部



竖穴遺構SH02



竖穴建物SH03地床炉



SH03全景
(右端：SK27)



竖穴建物SH04全景



竖穴建物SH06全景



SH06土器出土状況1



SH06土器出土状況3



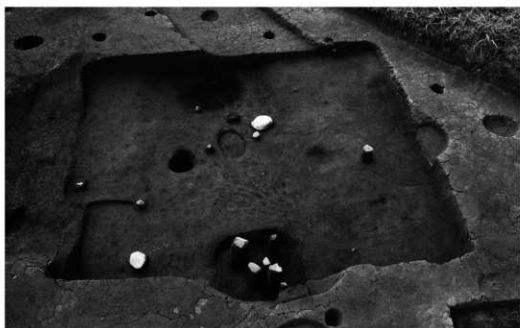
SH06土器出土状況2



SH06土層断面



SH06床面
掘下げ状況



竪穴建物SH24
全景（北から）



SH24全景
（東から）



SH 24 土層断面



SH 24 土坑 2、上層出土状況



SH 24 土坑 1、小型壺出土状況



SH 24 床面陥下状況



竪穴建物SH25



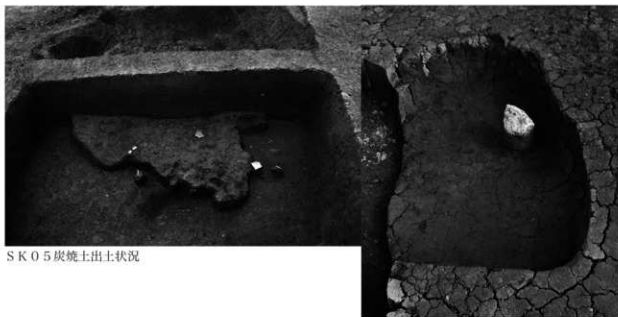
竪穴建物SH31
出土状況



SH31完掘状況



土坑SK05
完掘状况

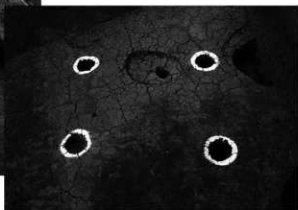


SK05炭烧土出土状况

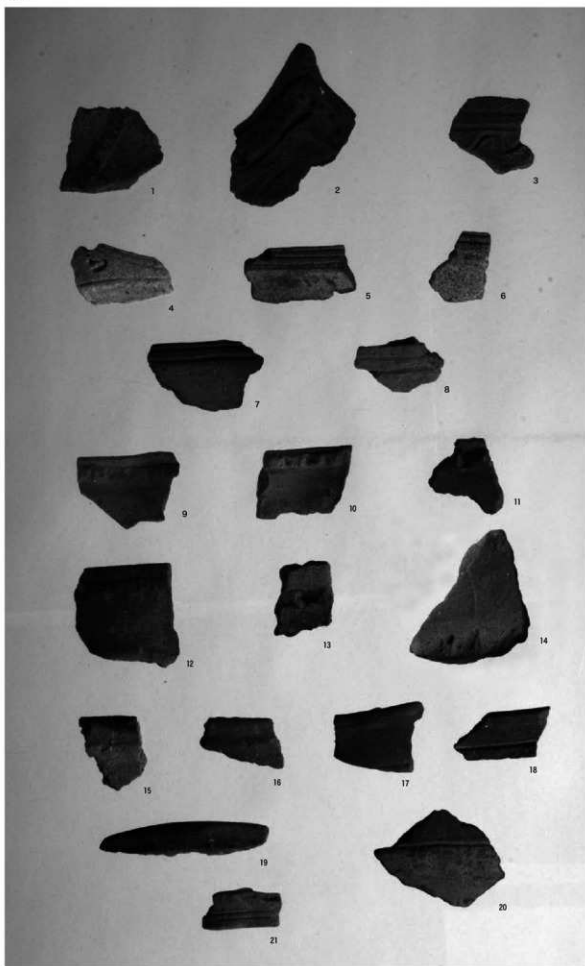
土坑SK26完掘状况



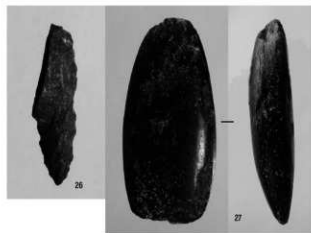
掘立柱建物SB01



掘立柱建物SB02

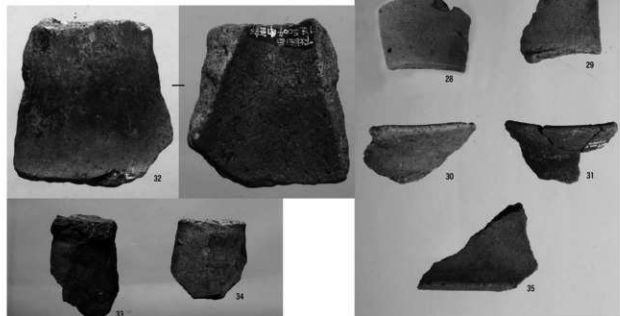


縄文・弥生時代の遺物

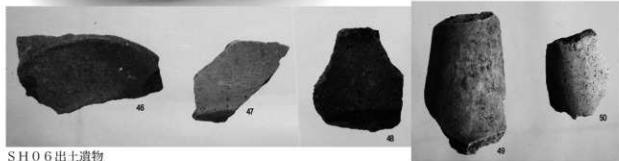


縄文・弥生時代の遺物

SH04出土遺物



SH06出土遺物



SH06出土遺物



SH24出土遺物

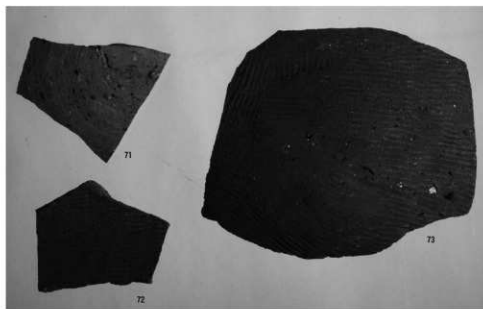




SH 2 4 出土遺物



SK 0 5 出土遺物



古墳時代後期
出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あいはいせき しもさかたにしいせき							
書名	相原遺跡 下坂田西遺跡							
副書名	県道638号白丹竹田線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第62集							
編著者名	江田 豊、田中裕介							
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター							
所在地	〒870-1113 大分県大分市大字中判田字ビワノ門1977番地							
発行年月日	2012年3月30日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
相原遺跡	竹田市大字志土知字相原	44208	208466	32 58 57	131 19 53	20100116 ～ 20100215	1200	道路工事
下坂田西遺跡	竹田市大字志土知字下坂田	44208	208173	32 59 2	131 19 40	20100729 ～ 20100830	517	道路工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
相原遺跡	集落	縄文時代 弥生時代 中世	竪穴建物跡1軒 柱穴155 土坑7 溝状遺構4	石鏃・石斧・石匙・磨石 凹石・剥片類・縄文土器 弥生土器・白磁・青花皿		なし		
下坂田西遺跡	集落	古墳時代前期 中世	竪穴建物跡5軒 掘立柱建 物跡2棟 土坑3基	土師器、石皿、中世土師質 土器		隣接地で調査された縄文時代 の遺構はこの地点にはなし。		
相原遺跡 要約	縄文時代後期後半の竪穴建物跡が確認された。溝状遺構は、縄文時代基底部で縄文晩期の土器が出土している。なお、溝には水が流れた痕跡は認められない。集落の区画を意識したものか、鹿掛に伴うものかは不明である。土坑は、中国製の輸入陶磁器が出土している。出土状況から窺った可能性が高い。柱穴類については、3×4間の掘立柱建物跡が確認されている。時期不明であるが、遺構検出の際に周辺から玉縁碗が採集されたことから中世の所産である可能性が高い。							
下坂田西遺跡 要約	竪穴建物からなる古墳時代前期の集落の一角を調査した。竪穴建物は方形平面で、4本柱あるいは2本柱、中央に軒がある形式と小型方形無柱穴で軒をもつ用途の異なる建物である。埋蔵時に土器を埋置する儀礼がおこなわれている。中世の建物2棟も発見された。またS304からは、アイゴの羽口に転用した土師器高杯片が出土している。							

相原遺跡・下坂田西遺跡

— 県道白丹竹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第62集

2012 (平成24) 年 3月30日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター

〒870-1113 大分市中判田1977

電話 097-597-5675

印刷 株式会社印刷社

〒874-0930 別府市光町8-28

電話 0977-21-1328